

# 泊発電所3号炉

## 耐震重要施設及び常設重大事故等対処施設の 基礎地盤及び周辺斜面の安定性評価について

### (補足説明資料)

令和5年10月18日  
北海道電力株式会社

: 枠囲みの内容は機密情報に属しますので公開できません。

1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
2. 解析用物性値に関する補足	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
2.5 地盤の支持力	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

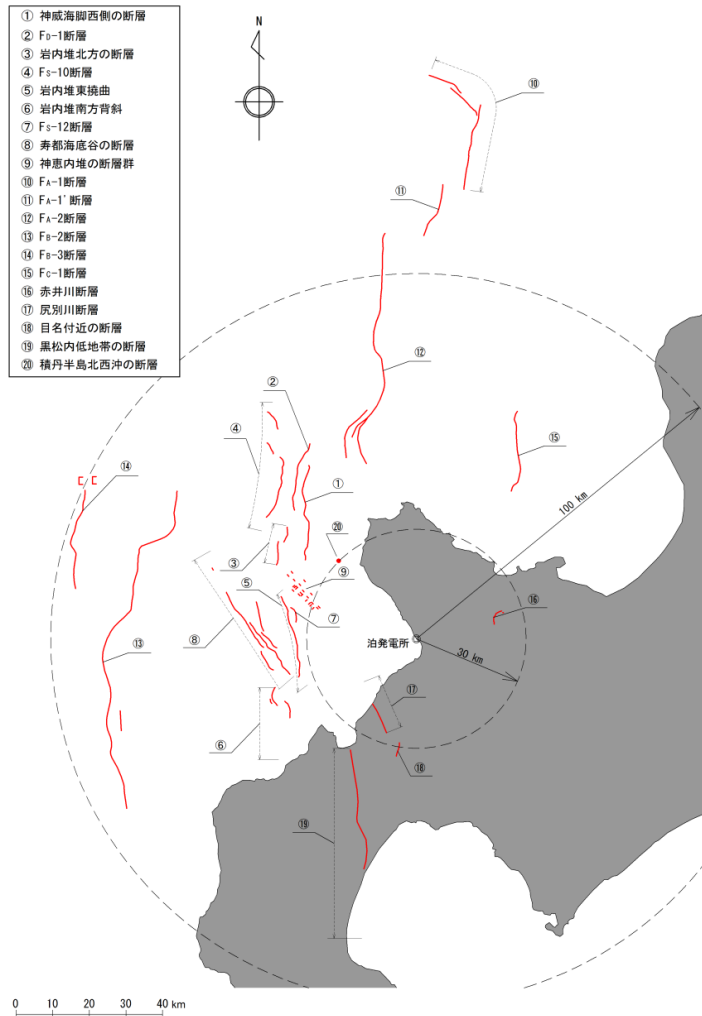
<b>1. 地質の概要に関する補足</b> .....	P. 3
<b>1.1 断層の分布</b> .....	P. 3
1.2 異方性 .....	P. 9
1.3 岩盤分類 .....	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b> .....	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値 .....	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値 .....	P. 45
2.3 断層の解析用物性値 .....	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値 .....	P. 75
2.5 地盤の支持力 .....	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲 .....	P.101
<b>3. 安定性評価に関する補足</b> .....	P.107
3.1 地中構造物の設置状況 .....	P.107
3.2 建屋のモデル化方法 .....	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面 .....	P.129
3.4 すべり安全率一覧 .....	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析) .....	P.205
<b>4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)</b> .....	P.221
<b>参考文献</b> .....	P.230

## 1.1 断層の分布

## ①敷地周辺の活断層分布

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 文献調査結果, 地形調査結果及び地質調査結果に基づき評価した敷地周辺の震源として考慮する活断層を下図及び下表に示す。  
○敷地近傍においては, 震源として考慮する活断層は認められない。



震源として考慮する活断層

震源として考慮する活断層一覧

断層番号	断層名	断層長さ (km)
①	神威海脚西側の断層 (F <sub>D</sub> -2断層, F <sub>S</sub> -11断層)	約31.5km
②	F <sub>D</sub> -1断層	約39km <sup>※1</sup>
③	岩内堆北方の断層 (F <sub>S</sub> -8断層, F <sub>S</sub> -9断層)	
④	F <sub>S</sub> -10断層 (F <sub>S</sub> -10断層, f1断層)	約98km <sup>※2</sup>
⑤	岩内堆東撓曲	
⑥	岩内堆南方背斜	
⑦	F <sub>S</sub> -12断層	約6.7km <sup>※3</sup>
⑧	寿都海底谷の断層 (F <sub>S</sub> -15断層~F <sub>S</sub> -19断層)	約42km
⑨	神恵内堆の断層群	- <sup>※3</sup>
⑩	F <sub>A</sub> -1断層	約48km <sup>※1</sup>
⑪	F <sub>A</sub> -1'断層	
⑫	F <sub>A</sub> -2断層	約65km
⑬	F <sub>B</sub> -2断層	約101km
⑭	F <sub>B</sub> -3断層	約45km
⑮	F <sub>C</sub> -1断層	約27km
⑯	赤井川断層	約5km <sup>※3</sup>
⑰	尻別川断層	約16km <sup>※3</sup>
⑱	目名付近の断層	約5km <sup>※3</sup>
⑲	黒松内低地帯の断層	約51km
⑳	積丹半島北西沖の断層 <sup>※4</sup>	- <sup>※3</sup>

※1 地形及び地質構造の連続性を考慮し, 一括評価。

※2 運動を考慮する断層として評価。

※3 孤立した短い活断層として評価。

※4 安全側の判断として, 積丹半島北西沖の断層による地震動を想定。

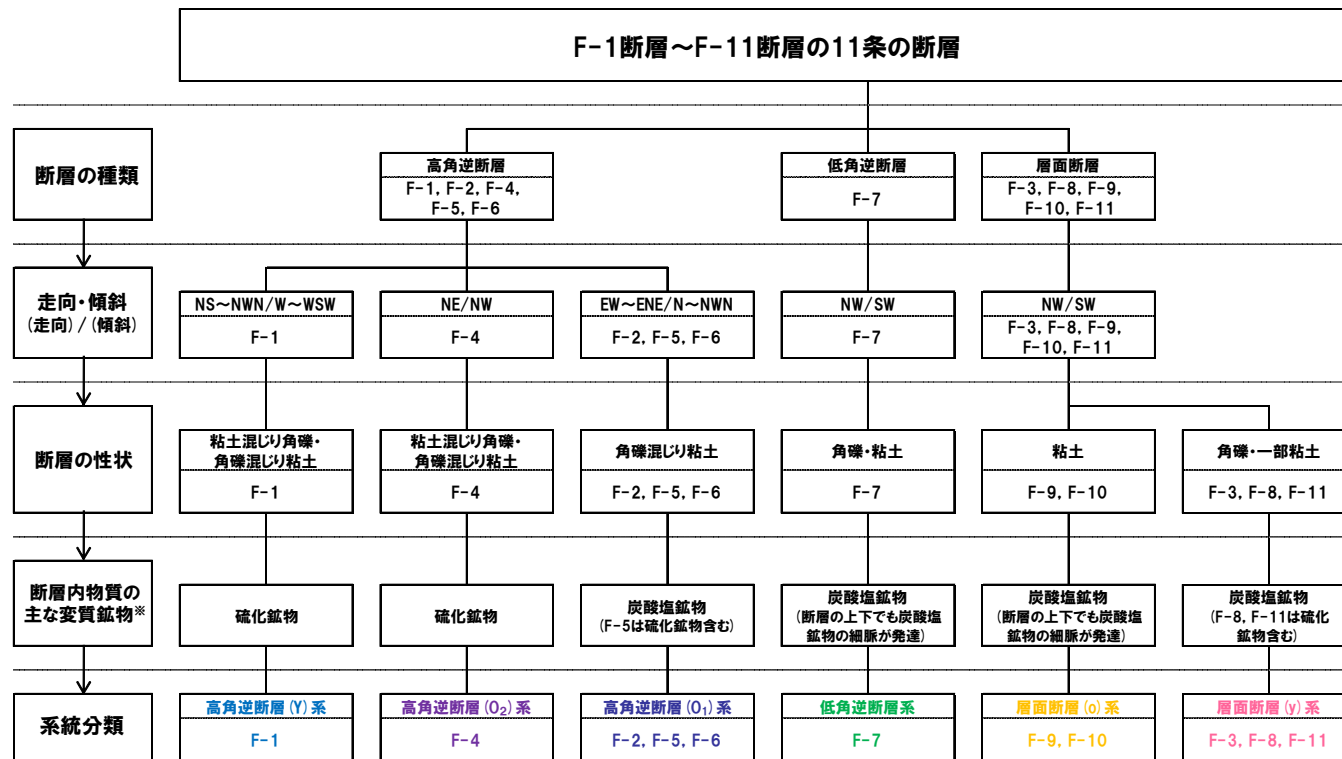


# 1.1 断層の分布

## ②敷地に認められる断層 (1/3)

一部修正 (H28/3/10審査会合)

- 敷地には、F-1断層～F-11断層の11条の断層が認められる(敷地の断層分布図は、次頁及びP25参照)。
- 各断層は、1,2号炉調査及び3号炉調査において、類似した性状を示し、同一とみなせる破砕部等の連続性が複数の位置で確認されるものを断層と定義し、認定した。
- 11条の断層は、断層の種類により高角逆断層、低角逆断層及び層面断層に分類され、それらは走向・傾斜、断層の性状及び断層内物質の主な変質鉱物から、さらに6つの断層系に分類される。
- 逆断層の取り扱い及び各断層系の名称の考え方については、以下のとおり。
  - ・層面断層以外の逆断層については、試掘坑又はボーリング調査において認められる傾斜角が45°以上のものを高角逆断層、45°未満のものを低角逆断層として取扱う
  - ・各断層系の名称は、以降に示す各断層系の新旧関係等に基づき、同様な断層の種類のうち、活動時期が相対的に新しいものにはYoung、古いものにはOldの頭文字である(Y)及び(O)を付記し、高角逆断層には大文字(Y, O)、層面断層には小文字(y, o)を付記する



断層の系統分類図

【層面断層の分類について】  
左記の断層の系統分類において層面断層は、「断層の性状」により、F-9断層及びF-10断層とF-3断層、F-8断層及びF-11断層に分類される。

【層面断層の系統分類の妥当性について】  
層面断層(o)系のF-9断層及びF-10断層は、F-7断層を超えて連続しないことから、その活動時期は、F-7断層より古い。  
層面断層(y)系のF-3断層、F-8断層及びF-11断層は、他の断層に切られている状況が認められず、その活動時期は相対的に新しい可能性が考えられる。  
上記の状況を踏まえると、層面断層はF-7断層より活動時期が古いものと、相対的に新しい可能性が考えられるものに分けられることから、左記の分類は妥当であると判断される。

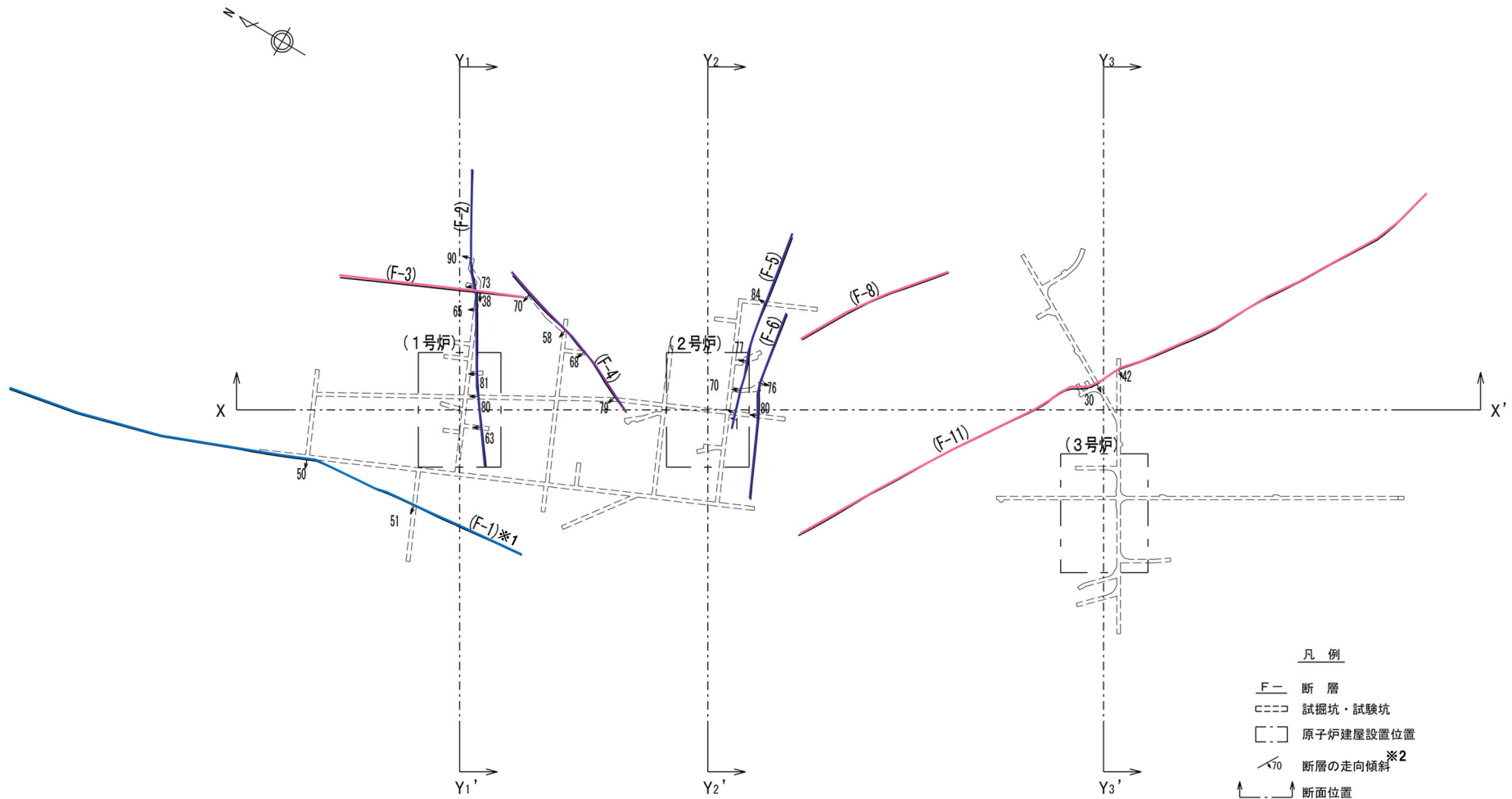
・なお、F-11断層の長さは1000m以上であり、層面断層(y)系の中で最も連続性が良い(最も規模が大きい)ことから、層面断層(y)系の活動性評価における代表とすることができる。

※X線分析において、母岩と比較して、ピークが出現する又は強いピークが認められる鉱物。  
・硫化鉱物:黄鉄鉱, 黄銅鉱  
・炭酸塩鉱物:菱鉄鉱, 方解石

## 1.1 断層の分布

## ②敷地に認められる断層 (2/3)

一部修正 (H28/3/10審査会合)



※1 F-1断層の線形については、F-1断層の活動性評価に関する追加調査結果を踏まえ、見直しを行っている。詳細については、R3.7.2審査会合資料「泊発電所3号炉 地盤（敷地の地質・地質構造）に関するコメント回答（補足説明資料）」5章参照。

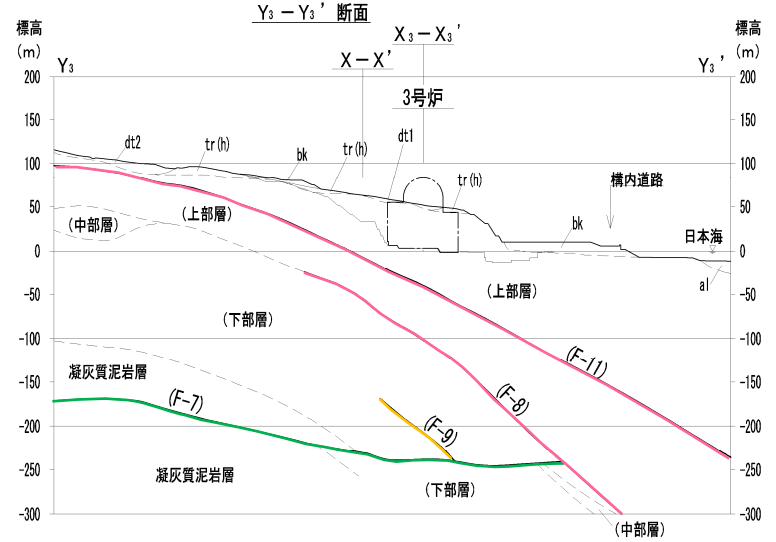
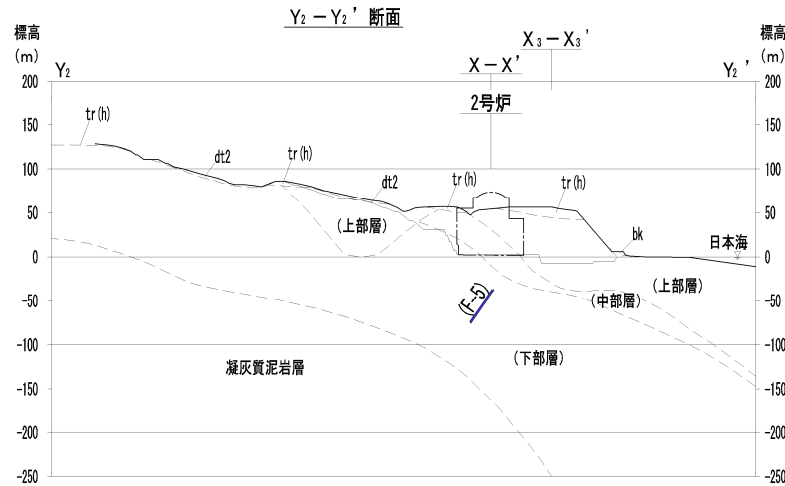
※2 試掘坑調査において確認された断層の走向傾斜を示す。

断層平面位置図 (断層位置はEL.2.8mで記載)

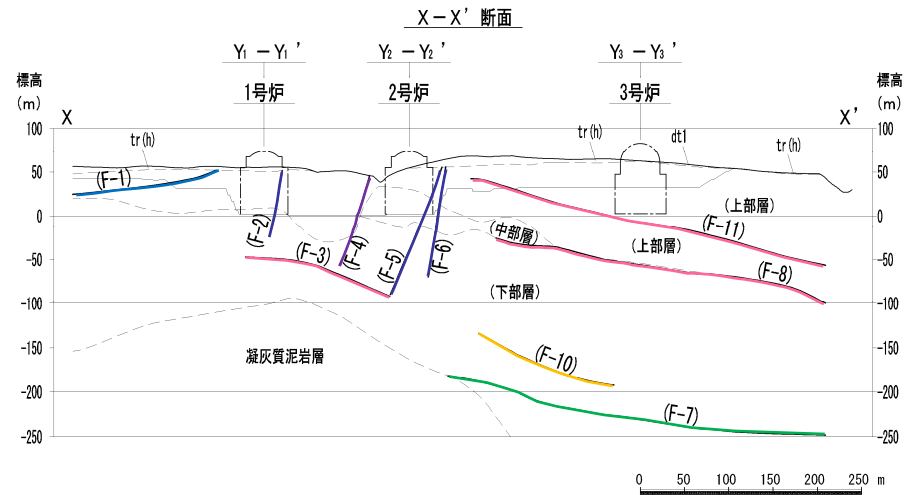
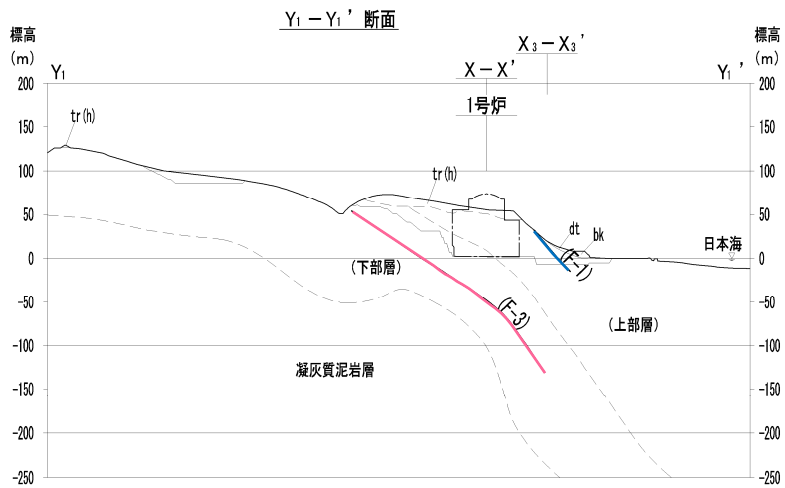
# 1.1 断層の分布

## ②敷地に認められる断層 (3/3)

再掲 (H28/3/10審査会合)



- 凡例
- (F-) 断層
  - - - 部層境界
  - bk 盛土
  - al 冲積層
  - dt2 崖錐II堆積物
  - dt1 崖錐I堆積物
  - tr(h) 高位段丘堆積物
  - 掘削形状



断層断面位置図

余白

<b>1. 地質の概要に関する補足</b> .....	P. 3
1.1 断層の分布 .....	P. 3
<b>1.2 異方性</b> .....	<b>P. 9</b>
1.3 岩盤分類 .....	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b> .....	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値 .....	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値 .....	P. 45
2.3 断層の解析用物性値 .....	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値 .....	P. 75
2.5 地盤の支持力 .....	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲 .....	P.101
<b>3. 安定性評価に関する補足</b> .....	P.107
3.1 地中構造物の設置状況 .....	P.107
3.2 建屋のモデル化方法 .....	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面 .....	P.129
3.4 すべり安全率一覧 .....	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析) .....	P.205
<b>4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)</b> .....	P.221
<b>参考文献</b> .....	P.230

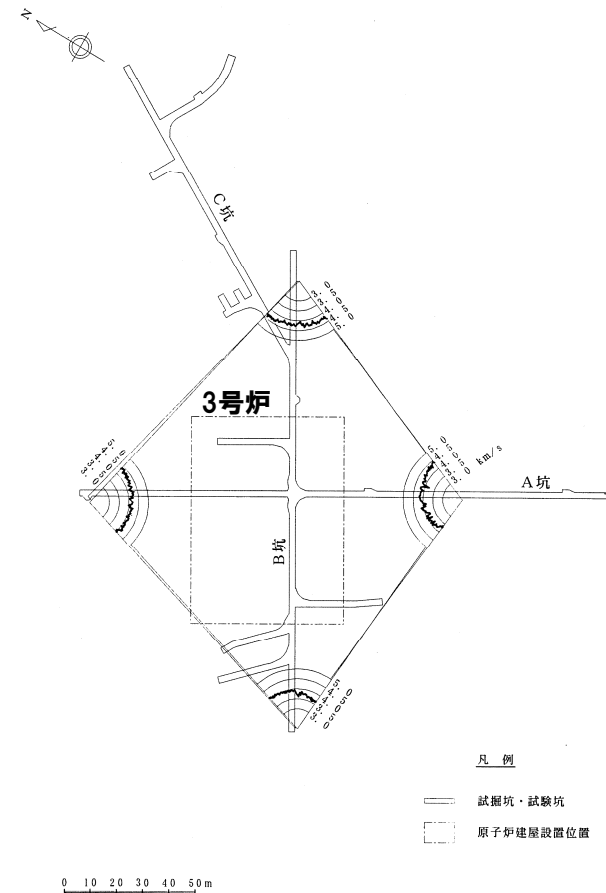
## 1.2 異方性

## 異方性の確認

○3号炉建設時に試掘坑内で実施した弾性波速度 (P波) の測定結果により, P波速度は平均値4.08km/s, 変動係数5.1%であり, 方向の違いによる弾性波速度の著しい差異がないことから, 有意な異方性は認められない。

弾性波試験結果

方向	個数	平均速度 (km/s)	標準偏差 (km/s)	変動係数 (%)
海山方向 (NE-SW)	140	4.05	0.24	5.9
海山直交方向 (NW-SE)	168	4.11	0.18	4.4
全体	308	4.08	0.21	5.1



弾性波速度分布図

<b>1. 地質の概要に関する補足</b> .....	P. 3
1.1 断層の分布 .....	P. 3
1.2 異方性 .....	P. 9
<b>1.3 岩盤分類</b> .....	<b>P. 11</b>
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b> .....	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値 .....	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値 .....	P. 45
2.3 断層の解析用物性値 .....	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値 .....	P. 75
2.5 地盤の支持力 .....	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲 .....	P.101
<b>3. 安定性評価に関する補足</b> .....	P.107
3.1 地中構造物の設置状況 .....	P.107
3.2 建屋のモデル化方法 .....	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面 .....	P.129
3.4 すべり安全率一覧 .....	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析) .....	P.205
<b>4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)</b> .....	P.221
<b>参考文献</b> .....	P.230

## 1.3 岩盤分類

### ①-1 岩盤分類基準:安山岩

- 岩盤に関する解析用物性値の設定に当たり、安山岩の岩盤物性は他の岩種に比べ硬質で割れ目が発達することから、割れ目の状態に影響される傾向があり、火砕岩類の岩盤物性は岩石の硬さに影響される傾向があることから、安山岩と火砕岩類の岩盤分類基準を別個に設定した。
- 岩盤分類基準は、「電研式岩盤分類(田中(1964)及び菊地(1975))」等を参考にして設定した。
- 安山岩の分類要素は「岩石の硬さ」、「割れ目の頻度」及び「割れ目の性状」とし、上位からA<sub>I</sub>～A<sub>V</sub>に分類した。

#### 岩盤分類基準(安山岩)

安山岩	
岩盤分類	特 徴
A <sub>I</sub>	割れ目は比較的少なく、割れ目は変質鉱物に充填されることが多いが、風化はほとんど認められず密着しており、全体として堅硬である。
A <sub>II</sub>	割れ目はやや多く、割れ目沿いに変質鉱物が充填し、風化はほとんど認められない。あるいは、割れ目が比較的少なく、割れ目沿いに風化による褐色化が認められる。全体として硬質である。
A <sub>III</sub>	割れ目は多く、割れ目沿いには風化による褐色化が認められ、部分的に開口することもあるが、全体として比較的硬質である。
A <sub>IV</sub>	割れ目が発達し、割れ目沿いには風化による褐色化および開口が認められ、軟質な粘土を挟むことがあり、全体としてやや軟質である。
A <sub>V</sub>	岩石は風化が進み、全体として軟質となり、しばしば粘土状～土砂状を呈する。割れ目はゆ着し不明瞭となっていることがある。



# 1.3 岩盤分類

## ①-2 岩盤分類基準：火砕岩類

○火砕岩類の分類要素は「岩石の硬さ」、「割れ目の頻度」及び「風化度」とし、上位からA～Eに分類した。

### 岩盤分類基準（火砕岩類）

火 砕 岩 類	
岩盤分類	特 徴
A	<p>岩石は風化変質をほとんど受けておらず新鮮・硬質である。</p> <p><u>凝灰角礫岩・凝灰岩</u> 主として下部層以深に分布している。割れ目が少なく、構成礫は安山岩質で、基質はち密である。</p> <p><u>角礫質安山岩</u> 割れ目が少なく、全体に硬質である。</p>
B	<p>岩石は風化変質をほとんど受けておらず新鮮・硬質であるが、全体としてA級より硬さがわずかに減少する。</p> <p><u>凝灰角礫岩・凝灰岩</u> 主として上部、中部層に分布している。割れ目が少なく、構成礫は安山岩質又はデイサイト質で、基質は比較的ち密である。</p> <p><u>角礫質安山岩</u> 割れ目が少なく、風化変質をしている部分もあるが、基質は比較的ち密である。</p> <p><u>軽石凝灰岩・含泥岩礫凝灰岩・凝灰質泥岩</u> 主として下部層以深に分布している。新鮮で、割れ目が少なく、比較的硬質である。</p>
C	<p>岩石は新鮮であるか、あるいは多少風化変質しており、全体としてやや軟質である。</p> <p><u>凝灰角礫岩・凝灰岩</u> 割れ目が少なく風化変質をほとんど受けていないが、岩石自体がやや軟質である。あるいは割れ目がやや多く風化変質をほとんど受けていないが、割れ目が少なく多少風化変質している。</p> <p><u>角礫質安山岩</u> 割れ目がやや多く、新鮮又は多少風化変質しているか、あるいは割れ目は少ないが多少風化変質を受けている。</p> <p><u>軽石凝灰岩・含泥岩礫凝灰岩・凝灰質泥岩</u> 割れ目が少なく風化変質をほとんど受けていないが、岩石自体がやや軟質である。</p>
D	<p>岩石は新鮮であるか、あるいは多少風化変質しており、全体として軟質である。</p> <p><u>凝灰角礫岩・凝灰岩</u> 割れ目がやや多く、風化変質を受けて褐色に変色している。</p> <p><u>角礫質安山岩</u> 割れ目は少ないが風化変質している。</p> <p><u>軽石凝灰岩・含泥岩礫凝灰岩・凝灰質泥岩</u> 割れ目が少なく風化変質をほとんど受けていないが、岩石自体が軟質である。 あるいは割れ目がやや多く風化変質をほとんど受けていない。</p>
E	<p>岩石は風化変質が著しく進み、固結度も著しく低下し、しばしば砂状及び粘土状を呈する。割れ目はゆ着し不明瞭となっていることがある。</p>

※角礫質安山岩、凝灰角礫岩及び含泥岩礫凝灰岩の「硬さ」については基質を評価。

# 1.3 岩盤分類

## ②-1 岩盤分類区分:安山岩

○岩盤の工学的性質に関係する地質要素を考慮し、安山岩について、それぞれ硬さ及び割れ目の状況(頻度、性状)に関する分類基準を策定し、各分類要素の組合せを考慮し、5段階(A<sub>I</sub>級~A<sub>V</sub>級)に岩盤分類区分を行った。

### 岩盤分類要素及び要素組合せによる岩盤分類区分(安山岩)

(ボーリングコア)

岩種	硬さ	基準	コアの長さ・形状	基準	割れ目の性状	基準
安山岩	a	硬質。ハンマーで打診すると澄んだ音~やや澄んだ音がし、反発感がある。	I	棒状コアで15cm以上のものが主体。	1	割れ目の風化・変質は認められず、密着している。
	b	比較的硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がする。	II	棒状コアで5~15cmのものが主体。	2	割れ目は変質鉱物が充填するが、割れ目沿いの風化はほとんど認められない。
	c	やや軟質。ハンマーで打診すると濁った音がする。カッターで削れる。	III	片状~短棒状コアで2~5cmのものが主体。	3	割れ目は変質鉱物が充填し、割れ目面で風化による褐色化が認められる。一部割れ目沿いの劣化・軟質化が認められる場合がある。
	d	軟質。ハンマーで打診すると著しく濁った音がする。指圧で変形する。	IV	2cm未満の角礫状又は土砂状を呈する。	4	割れ目沿いの褐色化が著しく、軟質な挟在物(粘土鉱物、流入粘土等)を挟むことがある。割れ目はゆ着により不明瞭となっていることがある。
	e	著しく軟質で指圧で容易に変形する。				

(試掘坑)

岩種	硬さ	基準	割れ目の間隔・ブロックの大きさ	基準	割れ目の性状	基準
安山岩	a	硬質。ハンマーで打診すると澄んだ音~やや澄んだ音がし、反発感がある。	I	20cm以上。	1	割れ目の風化・変質は認められず、密着している。
	b	比較的硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がし、割れる。	II	10~20cm。	2	割れ目は変質鉱物で充填されこう着しており、割れ目沿いの風化はほとんど認められない。
	c	やや軟質。ハンマーで打診すると濁った音がし、ピックが刺さる。	III	2~10cm。	3	割れ目は変質鉱物が充填し、こう着しているが、風化による褐色化が認められる。一部割れ目沿いの劣化・軟質化が認められる場合がある。また、部分的には開口している箇所がある。
	d	軟質。ハンマーで打診すると著しく濁った音がする。指圧で変形する。	IV	2cm未満又は岩片状。	4	割れ目沿いの褐色化が著しく、軟質な挟在物(粘土鉱物、流入粘土等)を挟むことがある。割れ目はゆ着により不明瞭となっていることがある。
	e	著しく軟質で指圧で容易に変形する。				

安山岩					
硬さ	割れ目の性状	割れ目の頻度			
		I	II	III	IV
a	1	A <sub>I</sub>	-	-	-
	2	A <sub>I</sub>	A <sub>II</sub>	A <sub>III</sub>	-
	3	A <sub>II</sub>	A <sub>III</sub>	A <sub>III</sub>	A <sub>IV</sub>
	4	-	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>
b	1	-	-	-	-
	2	A <sub>III</sub>	A <sub>III</sub>	A <sub>III</sub>	-
	3	A <sub>III</sub>	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>
	4	-	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>	A <sub>IV</sub>
c	1	-	-	-	-
	2	-	-	-	-
	3	-	-	A <sub>IV</sub>	-
	4	-	-	A <sub>IV</sub>	A <sub>V</sub>
d	1	-	-	-	-
	2	-	-	-	-
	3	-	-	-	A <sub>V</sub>
	4	-	-	A <sub>V</sub>	A <sub>V</sub>
e	-	A <sub>V</sub>			

# 1.3 岩盤分類

## ②-2 岩盤分類区分:火砕岩類

○岩盤の工学的性質に関係する地質要素を考慮し、火砕岩類について、それぞれ硬さ、割れ目の頻度及び風化度に関する分類基準を策定し、各分類要素の組合せを考慮し、5段階(A級～E級)に岩盤分類区分を行った。

### 岩盤分類要素及び要素組合せによる岩盤分類区分(火砕岩類)

(ボーリングコア)

岩種	硬さ	基準	コアの長さ・形状	基準	風化度	基準
火砕岩類	a	硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がする。カッターでは割れない。	I	棒状コアで10cm以上のものが主体。	α	割れ目沿いに薄く風化部分が認められることもあるが、全般的に新鮮な岩塊からなる。
	b	比較的硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がし、カッターでわずかに割れる。	II	片状～短棒状コアで2～10cmのものが主体。	β	割れ目沿いに褐色化、一部粘土化が進み、粘着力が多少減少している。岩石は内部まで弱風化を受けて岩質は多少軟らかい。
	c	やや軟質。ハンマーで打診すると濁った音がし、カッターで割れるが、千枚通しが貫入しにくい。	III	角礫状コアが主体であるが、棒状コアも含む。	γ	岩石全体としてかなり風化が進み軟質化しており、特に割れ目沿いの粘着力が減少し、土砂状を呈する部分もみられる。
	d	軟質。ハンマーで打診すると著しく濁った音がし、カッターで容易に割れ、千枚通しが容易に貫入する。	IV	2cm未満の角礫状又は土砂状を呈する。		
	e	著しく軟質で指圧で容易に変形する。				

火砕岩類					
硬さ	風化度	割れ目の頻度			
		I	II	III	IV
a	α	A	A	C	D
	β	A	B	C	—
	γ	—	—	D	—
b	α	B	B	C	D
	β	B	B	C	D
	γ	C	C	D	—
c	α	C	C	D	D
	β	C	C	D	D
	γ	D	D	E	E
d	α	D	D	D	E
	β	D	D	E	E
	γ	D	D	E	E
e	—	E			

(試掘坑)

岩種	硬さ	基準	割れ目の間隔・ブロックの大きさ	基準	風化度	基準
火砕岩類	a	硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がする。ハンマーの強打で割れる。	I	30cm以上。	α	割れ目沿いに薄く風化部分が認められることもあるが、全般的に新鮮な岩塊からなる。
	b	比較的硬質。ハンマーで打診すると少し濁った音がする。ピックの強打で跡がつく。	II	10～30cm。	β	割れ目沿いに褐色化、一部粘土化が進み、粘着力が多少減少している。岩石は内部まで弱風化を受けて岩質は多少軟らかい。
	c	やや軟質。ハンマーで打診すると濁った音がする。ピックの打撃で浅く刺さるが、千枚通しが貫入しにくい。	III	2～10cm。	γ	岩石全体としてかなり風化が進み軟質化しており、特に割れ目沿いの粘着力が減少し、土砂状を呈する部分もみられる。
	d	軟質。ハンマーで打診すると濁った音がする。ハンマーの打撃でピックが刺さり、千枚通しが貫入する。	IV	2cm未満又は割れ目が不明瞭。		
	e	著しく軟質で指圧で容易に変形する。				

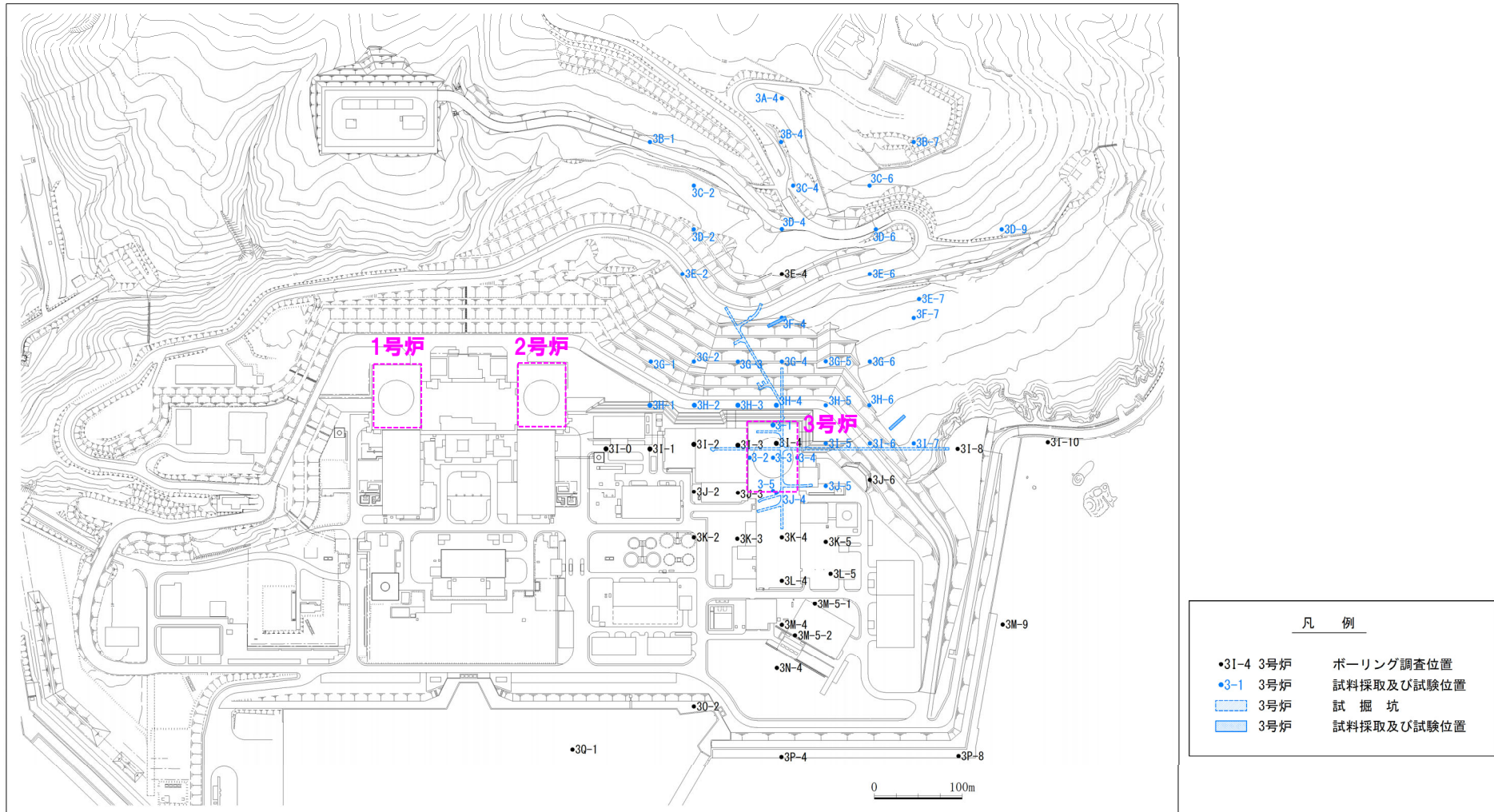
余白

1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b>	<b>P. 17</b>
<b>2.1 3号炉解析用物性値</b>	<b>P. 17</b>
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
2.5 地盤の支持力	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

## 2.1 3号炉解析用物性値

### 3号炉調査概要及び調査位置図

- 3号炉に対する各種岩石試験，岩盤試験及び土質試験を実施するため，3号炉建設時にボーリング調査，試掘坑調査等を実施した。
- 3号炉建設時におけるボーリング調査位置，試掘坑等を下図に示す。



調査位置図※

※3号炉建設時の発電所配置図を基に作成。

## 2.1.1 物理特性

### 密度：岩盤、表土及び埋戻土（3号炉解析用物性値）

○安山岩、火砕岩類、表土及び埋戻土（3号炉解析用物性値）の密度は、ボーリングコア、試掘坑等から採取した試料を用いて実施した密度試験における飽和密度の平均値を設定した。

密度試験結果（3号炉解析用物性値）

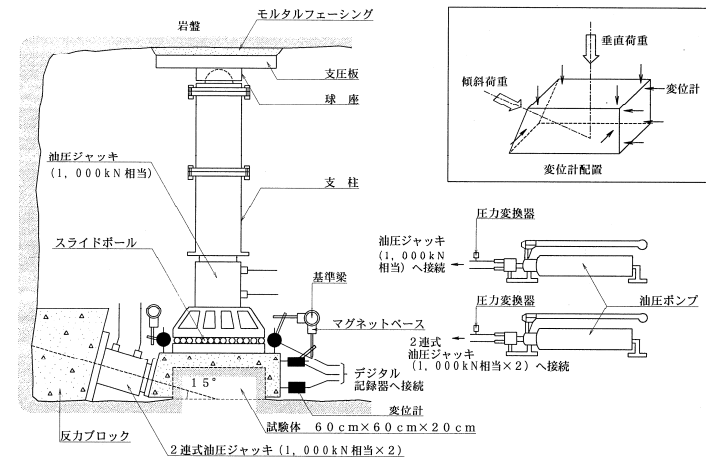
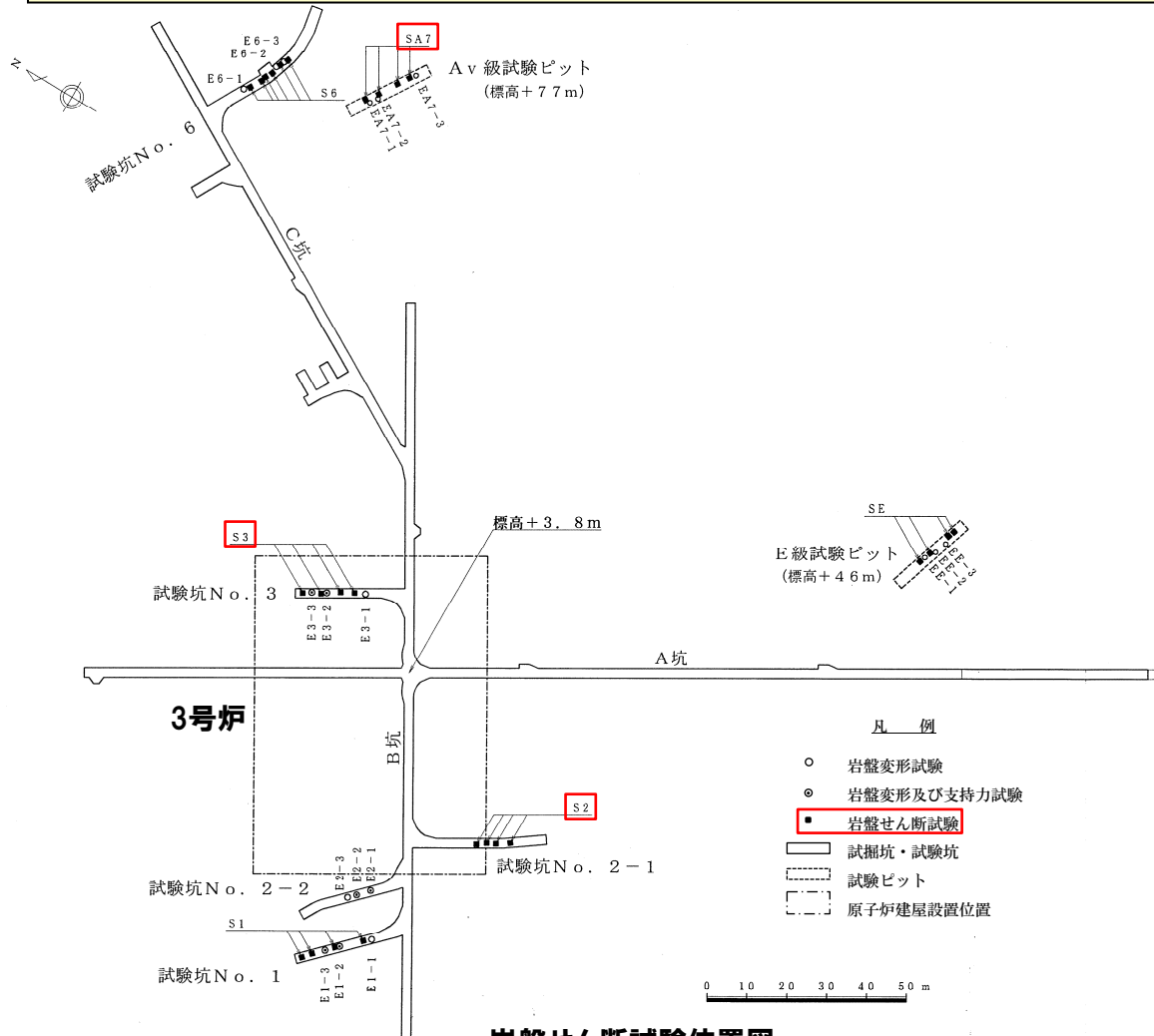
岩種	岩盤分類	試験個数	密度 (g/cm <sup>3</sup> )
安山岩	A <sub>I</sub> 級	239	2.67
	A <sub>II</sub> 級	63	2.64
	A <sub>III</sub> 級	81	2.62
	A <sub>IV</sub> 級	30	2.43
	A <sub>V</sub> 級	30	1.80
火砕岩類	A級	352	2.20
	B級	448	2.19
	C級	205	2.01
	D級	194	1.81
	E級	37	1.64
3号表土		70	1.81
3号埋戻土		6	2.35



# 2.1.2 強度特性

## ①強度特性:安山岩 (1/2)

- 安山岩の強度特性は、試掘坑内及び周辺斜面で実施した岩盤せん断試験及び摩擦抵抗試験の試験結果を用いて設定した(岩盤せん断試験結果及び摩擦抵抗試験結果は、次頁参照)。
- 安山岩のうちA<sub>II</sub>級及びA<sub>V</sub>級は、分布が小さいことから、下位岩級(A<sub>III</sub>級及びA<sub>V</sub>級)の強度特性を使用した(詳細は、P22参照)。



試験位置	岩種	岩盤分類
S2	安山岩	A <sub>III</sub> 級
S3	安山岩	A <sub>I</sub> 級
SA7	安山岩	A <sub>V</sub> 級



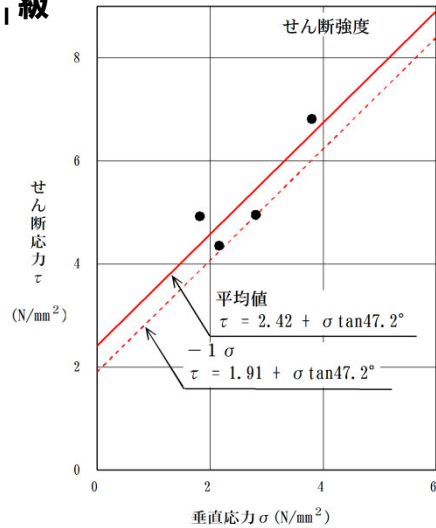
# 2.1.2 強度特性

## ①強度特性:安山岩(2/2)

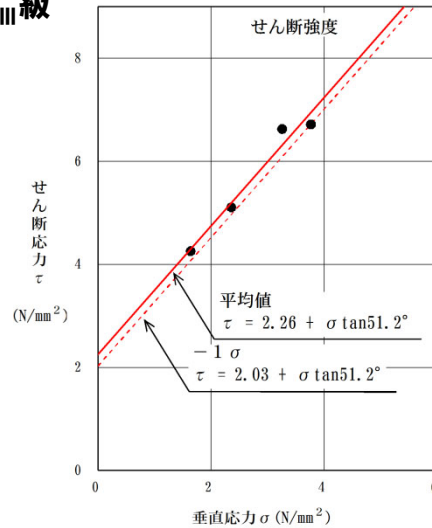
○安山岩(A<sub>I</sub>級, A<sub>III</sub>級及びA<sub>V</sub>級)の岩盤せん断試験結果(せん断強度)及び摩擦抵抗試験結果(残留強度)を以下に示す。

### 【せん断強度】

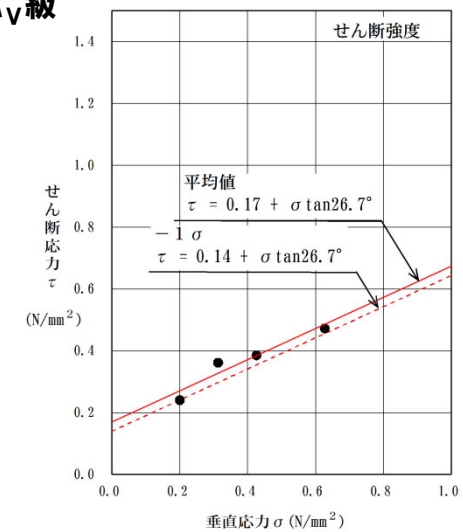
#### A<sub>I</sub>級



#### A<sub>III</sub>級

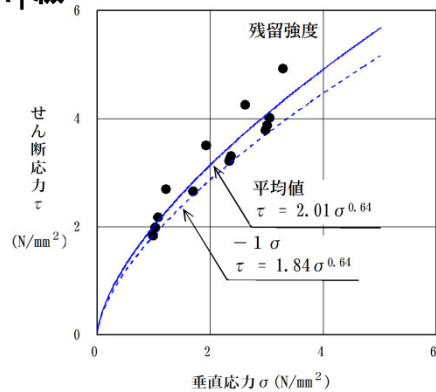


#### A<sub>V</sub>級

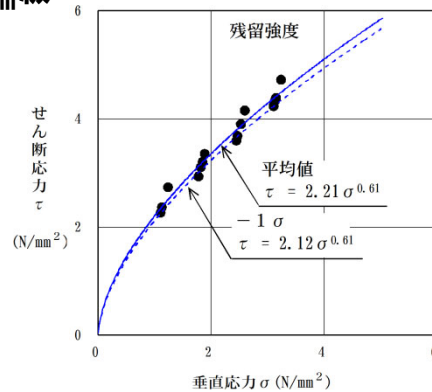


### 【残留強度】

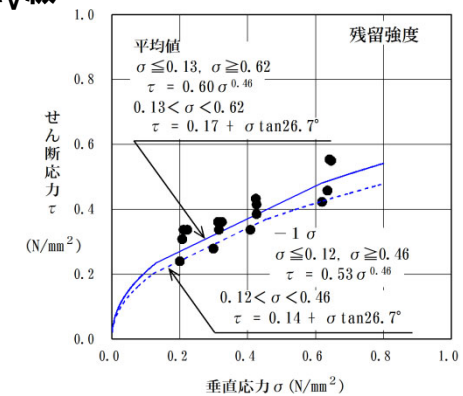
#### A<sub>I</sub>級



#### A<sub>III</sub>級



#### A<sub>V</sub>級

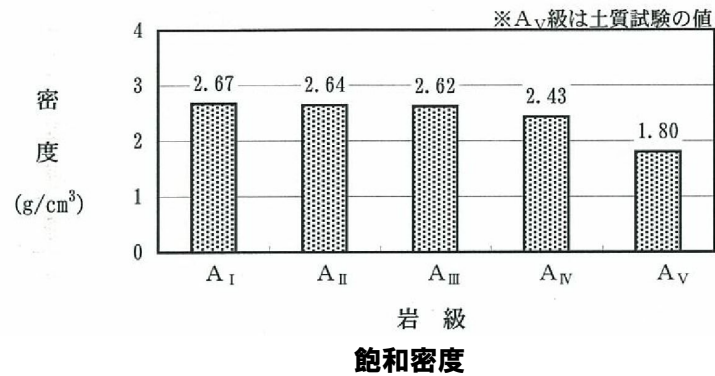


## 2.1.2 強度特性

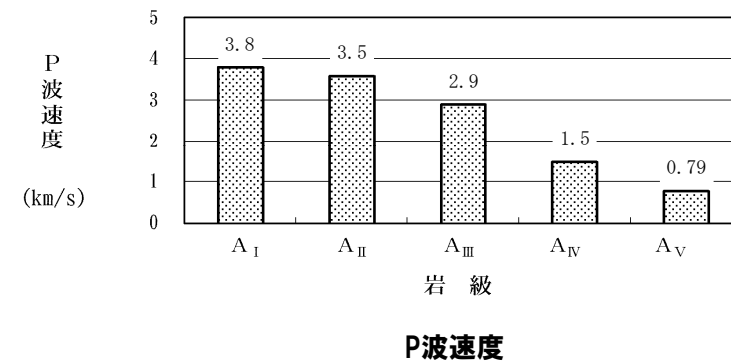
## (参考) 安山岩の解析用物性値の設定に関する補足

- 安山岩のうち分布が小さいA<sub>II</sub>級及びA<sub>IV</sub>級については、密度試験、孔内載荷試験及びPS検層結果から、上位岩級の物性が下位岩級(A<sub>III</sub>級及びA<sub>V</sub>級)を上回ることを確認している。
- 以上のことから、安山岩のうち分布が小さいA<sub>II</sub>級及びA<sub>IV</sub>級については、一部下位岩級の物性値を使用した。

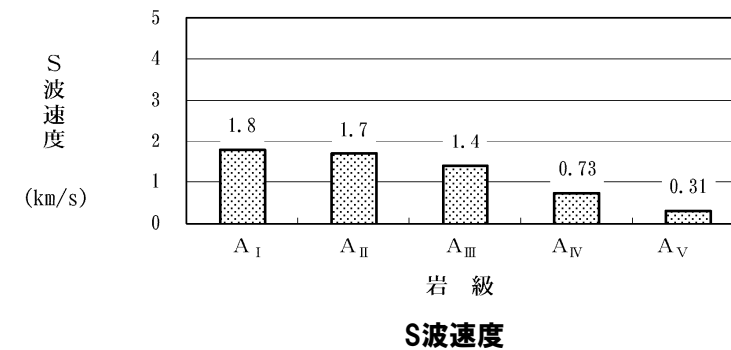
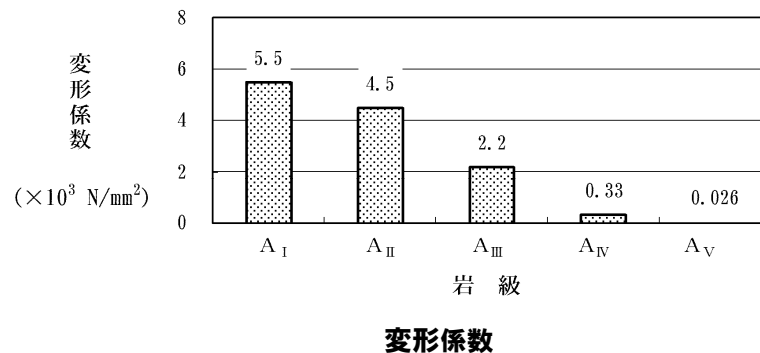
【密度試験】



【PS検層】



【孔内載荷試験】

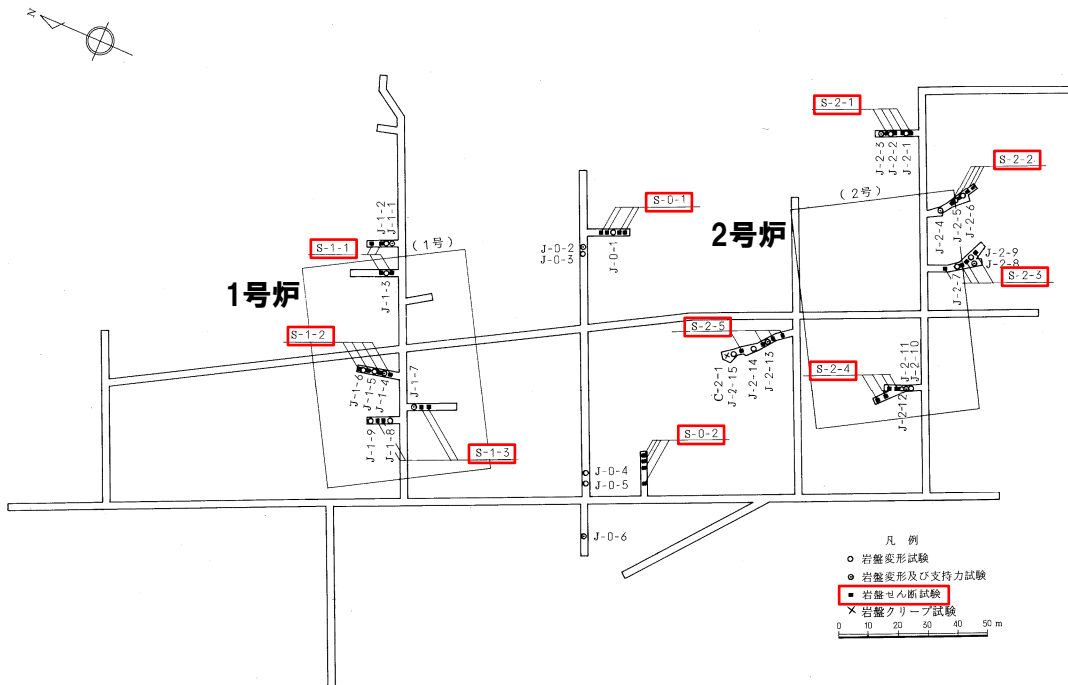


余白

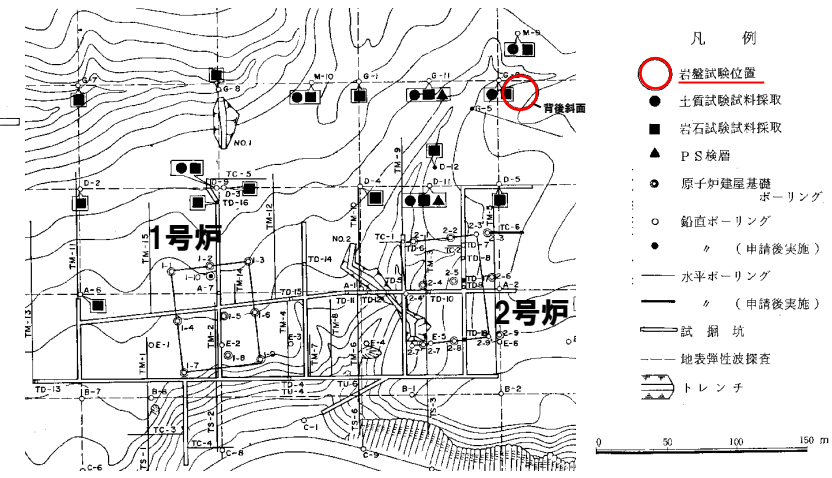
# 2.1.2 強度特性

## ②強度特性:火砕岩類 (1/4)

- 火砕岩類の強度特性は、試掘坑内及び周辺斜面で実施した岩盤せん断試験及び摩擦抵抗試験の試験結果を用いて設定した(岩盤せん断試験結果及び摩擦抵抗試験結果は、P26~P27参照)。
- 1,2号炉建設時に実施した岩盤せん断試験位置を以下に、3号炉建設時に実施した岩盤せん断試験位置等を次頁に示す。



岩盤せん断試験位置図 (1/2)



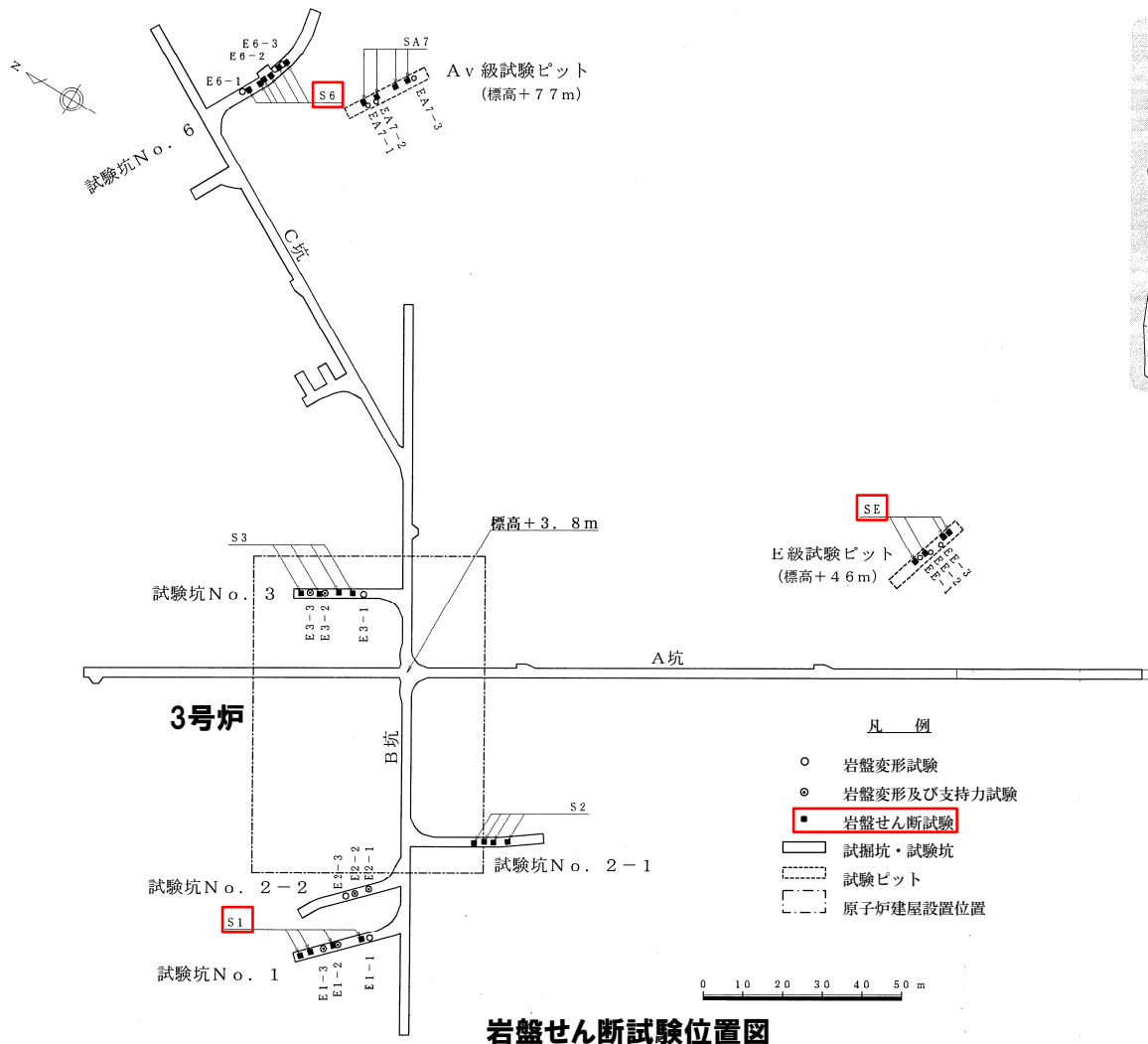
岩盤せん断試験位置図 (2/2)

岩盤分類	試験位置	岩盤分類	試験位置
A級	S-1-1	C級	S-0-1
	S-1-2		S-2-5
	S-2-1	背後斜面	
B級	S-1-3	D級	S-0-2
	S-2-2		背後斜面
	S-2-3		
	S-2-4		

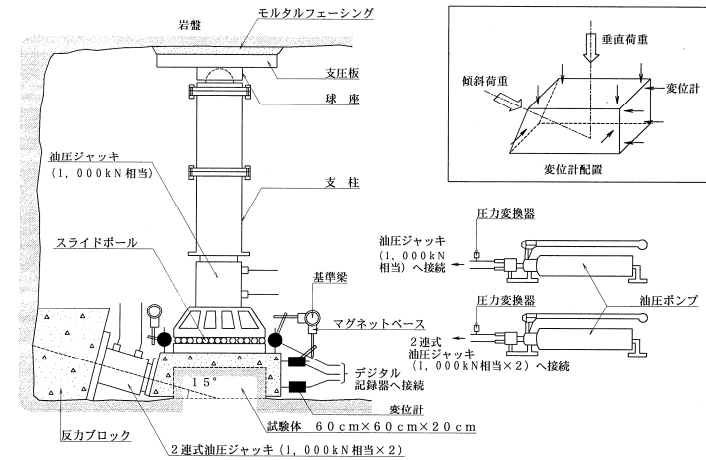
# 2.1.2 強度特性

## ②強度特性:火砕岩類 (2/4)

○3号炉建設時に実施した岩盤せん断試験位置を以下に示す。



岩盤せん断試験位置図



岩盤せん断試験概要

岩盤分類	試験位置
B級	S1
D級	S6
E級	SE

# 2.1.2 強度特性

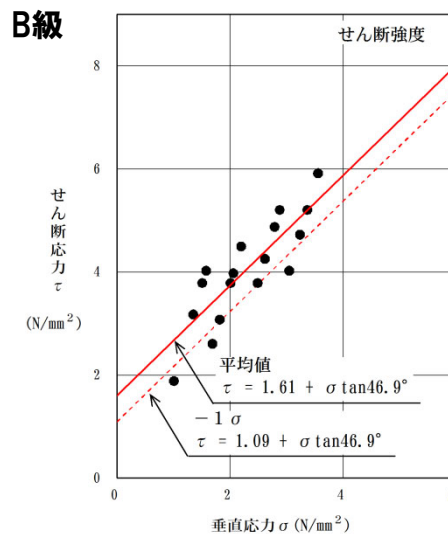
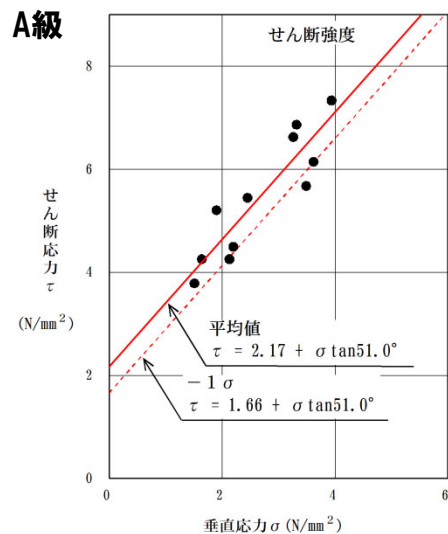
## ②強度特性:火砕岩類 (3/4)

○火砕岩類 (A級※<sup>1</sup>及びB級※<sup>2</sup>) の岩盤せん断試験結果 (せん断強度) 及び摩擦抵抗試験結果 (残留強度) を以下に示す。

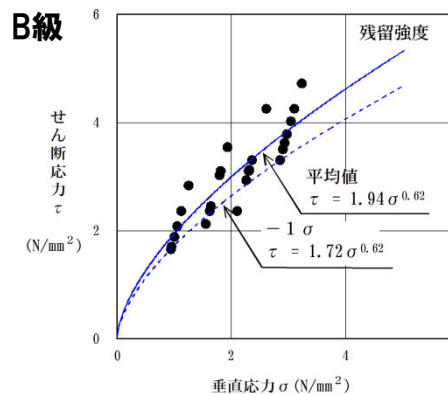
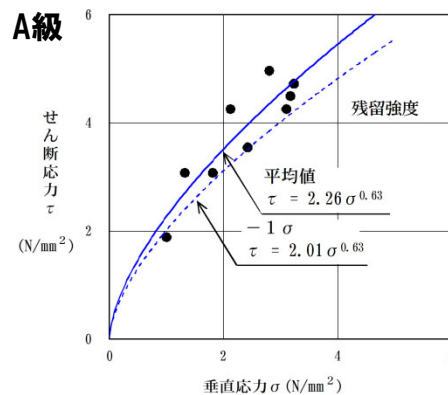
### 【せん断強度】

※1 1,2号炉建設時に実施した試験結果。

※2 1,2号炉建設時及び3号炉建設時に実施した試験結果。



### 【残留強度】

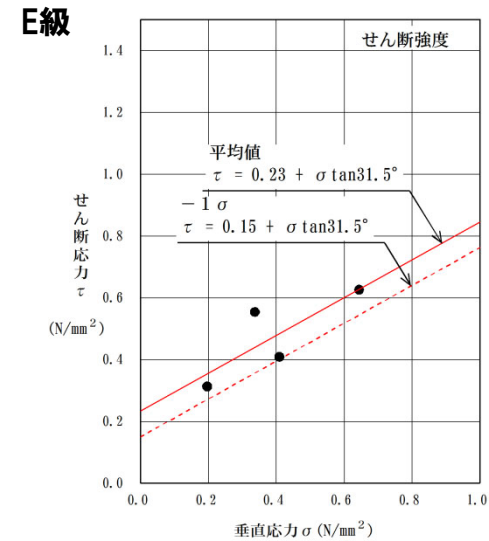
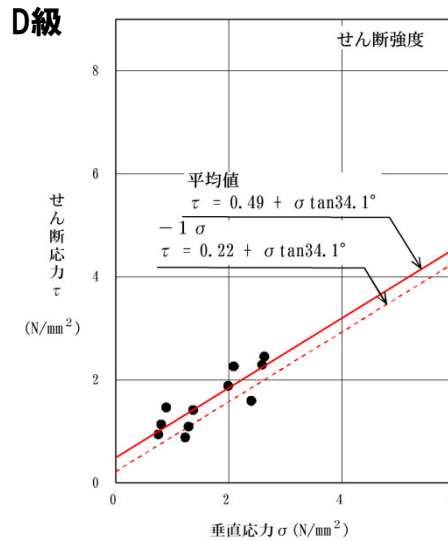
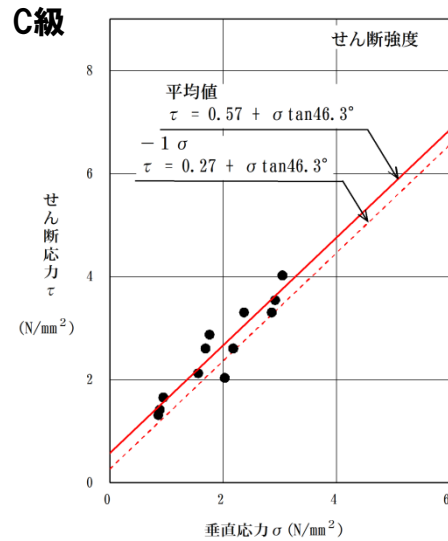


# 2.1.2 強度特性

## ②強度特性:火砕岩類 (4/4)

○火砕岩類 (C級※1, D級※2及びE級※3) の岩盤せん断試験結果 (せん断強度) 及び摩擦抵抗試験結果 (残留強度) を以下に示す。

### 【せん断強度】

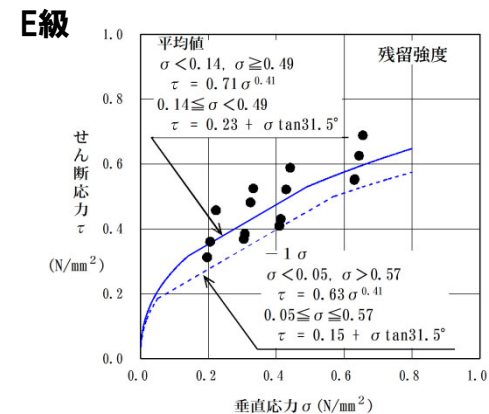
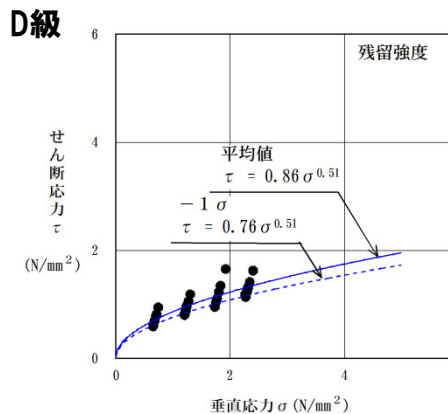
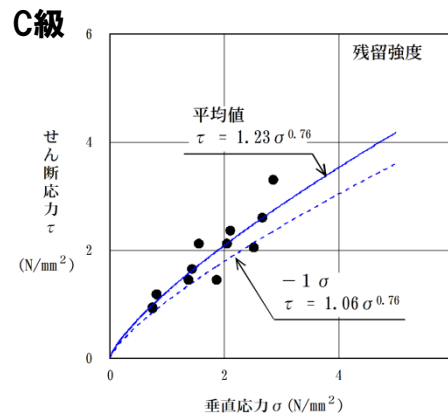


※1 1,2号炉建設時に実施した試験結果。

※2 1,2号炉建設時及び3号炉建設時に実施した試験結果。

※3 3号炉建設時に実施した試験結果。

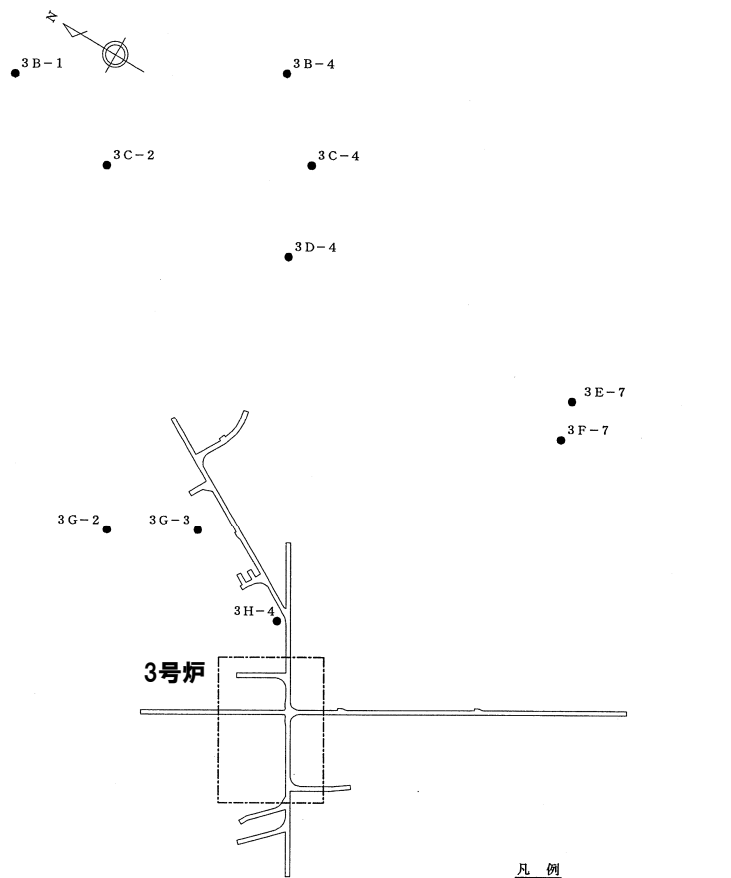
### 【残留強度】



# 2.1.2 強度特性

## ③強度特性:3号表土(1/2)

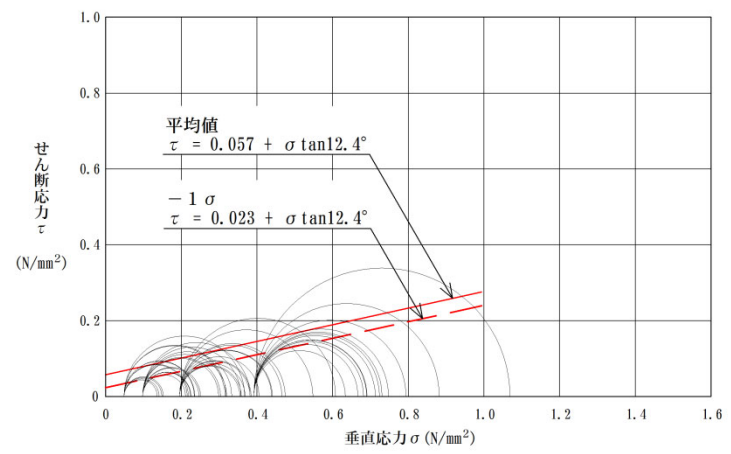
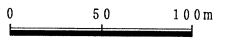
○3号表土の強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○残留強度は、応力～ひずみ関係(次頁参照)において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



3号炉

- 凡例
- 試料採取ボーリング孔
  - 原子炉建屋設置位置

試料採取位置図

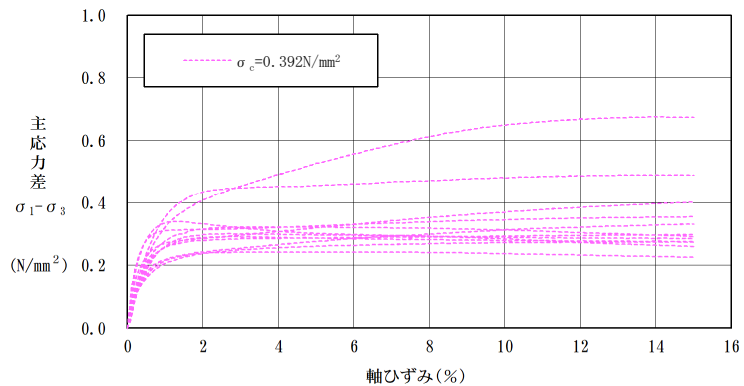
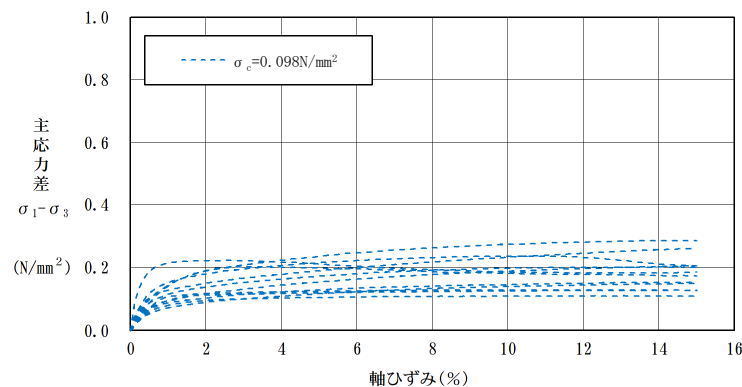
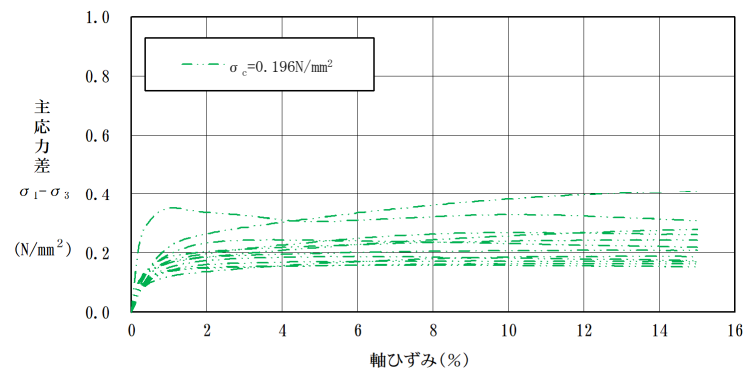
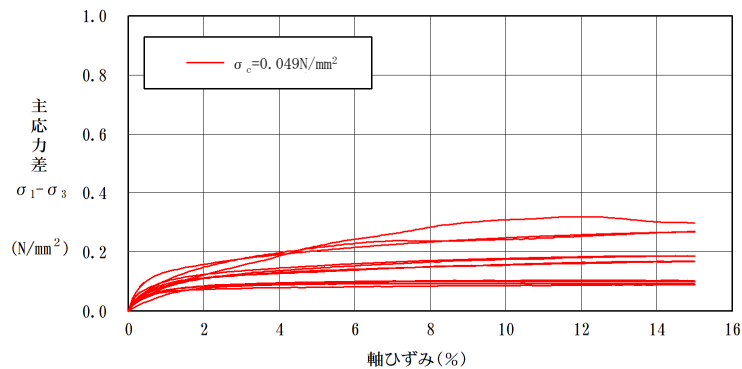


三軸圧縮試験結果(破壊包絡線)



## 2.1.2 強度特性

## ③強度特性:3号表土(2/2)

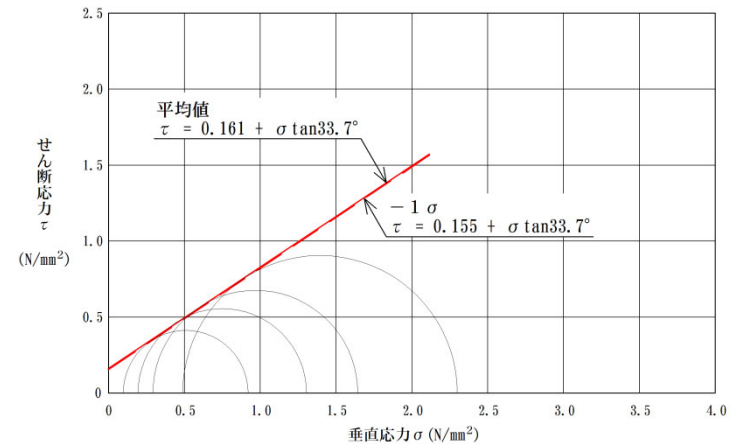
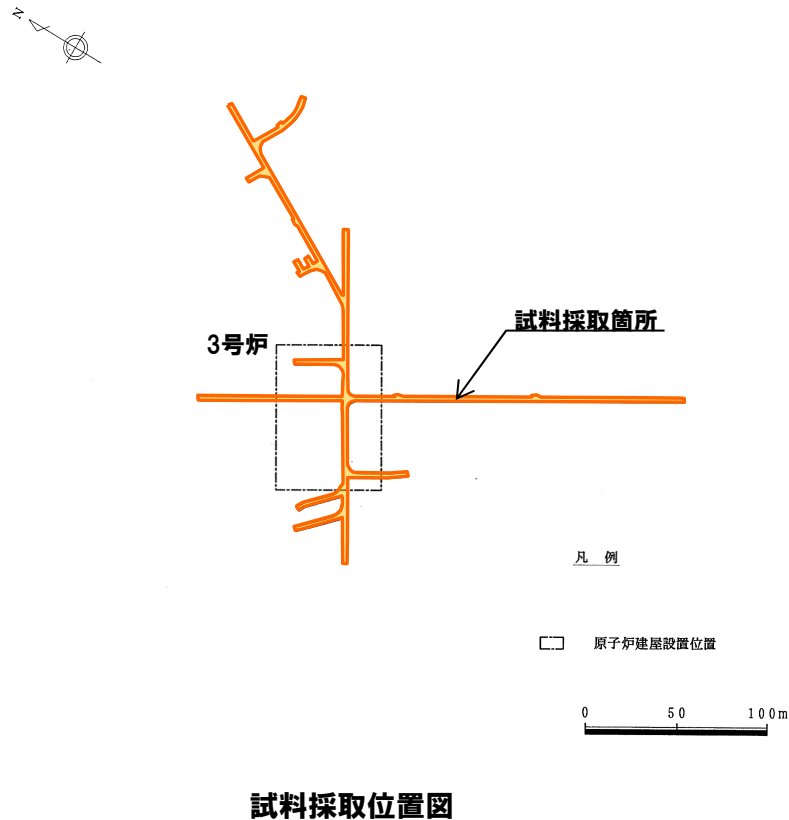


三軸圧縮試験結果(応力～ひずみ関係)

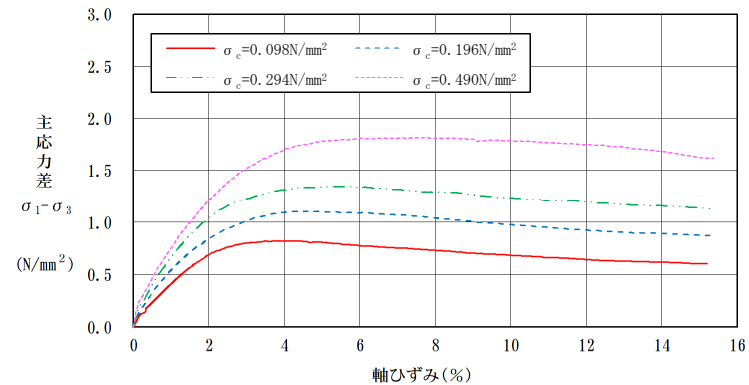
# 2.1.2 強度特性

## ④強度特性:3号埋戻土

- 3号埋戻土の材料(岩砕)は、安山岩主体であり、3号炉原子炉建屋、タービン建屋等及びそれらに付帯する諸設備の敷地造成並びに基礎掘削から発生したものである。
- 3号埋戻土の強度特性は、3号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



大型三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)

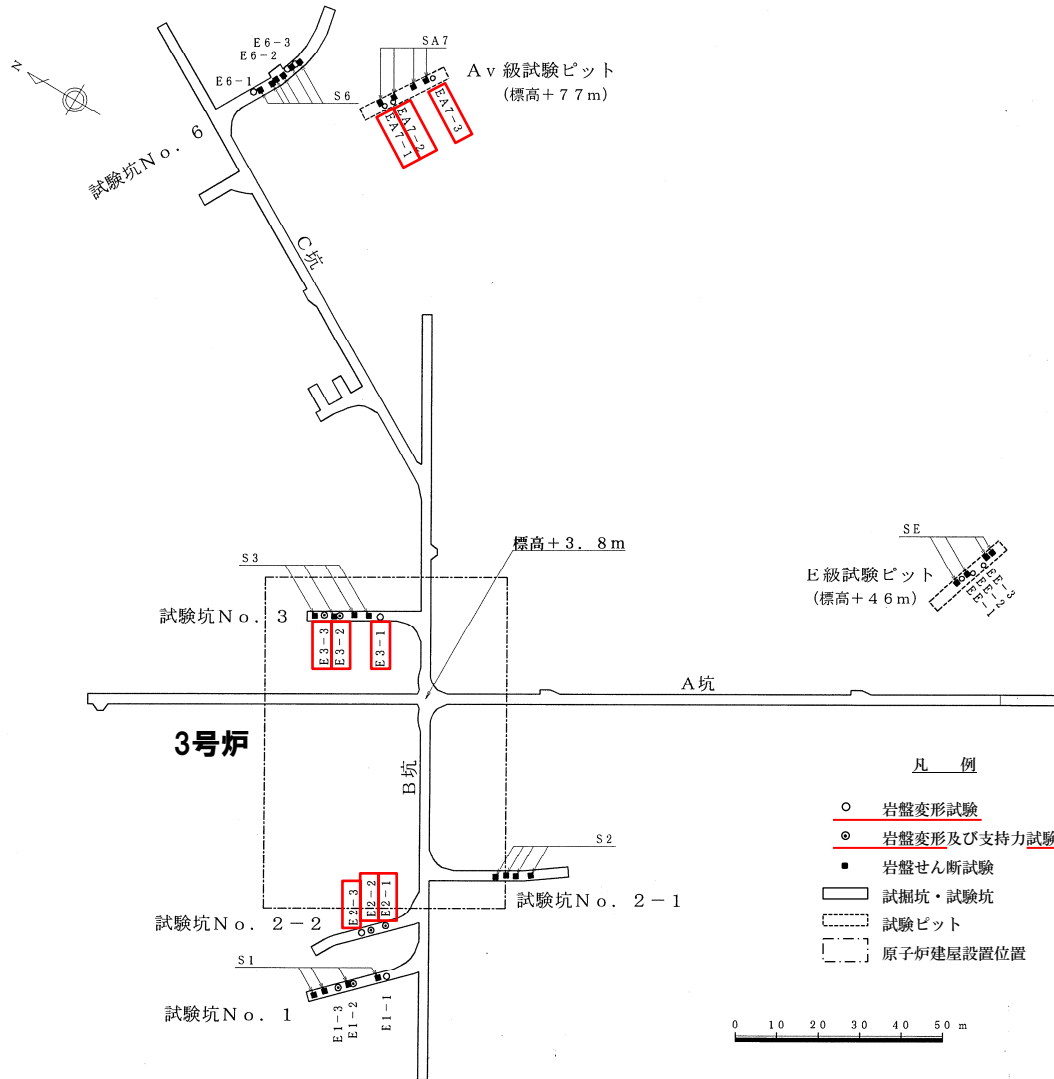


大型三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

# 2.1.3 静的変形特性

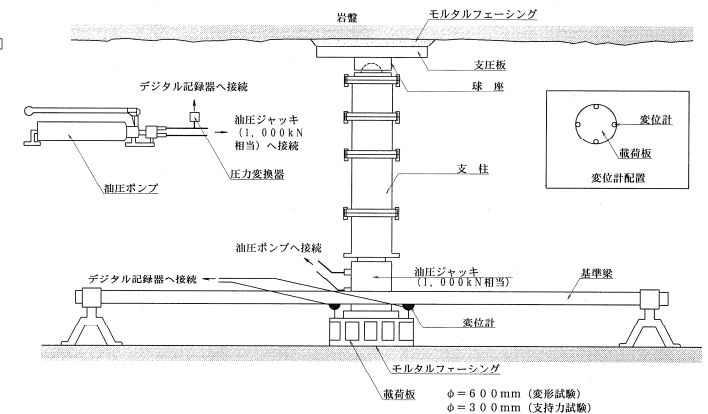
## ① 静的変形特性 (静弾性係数) : 安山岩

○安山岩の静弾性係数は、試掘坑内で実施した岩盤変形試験の試験結果を用いて設定した。



岩盤変形試験位置図

岩盤分類	試験位置	静弾性係数 ( $\times 10^3 \text{N/mm}^2$ )	平均値
A <sub>I</sub> 級	E3-1	16.3	11.9
	E3-2	5.9	
	E3-3	13.4	
A <sub>III</sub> 級	E2-1	2.1	2.7
	E2-2	2.5	
	E2-3	3.4	
A <sub>v</sub> 級	EA7-1	0.015	0.012
	EA7-2	0.0094	
	EA7-3	0.013	

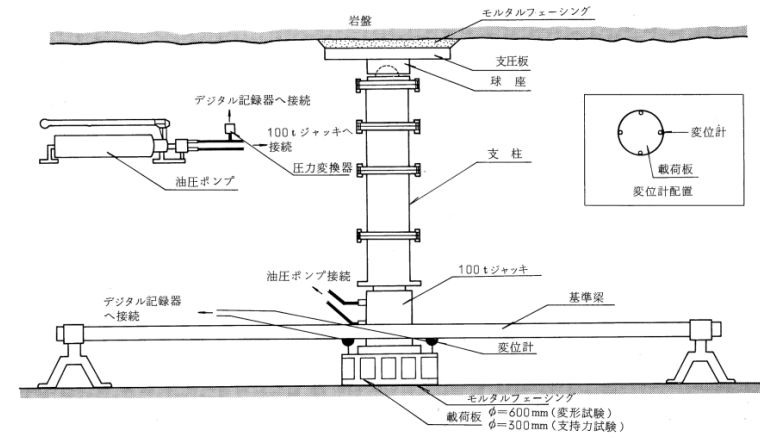
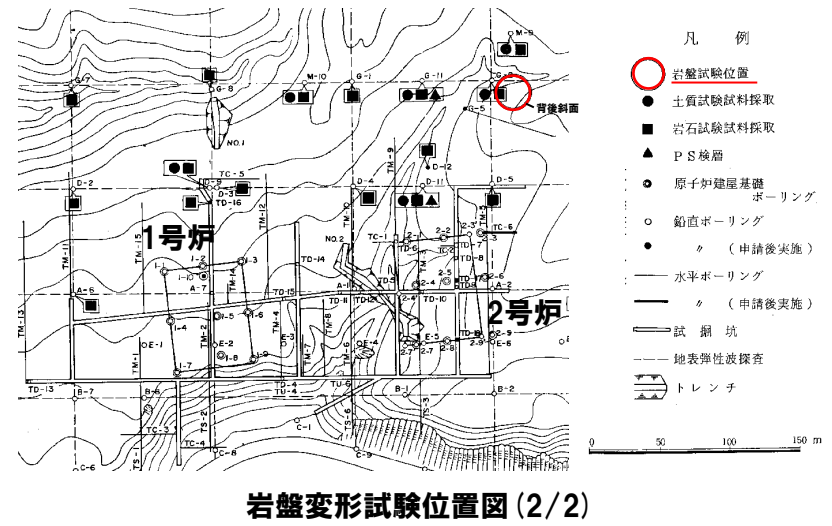
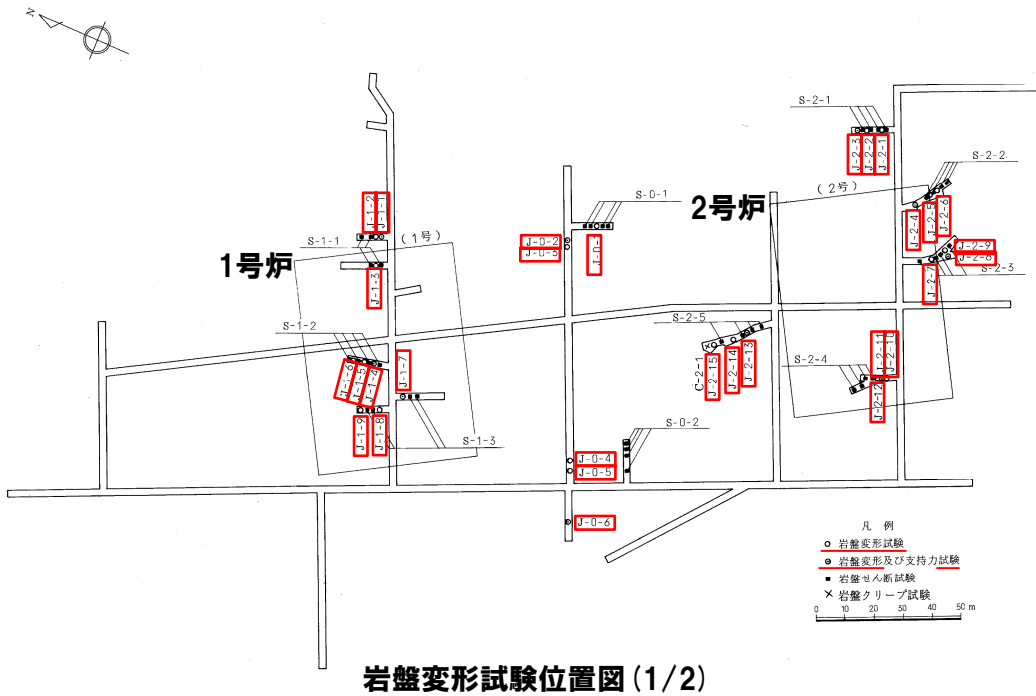


岩盤変形試験概要

# 2.1.3 静的変形特性

## ②静的変形特性(静弾性係数):火砕岩類(1/4)

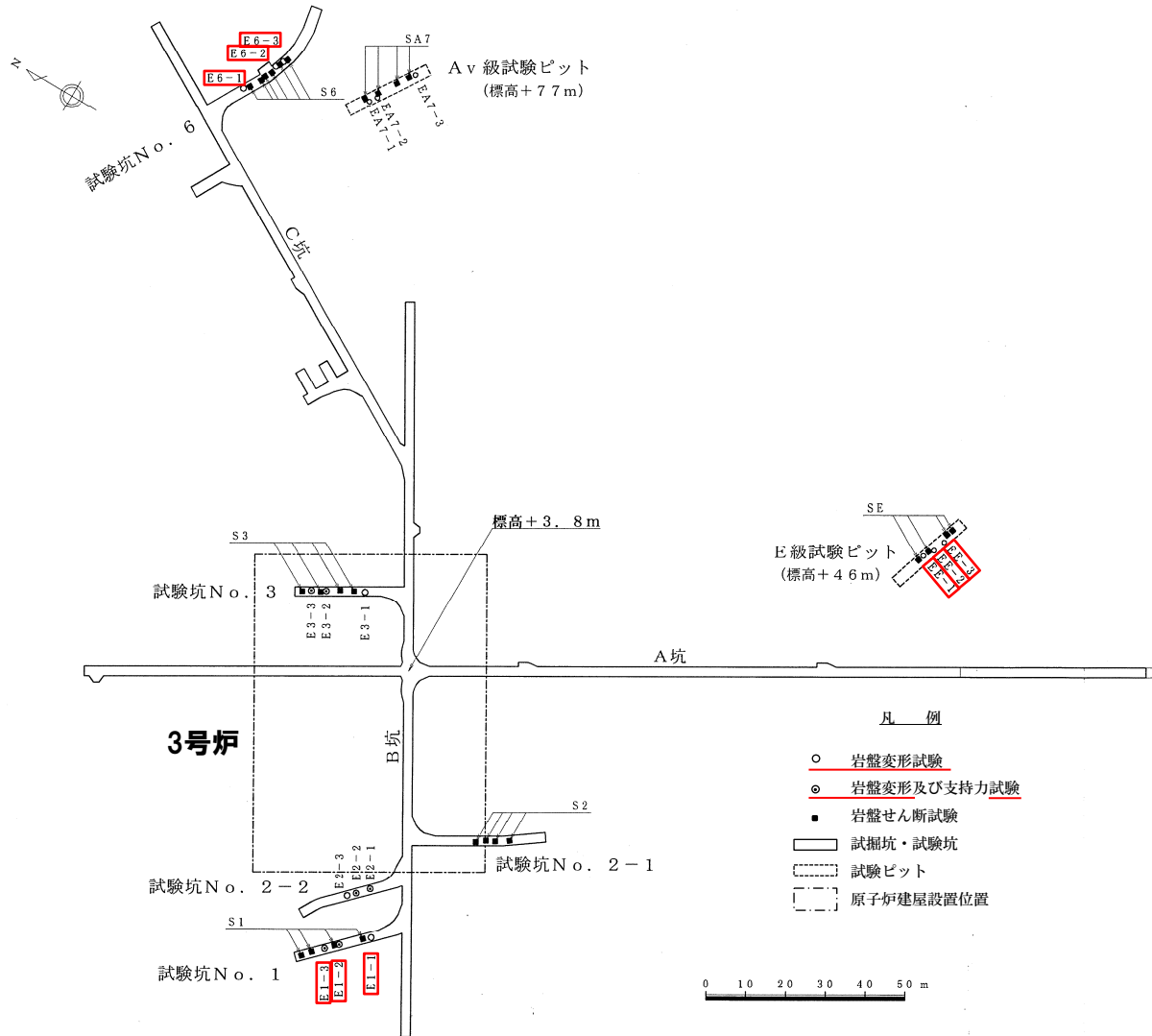
- 火砕岩類の静弾性係数は、試掘坑内及び周辺斜面で実施した岩盤変形試験の試験結果を用いて設定した(岩盤変形試験結果は、P34~P35参照)。
- 1,2号炉建設時に実施した岩盤変形試験位置等を以下に、3号炉建設時に実施した岩盤変形試験位置を次頁に示す。



# 2.1.3 静的変形特性

## ②静的変形特性(静弾性係数):火砕岩類(2/4)

○3号炉建設時に実施した岩盤変形試験位置を下図に示す。



岩盤変形試験位置図

## 2.1.3 静的変形特性

## ②静的変形特性(静弾性係数):火砕岩類(3/4)

○火砕岩類(A級<sup>※1</sup>及びB級<sup>※2</sup>)の岩盤変形試験結果を以下に示す。

※1 1,2号炉建設時に実施した試験結果。

※2 1,2号炉建設時及び3号炉建設時に実施した試験結果。

## A級

試験位置	静弾性係数 $E_s$ ( $\times 10^3\text{N/mm}^2$ )	平均値
J-1-1	5.0	6.1
J-1-2	8.7	
J-1-3	9.0	
J-1-4	2.8	
J-1-5	7.9	
J-1-6	6.3	
J-2-1	4.1	
J-2-2	4.8	

## B級

試験位置	静弾性係数 $E_s$ ( $\times 10^3\text{N/mm}^2$ )	平均値
J-1-7	2.1	2.8
J-1-8	2.7	
J-1-9	4.8	
J-2-4	1.4	
J-2-5	4.3	
J-2-6	2.3	
J-2-7	2.4	
J-2-8	0.94	
J-2-9	1.3	
J-2-10	1.6	
J-2-11	4.3	
J-2-12	4.8	
E1-1	4.1	
E1-2	3.7	
E1-3	1.8	

## 2.1.3 静的変形特性

## ②静的変形特性(静弾性係数):火砕岩類(4/4)

○火砕岩類(C級※1, D級※2及びE級※3)の岩盤変形試験結果を以下に示す。

※1 1,2号炉建設時に実施した試験結果。

※2 1,2号炉建設時及び3号炉建設時に実施した試験結果。

※3 3号炉建設時に実施した試験結果。

## C級

試験位置	静弾性係数 $E_s$ ( $\times 10^3\text{N/mm}^2$ )	平均値
J-0-1	1.1	0.94
J-0-2	0.50	
J-0-3	1.4	
J-2-13	0.98	
J-2-14	1.1	
J-2-15	0.85	
背後斜面	0.68	
J-2-3	0.92	

## D級

試験位置	静弾性係数 $E_s$ ( $\times 10^3\text{N/mm}^2$ )	平均値
J-0-4	0.52	0.64
J-0-5	0.37	
J-0-6	0.50	
背後斜面	0.38	
E6-1	0.82	
E6-2	0.94	
E6-3	0.94	

## E級

試験位置	静弾性係数 $E_s$ ( $\times 10^3\text{N/mm}^2$ )	平均値
EE-1	0.024	0.030
EE-2	0.036	
EE-3	0.031	

## 2.1.3 静的変形特性

### ③ 静的変形特性 (静ポアソン比) : 安山岩及び火砕岩類

- 安山岩A<sub>I</sub>級～A<sub>III</sub>級及び火砕岩類A級～D級の静ポアソン比は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した一軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 安山岩A<sub>V</sub>級及び火砕岩類E級の静ポアソン比は、「原子力発電所の基礎地盤及び周辺斜面の安定性評価技術〈技術資料〉(土木学会 原子力土木委員会, 2009)」を参照し、0.35と設定した。
- 安山岩A<sub>IV</sub>級は、分布が小さいことから、下位岩級の安山岩A<sub>V</sub>級の値を使用した (P22参照)。

安山岩A<sub>I</sub>級～A<sub>V</sub>級及び火砕岩類A級～E級の静ポアソン比 (3号炉解析用物性値)

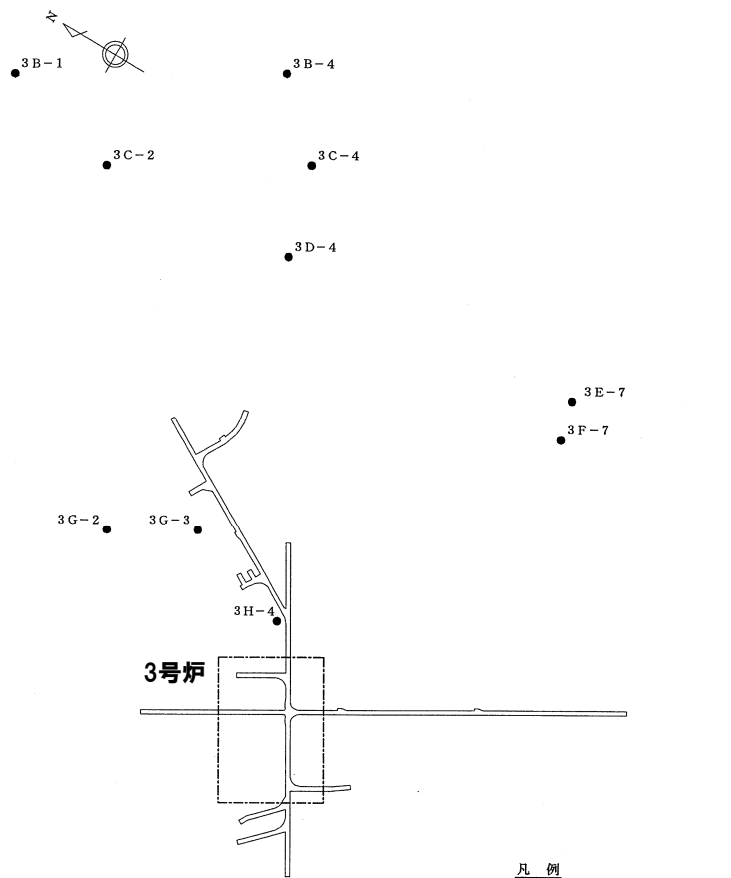
岩種	岩盤分類	試験個数	静ポアソン比	備考
安山岩	A <sub>I</sub> 級	135	0.25	一軸圧縮試験結果
	A <sub>II</sub> 級	23	0.23	一軸圧縮試験結果
	A <sub>III</sub> 級	18	0.23	一軸圧縮試験結果
	A <sub>IV</sub> 級	—	0.35	A <sub>V</sub> 級を使用
	A <sub>V</sub> 級	—	0.35	文献を基に設定
火砕岩類	A級	171	0.26	一軸圧縮試験結果
	B級	125	0.24	一軸圧縮試験結果
	C級	70	0.21	一軸圧縮試験結果
	D級	58	0.26	一軸圧縮試験結果
	E級	—	0.35	文献を基に設定



# 2.1.3 静的変形特性

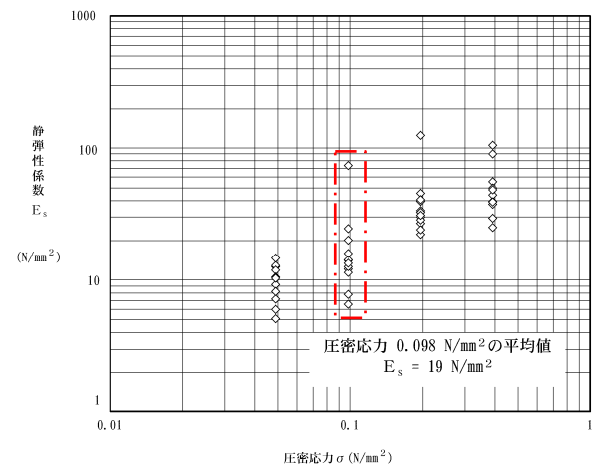
## ④ 静的変形特性:3号表土

○3号表土の静弾性係数は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○3号表土の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



試料採取位置図

- 凡例
- 試料採取ボーリング孔
  - 原子炉建屋設置位置
- 0 50 100 m

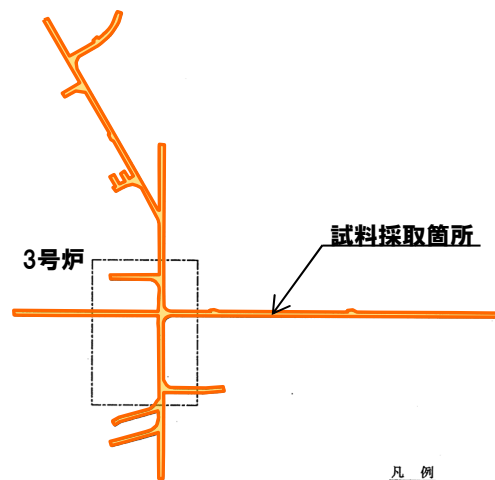
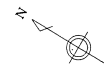


三軸圧縮試験結果

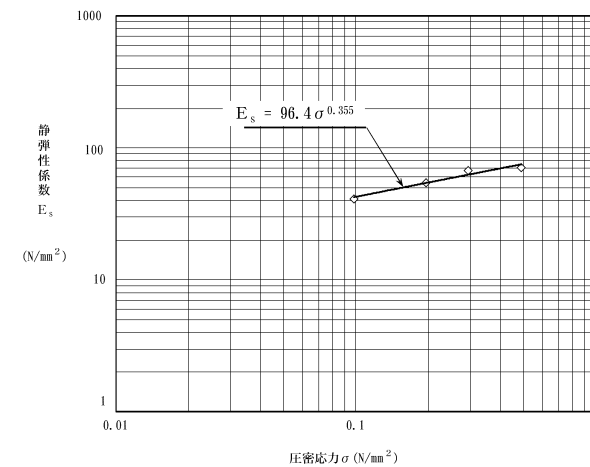
## 2.1.3 静的変形特性

## ⑤ 静的変形特性: 3号埋戻土

- 3号埋戻土の静弾性係数は、3号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 3号埋戻土の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



試料採取位置図

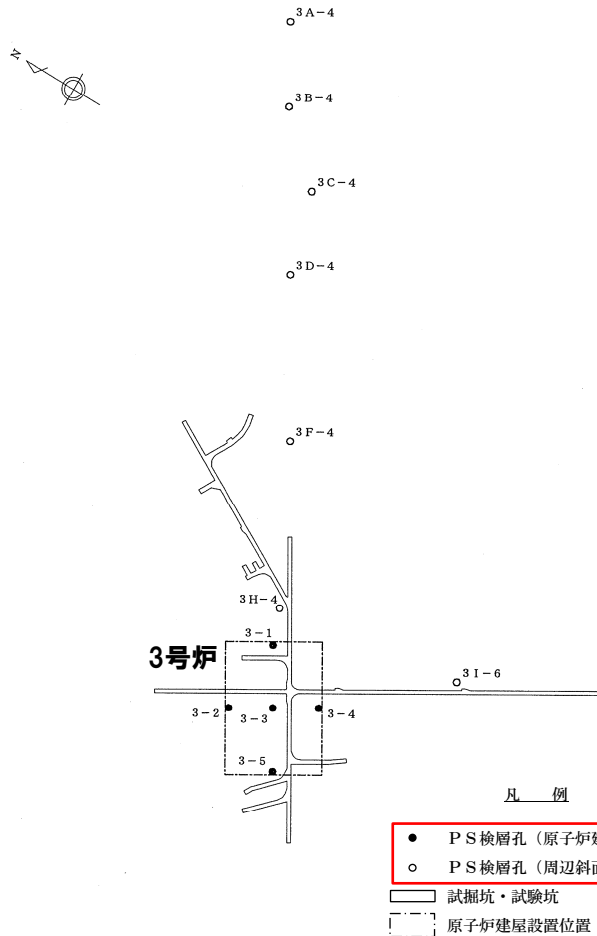


三軸圧縮試験結果

# 2.1.4 動的変形特性

## ① 動的変形特性: 安山岩A<sub>I</sub>級~A<sub>IV</sub>級及び火砕岩類A級~D級

○安山岩A<sub>I</sub>級~A<sub>IV</sub>級及び火砕岩類A級~D級の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び動ポアソン比 $\nu_d$ は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した。



安山岩A<sub>I</sub>級~A<sub>IV</sub>級及び火砕岩類A級~D級の動的変形特性

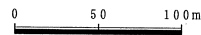
岩種	岩盤分類	密度: $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動せん断 弾性係数: $G_d$ ( $\times 10^3$ N/mm <sup>2</sup> )	動ポアソン比: $\nu_d$
安山岩	A <sub>I</sub> 級	2.67	3.8	1.8	8.7	0.36
	A <sub>II</sub> 級	2.64	3.5	1.7	7.6	0.35
	A <sub>III</sub> 級	2.62	2.9	1.4	5.1	0.35
	A <sub>IV</sub> 級	2.43	1.5	0.73	1.3	0.34
火砕岩類	A級	2.20	3.0	1.4	4.3	0.36
	B級	2.19	2.7	1.3	3.7	0.35
	C級	2.01	2.5	1.2	2.9	0.35
	D級	1.81	2.4	1.1	2.2	0.37

動せん断弾性係数:  $G_d = \rho \times V_s^2$

$\rho$ : 密度

動ポアソン比:  $\nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$

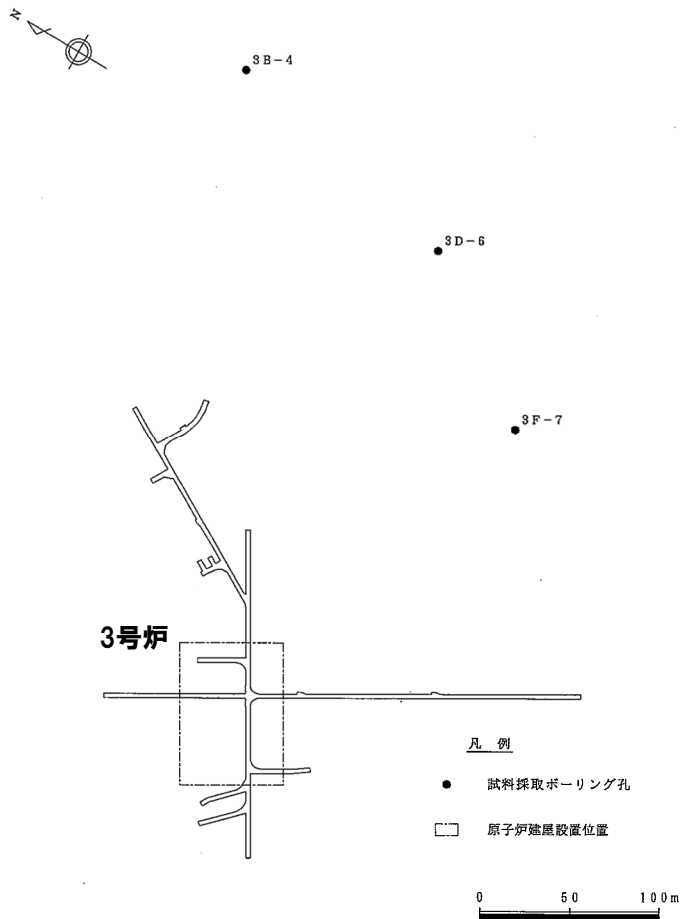
PS検層位置図



# 2.1.4 動的変形特性

## ②動的変形特性:安山岩A<sub>V</sub>級

- 安山岩A<sub>V</sub>級の初期せん断弾性係数G<sub>0</sub>及び動ポアソン比ν<sub>d</sub>は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した(PS検層位置は前頁参照)。
- 安山岩A<sub>V</sub>級の動せん断弾性係数G<sub>d</sub>及び減衰定数hのひずみ依存特性については、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。



試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

岩種	岩盤分類	密度: ρ (g/cm <sup>3</sup> )	初期せん断弾性係数:G <sub>0</sub> (×10 <sup>3</sup> N/mm <sup>2</sup> )
安山岩	A <sub>V</sub> 級	1.80	0.17

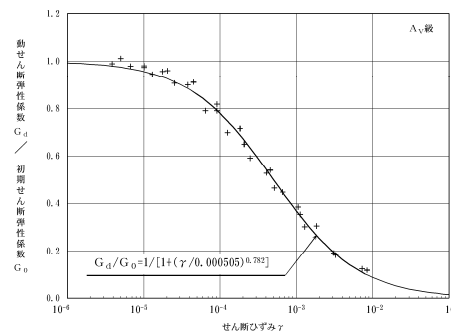
初期せん断弾性係数:  $G_0 = \rho \times V_s^2$

### 【動ポアソン比】

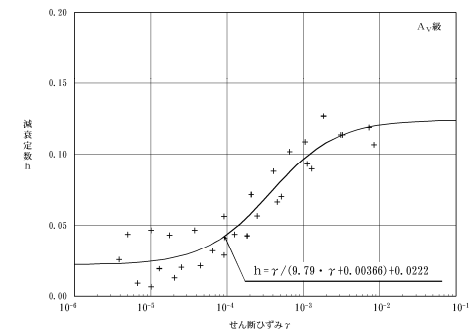
岩種	岩盤分類	P波速度: V <sub>p</sub> (km/s)	S波速度: V <sub>s</sub> (km/s)	動ポアソン比: ν <sub>d</sub>
安山岩	A <sub>V</sub> 級	0.79	0.31	0.41

動ポアソン比:  $\nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果(動せん断弾性係数G<sub>d</sub>)

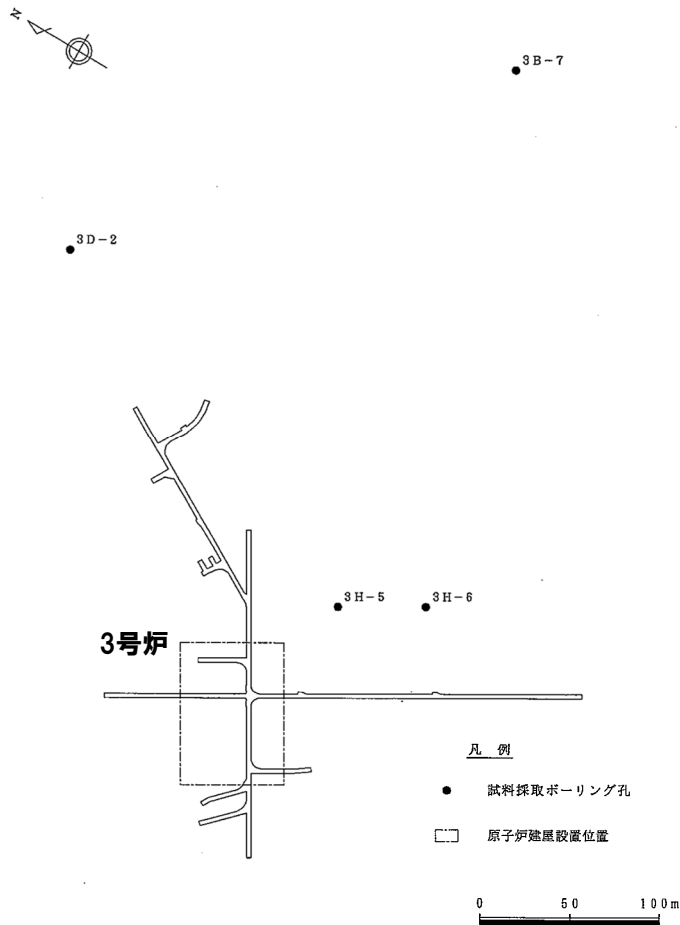


動的変形試験結果(減衰定数h)

# 2.1.4 動的変形特性

## ③動的変形特性：火砕岩類E級

- 火砕岩類E級の初期せん断弾性係数 $G_0$ 及び動ポアソン比 $\nu_d$ は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した(PS検層位置はP39参照)。
- 火砕岩類E級の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ のひずみ依存特性については、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。



試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

岩種	岩盤分類	密度: $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	初期せん断弾性係数: $G_0$ ( $\times 10^3$ N/mm <sup>2</sup> )
火砕岩類	E級	1.64	0.43

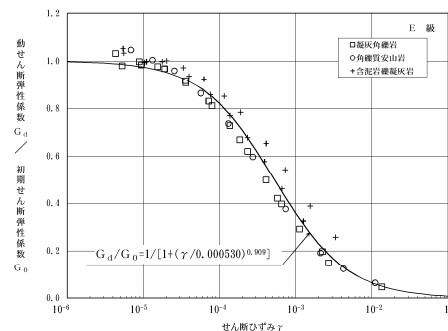
初期せん断弾性係数: $G_0 = \rho \times V_s^2$

### 【動ポアソン比】

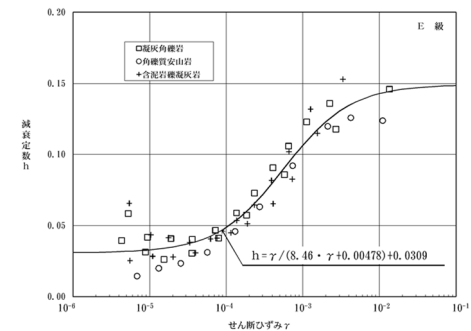
岩種	岩盤分類	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$
火砕岩類	E級	1.2	0.51	0.39

動ポアソン比: $\nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果(動せん断弾性係数 $G_d$ )

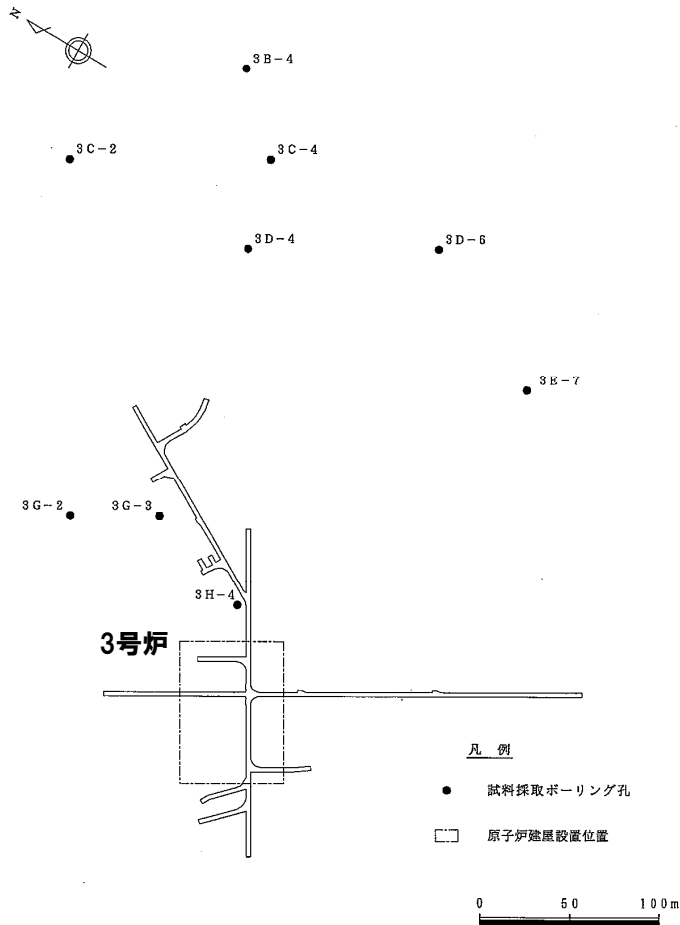


動的変形試験結果(減衰定数 $h$ )

# 2.1.4 動的変形特性

## ④動的変形特性:3号表土

- 3号表土の初期せん断弾性係数 $G_0$ 及び動ポアソン比 $\nu_d$ は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した(PS検層位置はP39参照)。
- 3号表土の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ のひずみ依存特性に関しては、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。



試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

岩種・岩盤分類	密度: $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	初期せん断弾性係数: $G_0$ ( $\times 10^3$ N/mm <sup>2</sup> )
3号表土	1.81	0.16

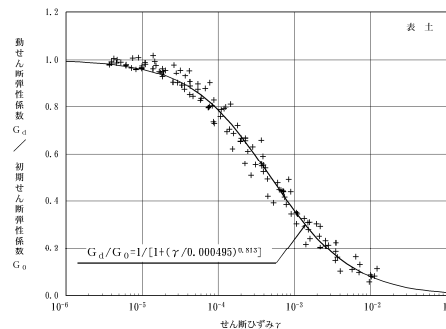
初期せん断弾性係数: $G_0 = \rho \times Vs^2$

### 【動ポアソン比】

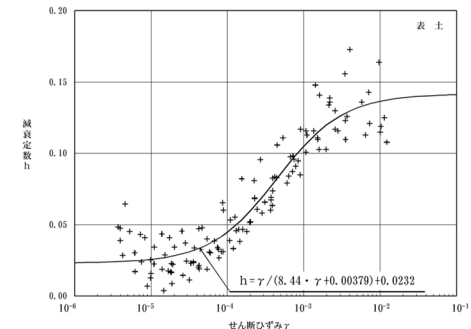
岩種・岩盤分類	P波速度: $Vp$ (km/s)	S波速度: $Vs$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$
3号表土	0.73	0.30	0.40

動ポアソン比: $\nu_d = \frac{(Vp/Vs)^2 - 2}{2\{(Vp/Vs)^2 - 1\}}$

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果(動せん断弾性係数 $G_d$ )



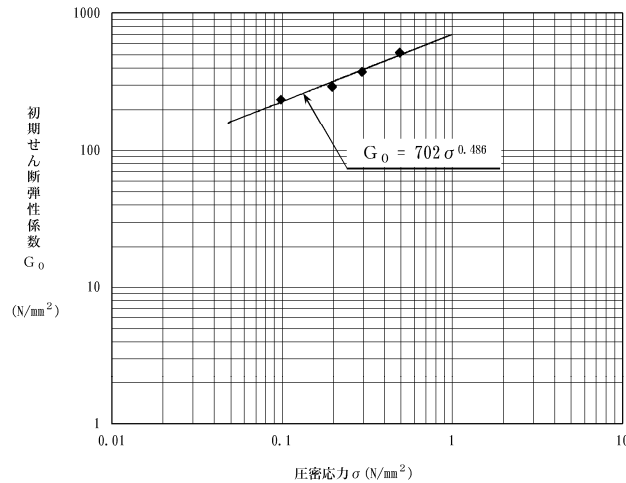
動的変形試験結果(減衰定数 $h$ )

# 2.1.4 動的変形特性

## ⑤動的変形特性:3号埋戻土

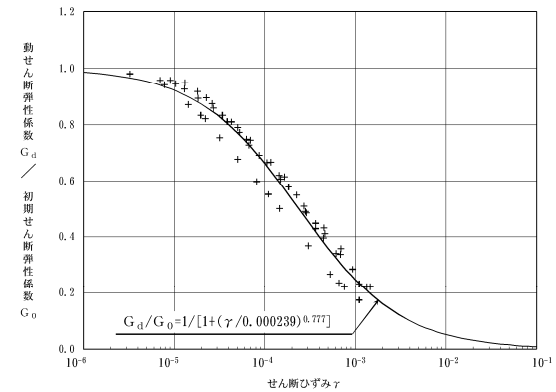
- 3号埋戻土の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、3号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型動的変形試験の試験結果を用いて設定した(試料の採取位置は、強度特性の三軸圧縮試験と同じ、P30参照)。
- 3号埋戻土の動ポアソン比 $\nu_d$ は、「設計用地盤定数の決め方—岩盤編—(地盤工学会)」を参照し、0.40と設定した。

【初期せん断弾性係数】

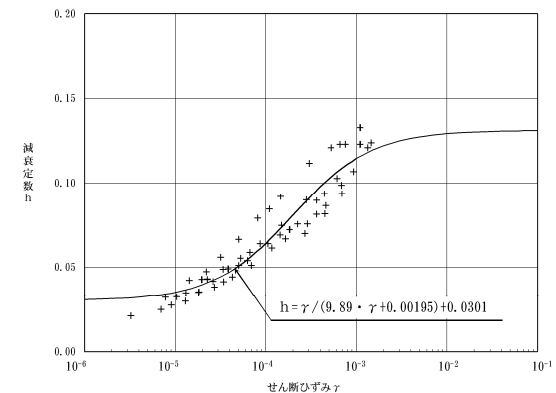


動的変形試験結果(初期せん断弾性係数 $G_0$ )

【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果(動せん断弾性係数 $G_d$ )



動的変形試験結果(減衰定数 $h$ )

余白

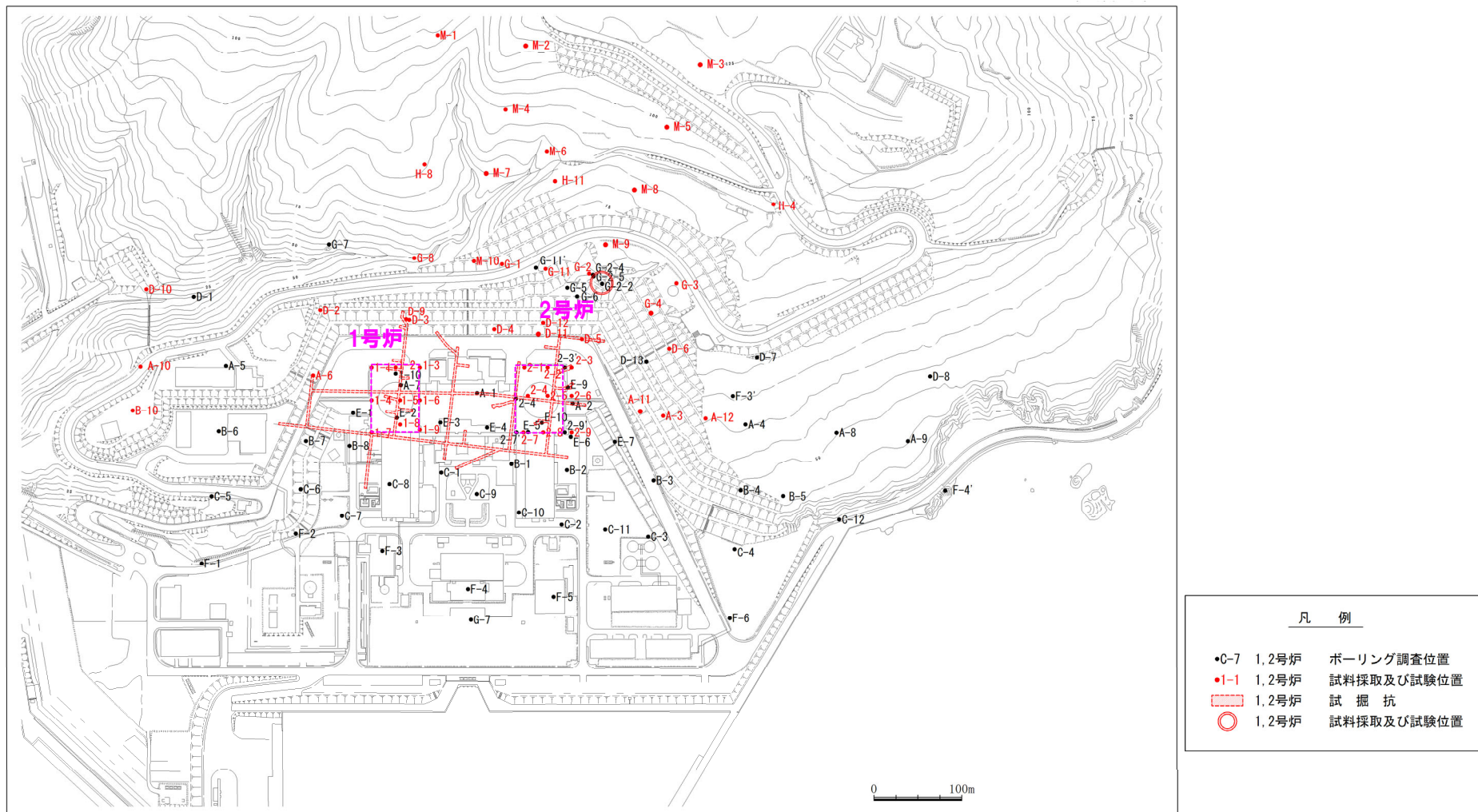


1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
2. 解析用物性値に関する補足	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
2.5 地盤の支持力	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

## 2. 2 1,2号炉解析用物性値

## 1,2号炉調査概要及び調査位置図

- 1,2号炉に対する各種岩石試験, 岩盤試験及び土質試験を実施するため, 1,2号炉建設時にボーリング調査, 試掘坑調査等を実施した。
- 1,2号炉建設時におけるボーリング調査位置, 試掘坑等を下図に示す。



調査位置図※

※1,2号炉建設時の発電所配置図を基に作成。

## 2.2.1 物理特性

### 密度：火砕岩類，表土及び埋戻土（1,2号炉解析用物性値）

○火砕岩類，表土及び埋戻土（1,2号炉解析用物性値）の密度は，ボーリングコア及び試掘坑から採取した試料を用いて実施した密度試験における飽和密度の平均値を設定した。

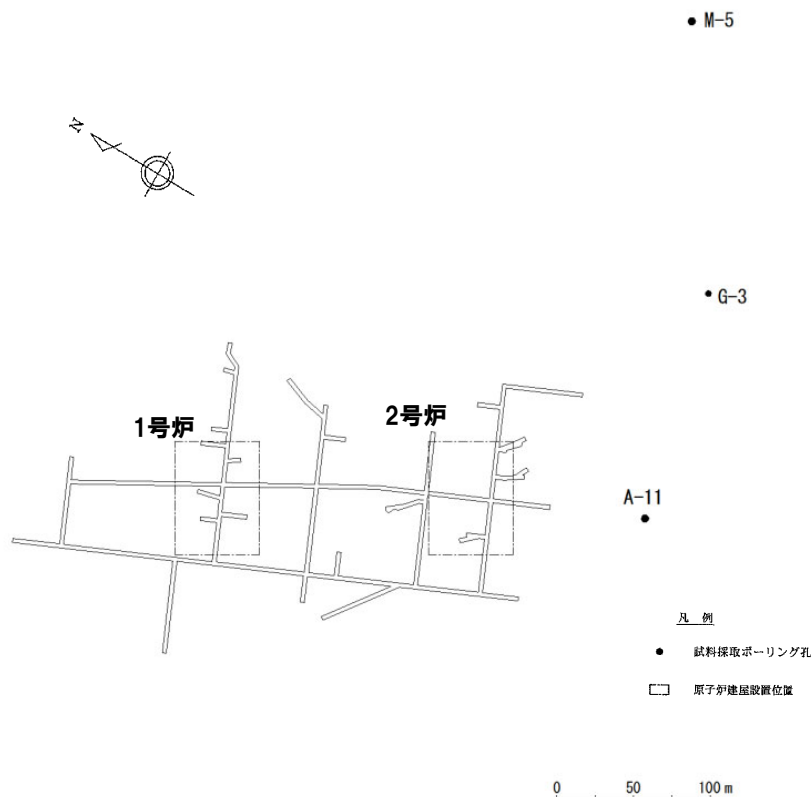
密度試験結果（1,2号炉解析用物性値）

岩種	岩盤分類	試験個数	密度 (g/cm <sup>3</sup> )
火砕岩類	A級	280	2.2
	B級	171	2.1
	C級	207	1.9
	D級	16	1.9
	E級	11	1.7
1,2号表土		41	1.9
1,2号埋戻土		5	2.0

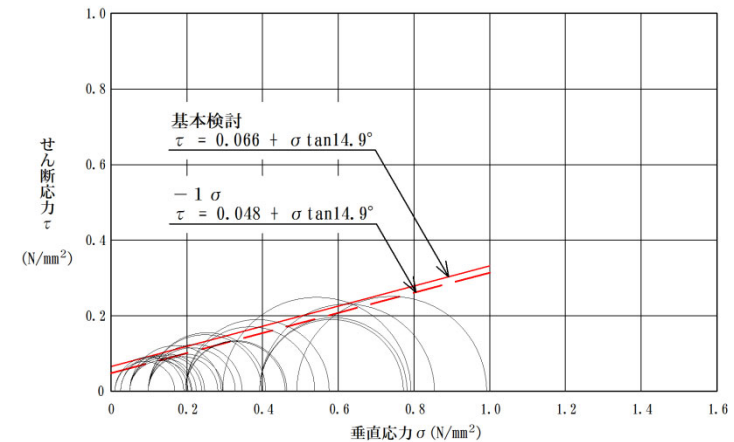
## 2.2.2 強度特性

### ① 強度特性: 1,2号表土 (1/2)

- 1,2号表土の強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係 (次頁参照) において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



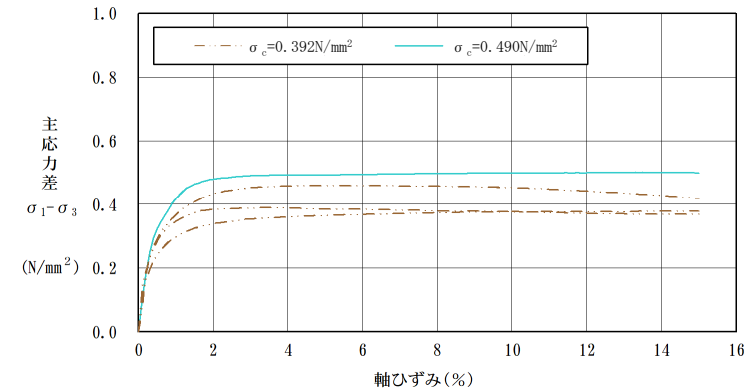
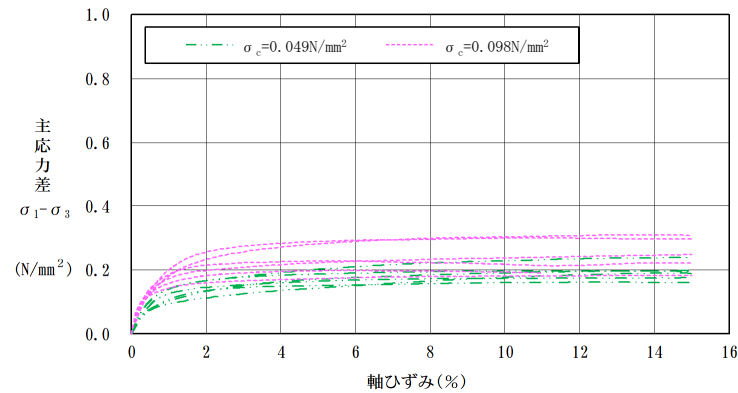
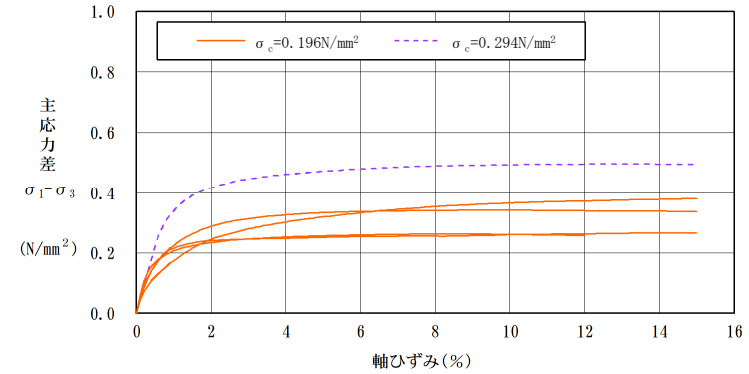
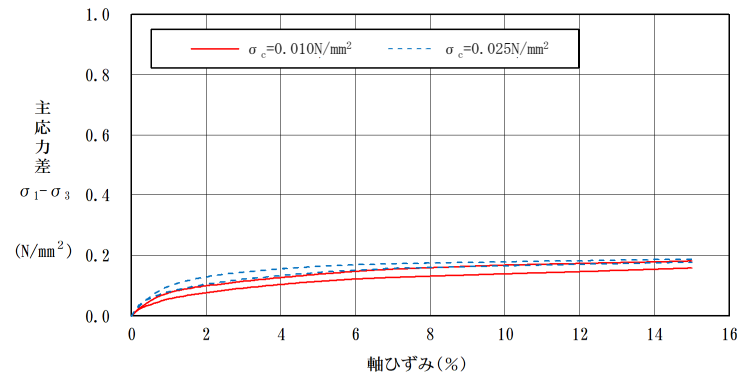
試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)

## 2.2.2 強度特性

## ①強度特性:1,2号表土(2/2)

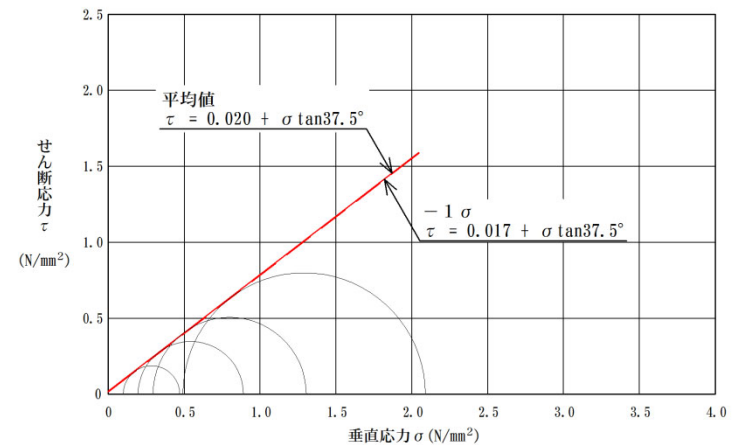


三軸圧縮試験結果(応力~ひずみ関係)

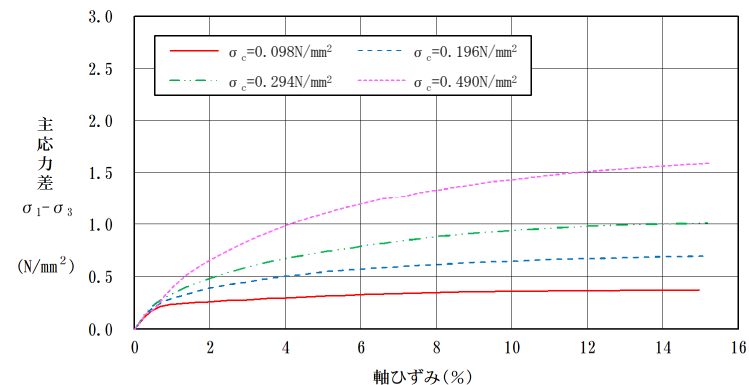
## 2.2.2 強度特性

### ②強度特性:1,2号埋戻土

- 1,2号埋戻土の材料(岩砕)は、火砕岩主体であり、発電所の西斜面丘陵地の一部、1,2号炉原子炉補助建屋、タービン建屋及びそれらに付帯する諸設備の敷地造成並びに基礎掘削から発生したものである。
- 1,2号埋戻土の強度特性は、1,2号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



大型三軸圧縮試験結果(破壊包絡線)



大型三軸圧縮試験結果(応力～ひずみ関係)

## 2.2.3 静的変形特性

### ① 静的変形特性 (静ポアソン比) : 火砕岩類

- 火砕岩類A級～C級の静ポアソン比は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した一軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 火砕岩類D級及びE級の静ポアソン比は、「原子力発電所の基礎地盤及び周辺斜面の安定性評価技術〈技術資料〉(土木学会原子力土木委員会, 2009)」を参照し、設定した。

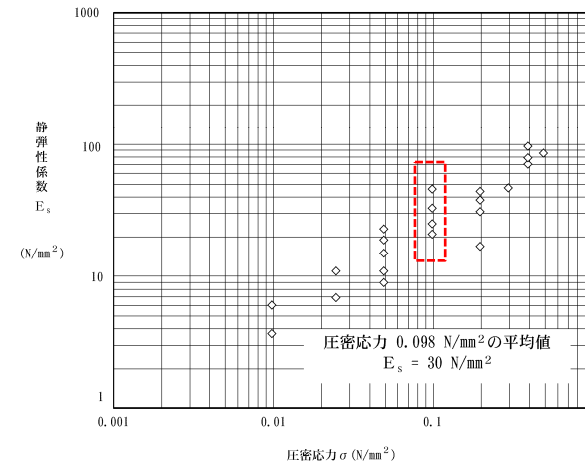
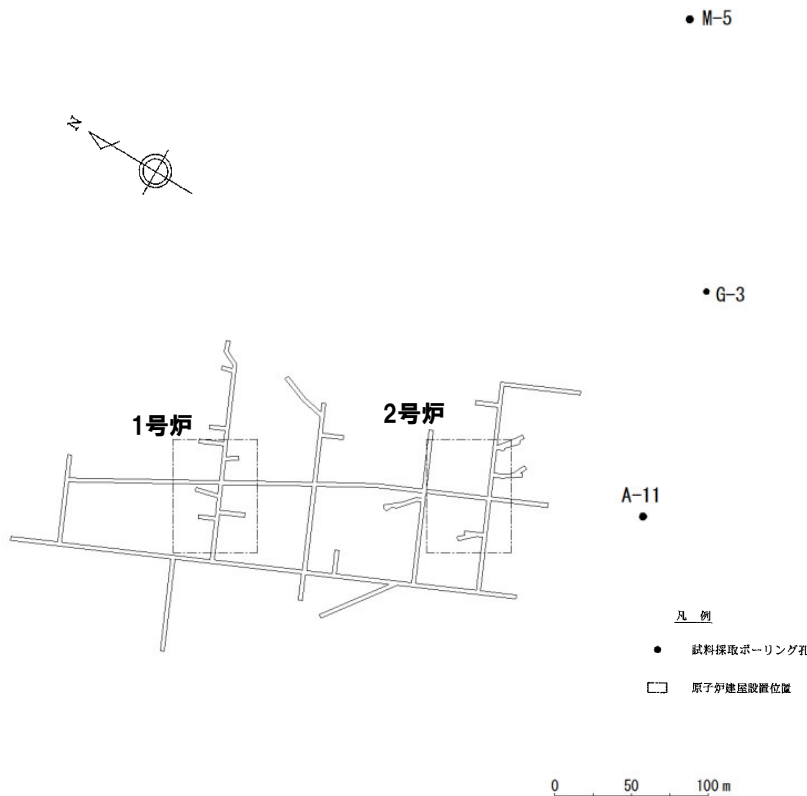
火砕岩類A級～E級の静ポアソン比 (1,2号炉解析用物性値)

岩種	岩盤分類	試験個数	静ポアソン比	備考
火砕岩類	A級	272	0.25	一軸圧縮試験結果
	B級	165	0.25	一軸圧縮試験結果
	C級	148	0.25	一軸圧縮試験結果
	D級	—	0.30	文献を基に設定
	E級	—	0.35	文献を基に設定

# 2.2.3 静的変形特性

## ② 静的変形特性: 1,2号表土

- 1,2号表土の静弾性係数は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 1,2号表土の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。

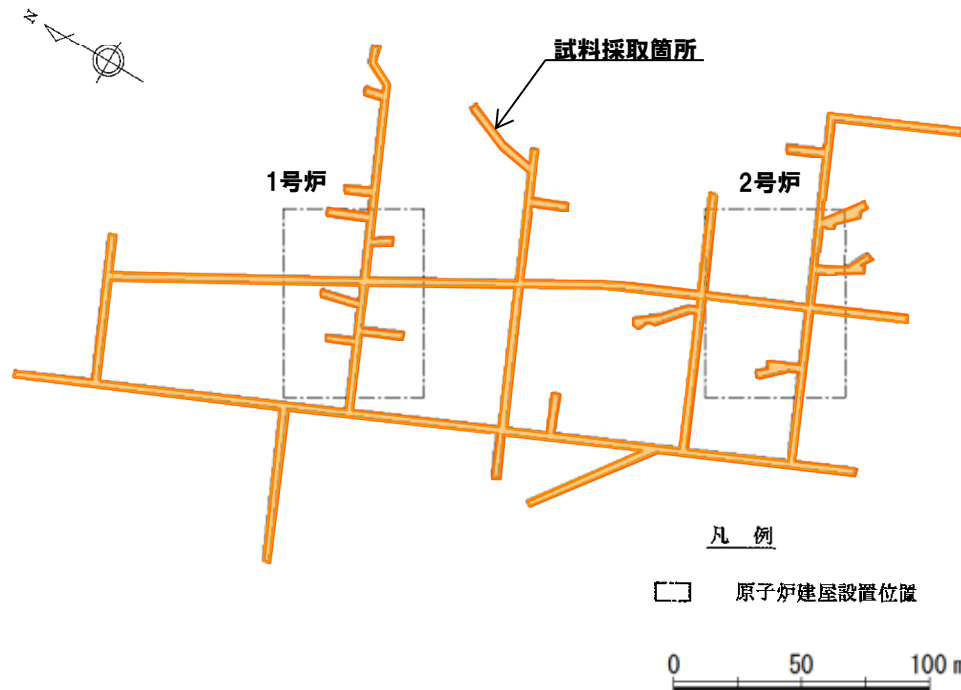




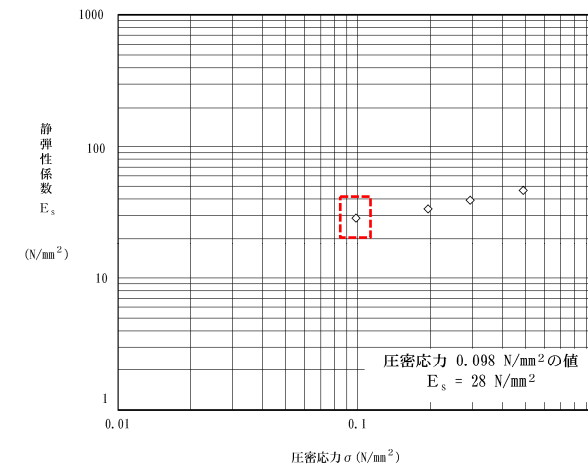
## 2.2.3 静的変形特性

## ③静的変形特性：1,2号埋戻土

- 1,2号埋戻土の静弾性係数は、1,2号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 1,2号埋戻土の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果

# 2.2.4 動的変形特性

## ① 動的変形特性：火砕岩類A級～D級

○火砕岩類A級～D級の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び動ポアソン比 $\nu_d$ は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した。

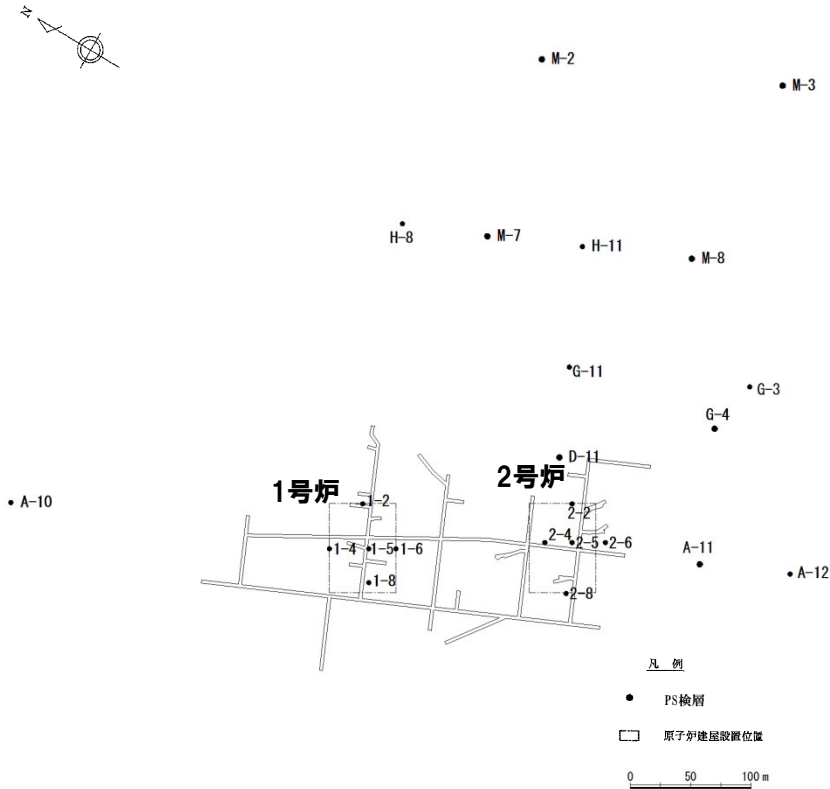
火砕岩類A級～D級の動的変形特性(1,2号炉解析用物性値)

岩種	岩盤分類	密度: $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動せん断弾性係数: $G_d$ ( $\times 10^3$ N/mm <sup>2</sup> )	動ポアソン比: $\nu_d$
火砕岩類	A級	2.2	3.2	1.5	5.0	0.36
	B級	2.1	2.7	1.3	3.5	0.35
	C級	1.9	2.4	1.1	2.3	0.37
	D級	1.9	1.7	0.76	1.1	0.38

動せん断弾性係数:  $G_d = \rho \times V_s^2$

$\rho$ : 密度

動ポアソン比:  $\nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$



PS検層位置図

# 2.2.4 動的変形特性

## ②動的変形特性：火砕岩類E級

- 火砕岩類E級の初期せん断弾性係数 $G_0$ 、動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ のひずみ依存特性は、1,2号炉側と3号炉側の物性値が同等であることから、3号炉解析用物性値を使用することとした。
- 火砕岩類E級の動ポアソン比 $\nu_d$ は、ボーリング孔を利用したPS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した(PS検層位置は前頁参照)。

### 【初期せん断弾性係数】

岩種	岩盤分類	初期せん断弾性係数: $G_0 (\times 10^3 \text{ N/mm}^2)$	備考
火砕岩類	E級	0.43	3号炉解析用物性値を使用

### 【動ポアソン比】

岩種	岩盤分類	P波速度: $V_p (\text{ km/s})$	S波速度: $V_s (\text{ km/s})$	動ポアソン比: $\nu_d$	備考
火砕岩類	E級	1.1	0.43	0.41	1,2号炉建設時に実施したPS検層結果

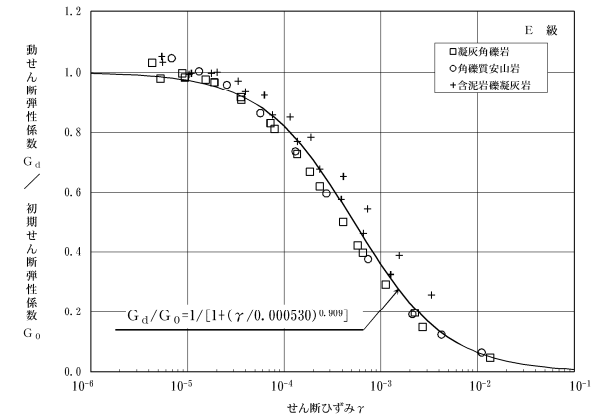
$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

(参考) 1,2号炉物性値と3号炉物性値の比較

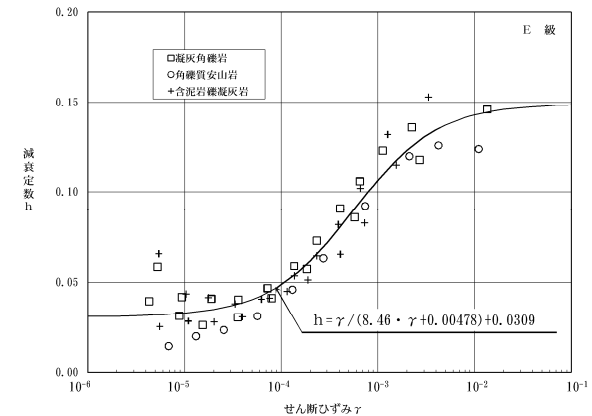
項目	飽和密度: $\rho (\text{ g/cm}^3)$	P波速度: $V_p (\text{ km/s})$	S波速度: $V_s (\text{ km/s})$	動ポアソン比: $\nu_d$
1,2号炉	1.67 (1.7※1)	1.1	0.43	0.41
3号炉	1.64	1.2	0.51	0.39

※1 解析用物性値は、1,2号炉設置許可申請時に設定した有効数字2桁を使用。

### 【ひずみ依存特性】



### 動的変形試験結果※2 (動せん断弾性係数 $G_d$ )



### 動的変形試験結果※2 (減衰定数 $h$ )

※2 3号炉建設時に実施した試験結果を再掲(P41参照)。

# 2.2.4 動的変形特性

## ③動的変形特性:1,2号表土

- 1,2号表土の初期せん断弾性係数 $G_0$ 、動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ のひずみ依存特性は、1,2号炉側と3号炉側の物性値が同等であることから、3号炉解析用物性値を使用することとした。
- 1,2号表土の動ポアソン比 $\nu_d$ は、PS検層結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した(PS検層位置はP54参照)。

### 【初期せん断弾性係数】

岩種・岩盤分類	初期せん断弾性係数: $G_0$ ( $\times 10^3$ N/mm <sup>2</sup> )	備考
1,2号表土	0.16	3号炉解析用物性値を使用

### 【動ポアソン比】

岩種・岩盤分類	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$	備考
1,2号表土	0.84	0.26	0.45	1,2号炉建設時に実施したPS検層結果

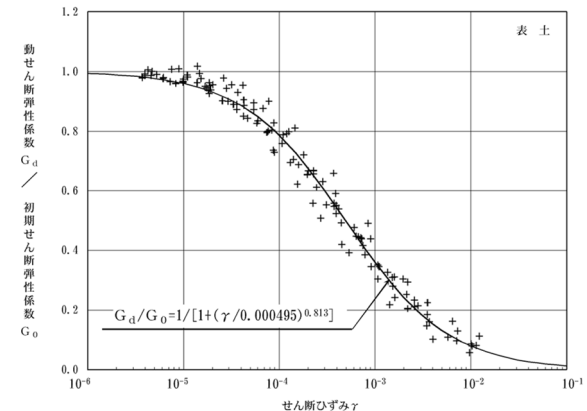
$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

(参考) 1,2号炉物性値と3号炉物性値の比較

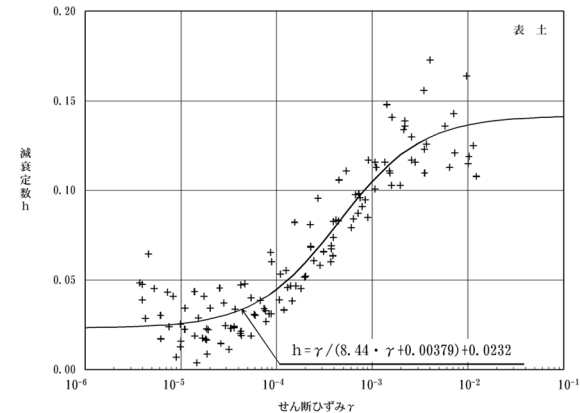
項目	飽和密度: $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$
1,2号炉	1.89 (1.9※1)	0.84	0.26	0.45
3号炉	1.81	0.73	0.30	0.40

※1 解析用物性値は、1,2号炉設置許可申請時に設定した有効数字2桁を使用。

### 【ひずみ依存特性】



### 動的変形試験結果※2 (動せん断弾性係数 $G_d$ )



### 動的変形試験結果※2 (減衰定数 $h$ )

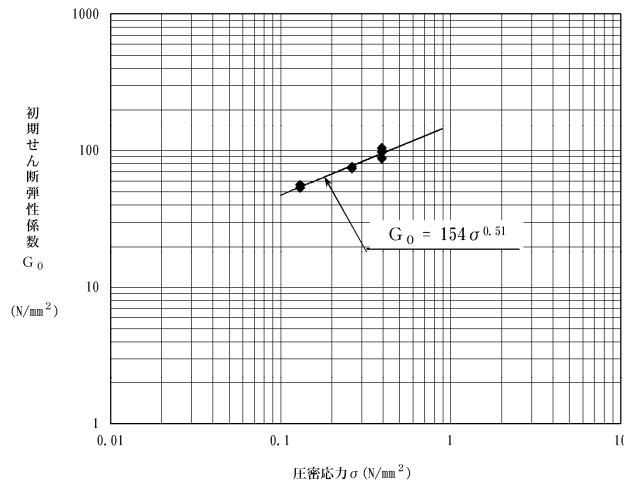
※2 3号炉建設時に実施した試験結果を再掲(P42参照)。

# 2.2.4 動的変形特性

## ④ 動的変形特性：1,2号埋戻土

- 1,2号埋戻土の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、1,2号炉試掘坑から採取した掘削岩砕を用いて作成した供試体を対象とした大型動的変形試験の試験結果を用いて設定した（試料の採取位置は、強度特性の三軸圧縮試験と同じ、P50参照）。
- 1,2号埋戻土の動ポアソン比 $\nu_d$ は、PS探査結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した。

### 【初期せん断弾性係数】



動的変形試験結果（初期せん断弾性係数 $G_0$ ）

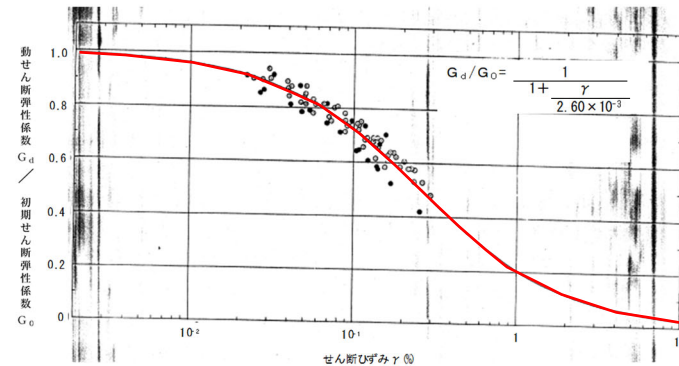
### 【動ポアソン比】

岩種・岩盤分類	P波速度： $V_p$ (km/s)	S波速度： $V_s$ (km/s)	動ポアソン比： $\nu_d$
1,2号埋戻土	1.50*	0.18	0.49

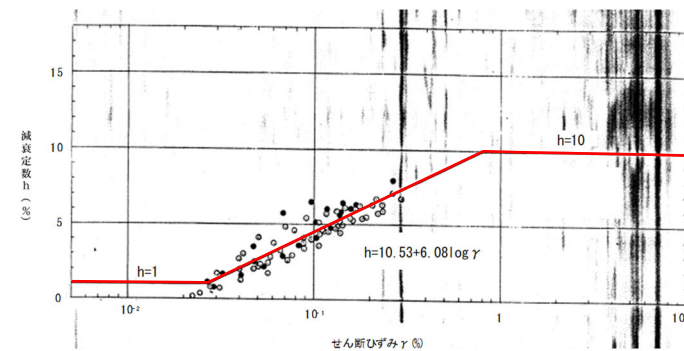
※飽和状態におけるP波速度 $V_p=1.50$ km/sを設定。

$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果（動せん断弾性係数 $G_d$ ）



動的変形試験結果（減衰定数 $h$ ）

余白

1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
2. 解析用物性値に関する補足	P. 17
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
2.5 地盤の支持力	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

余白

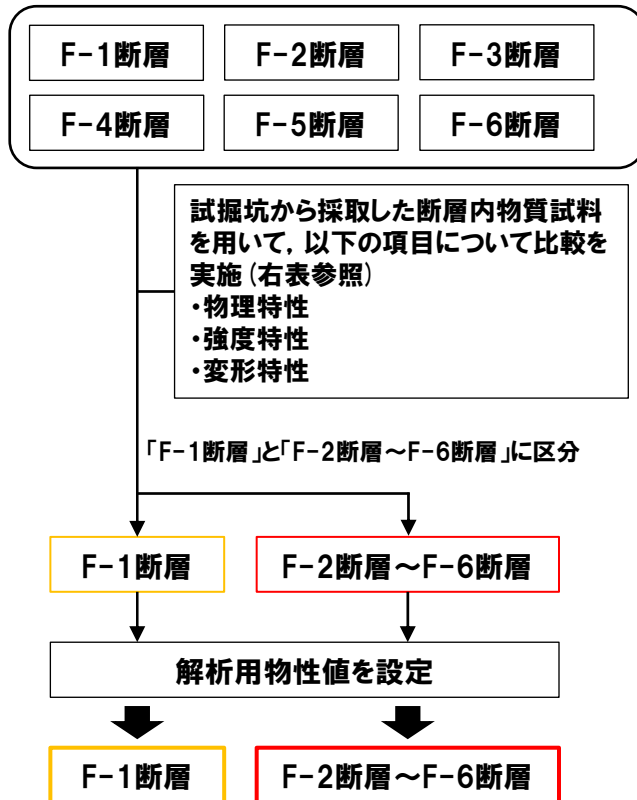


## 2.3.1 断層の解析用物性値の設定に関する補足

## 断層の解析用物性値の設定の考え方(1/3)

- 1,2号炉調査において試掘坑内で確認されたF-1断層～F-6断層について、原位置で採取した試料を用いて物理試験及び力学試験を実施した。
- ・いずれの断層についても、断層内物質は土粒子の密度、含水比、供試体の密度及び間隙比が類似している。
  - ・F-1断層～F-6断層の中では、F-1断層が最も細粒で高塑性であり、強度特性及び変形特性が最も小さい。
  - ・F-2断層、F-3断層及びF-5断層は、F-1断層よりもやや粗粒で、かつそれぞれの粒度特性に大きな違いはなく、強度特性及び変形特性は概ね同等である。
  - ・F-4断層及びF-6断層の力学試験結果が得られていないが、粒度特性はF-2断層、F-3断層及びF-5断層と同等である。

## 【1,2号炉調査】



## 断層内物質試験結果(1,2号炉調査)

試験項目		断層名・地点					
		F-1	F-2	F-3	F-4	F-5	F-6
土粒子の密度 (g/cm <sup>3</sup> )		3.04	2.84	2.78	2.83	2.85	2.90
含水比 (%)		37.7	25.2	27.5	39.6	42.6	32.7
密度 (g/cm <sup>3</sup> )	乾燥	1.21	1.37	1.36	1.20	1.26	—
	自然	1.66	1.72	1.73	1.67	1.79	—
	飽和	1.81	1.89	1.87	1.78	1.82	—
間隙比		1.52	1.07	1.05	1.37	1.27	—
コンシステンシー	液性限界 (%)	65.6	39.0	30.6	56.4	57.0	NP
	塑性限界 (%)	31.7	24.4	16.9	38.8	37.0	NP
粒度	レキ分 (%)	0.0	16.8	2.0	2.0	10.5	9.9
	砂分 (%)	29.0	37.2	31.0	37.0	38.5	35.1
	シルト分 (%)	44.0	34.3	45.0	44.0	35.0	38.0
	粘土分 (%)	27.0	11.7	22.0	17.0	16.0	17.0
強度特性	せん断強度 (N/mm <sup>2</sup> )	0.162	0.168	0.192	—	0.175	—
	内部摩擦角 (°)	14.7	21.3	21.6	—	23.7	—
変形特性	静弾性係数 (N/mm <sup>2</sup> )	92.6 $\sigma_v^{0.519}$	115 $\sigma_v^{0.806}$	146 $\sigma_v^{0.694}$	—	117 $\sigma_v^{0.935}$	—

- 物理試験及び力学試験結果から、断層をF-1断層及びF-2断層～F-6断層の2つに区分し、それぞれ別の解析用物性値を設定した。

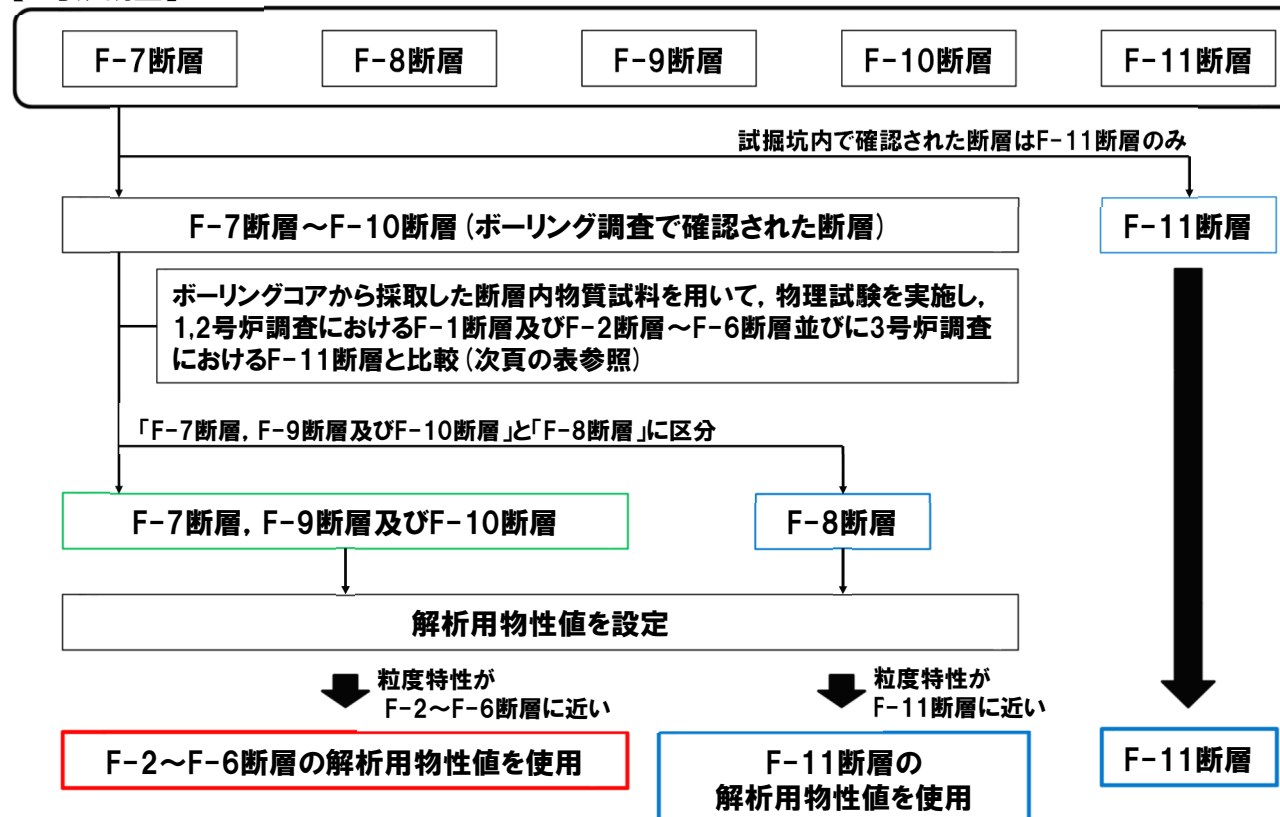
## 2.3.1 断層の解析用物性値の設定に関する補足

## 断層の解析用物性値の設定の考え方 (2/3)

- 3号炉調査において確認された断層のうち、試掘坑内で確認された断層はF-11断層のみであり、F-7断層、F-8断層、F-9断層及びF-10断層は、ボーリング調査で確認された断層である。
- 試掘坑内で確認されたF-11断層の解析用物性値は、原位置で採取した試料を用いて実施した物理試験、強度試験、変形試験等を基に設定した。
- ボーリング調査で認められたF-7断層～F-10断層の解析用物性値は、強度試験及び変形試験に用いることが可能な不攪乱試料を採取することが出来ないことから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、類似している断層の解析用物性値を使用することとした。

(次頁へ続く)

【3号炉調査】



## 2.3.1 断層の解析用物性値の設定に関する補足

## 断層の解析用物性値の設定の考え方 (3/3)

(前頁からの続き)

○1,2号炉調査及び3号炉調査における断層内物質の物理試験の試験結果から、以下の特徴を確認した。

・いずれの断層についても、断層内物質は土粒子の密度、含水比、供試体の密度及び間隙比が類似している。

・粒度特性は、以下のとおり、断層による違いが見られる。

(1,2号炉調査)

✓ F-1断層：礫分が含まれず最も細粒

✓ F-2断層～F-6断層：やや細粒 (F-1断層よりやや粗粒)

(3号炉調査)

✓ F-8断層及びF-11断層：粗粒

✓ F-7断層, F-9断層及びF-10断層：やや粗粒

○以上のことから、F-8断層は粒度特性がF-11断層に近く、F-7断層, F-9断層及びF-10断層は粒度特性がF-2断層～F-6断層に近いことを確認した。

断層内物質物理試験結果 (1,2号炉及び3号炉調査)

断層名・地点		F-1※1	F-2※1	F-3※1	F-4※1	F-5※1	F-6※1	F-7※2	F-8※2	F-9※2	F-10※2	F-11※1	
試験項目	土粒子の密度 (g/cm <sup>3</sup> )	3.04	2.84	2.78	2.83	2.85	2.90	3.01	2.89	2.88	3.03	2.55	
	含水比 (%)	37.7	25.2	27.5	39.6	42.6	32.7	65.5	42.9	28.0	31.4	33.5	
	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	乾燥	1.21	1.37	1.36	1.20	1.26	—	—	—	—	—	1.29
		自然	1.66	1.72	1.73	1.67	1.79	—	—	—	—	—	1.75
		飽和	1.81	1.89	1.87	1.78	1.82	—	—	—	—	—	1.79
	間隙比	1.52	1.07	1.05	1.37	1.27	—	—	—	—	—	—	0.98
	コンシステンシー	液性限界 (%)	65.6	39.0	30.6	56.4	57.0	NP	68.8	—	135.9	—	59.7
		塑性限界 (%)	31.7	24.4	16.9	38.8	37.0	NP	24.7	—	24.3	—	28.9
	粒度	レキ分 (%)	0.0	16.8	2.0	2.0	10.5	9.9	16.8	66.7	30.9	23.7	37.0
		砂分 (%)	29.0	37.2	31.0	37.0	38.5	35.1	34.1	24.3	29.0	31.2	34.0
シルト分 (%)		44.0	34.3	45.0	44.0	35.0	38.0	25.6	9.0	20.5	25.2	17.6	
粘土分 (%)		27.0	11.7	22.0	17.0	16.0	17.0	23.5		19.6	19.9	11.4	

※1 試掘坑内で認められた断層 (F-1断層～F-6断層, F-11断層)。

※2 ボーリング調査で認められた断層 (F-7断層～F-10断層)。

○F-8断層は、原位置で採取したF-11断層の試料を用いて実施した試験結果を基に解析用物性値を設定した。

○F-7断層, F-9断層及びF-10断層は、F-2断層～F-6断層の解析用物性値を使用した。

## 2.3.2 物理特性

### 密度:断層

- F-1断層, F-2断層～F-6断層及びF-11断層の密度は, 試掘坑から採取した試料を用いて実施した密度試験における飽和密度の平均値を設定した。
- F-7断層～F-10断層は, ボーリング調査で確認された断層であることから, 1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で, 物理特性が類似している断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は, P61～P63参照)。

密度試験結果

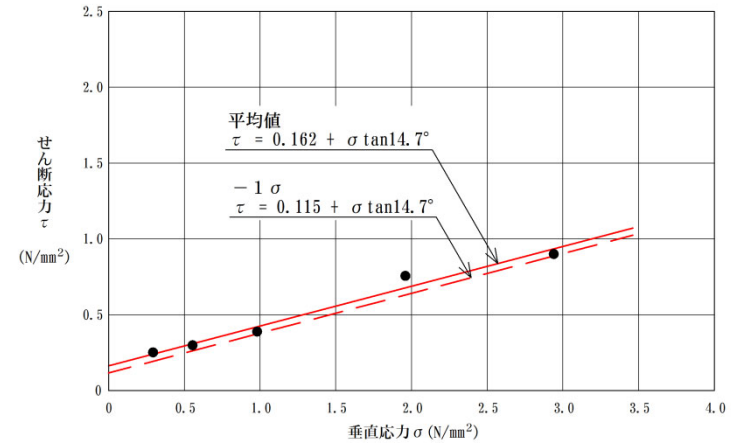
岩種・岩盤分類		試験個数	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	備考
断層	F-1	10	1.8*	
	F-2～F-6	31	1.8*	
	F-7, F-9, F-10	—	1.84	F-2断層～F-6断層の密度を使用
	F-8, F-11	19	1.79	F-8断層はF-11断層の密度を使用

※1,2号炉設置許可申請時に設定した有効数字2桁の解析用物性値を使用した。

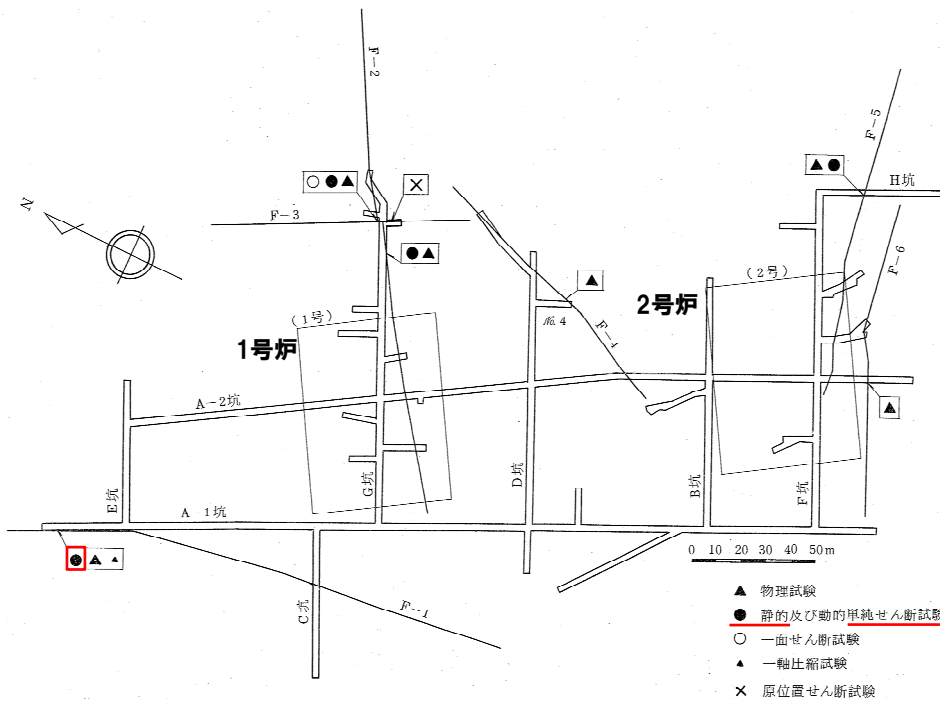
# 2.3.3 強度特性

## ①強度特性:F-1断層

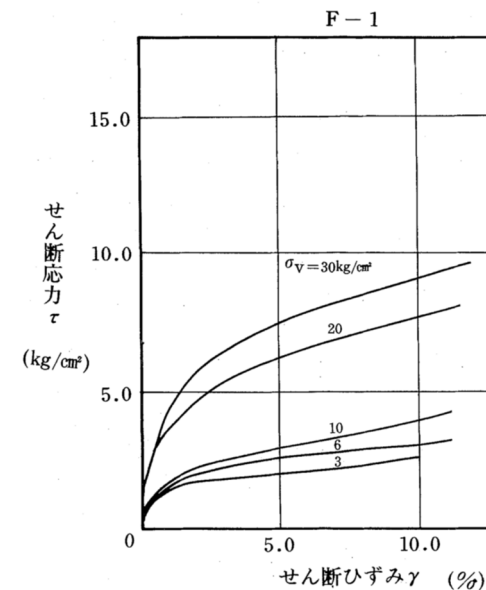
- F-1断層の強度特性は、試掘坑から採取したF-1断層の断層内物質試料を用いて実施した静的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



静的単純せん断試験結果(破壊包絡線)



試料採取位置図

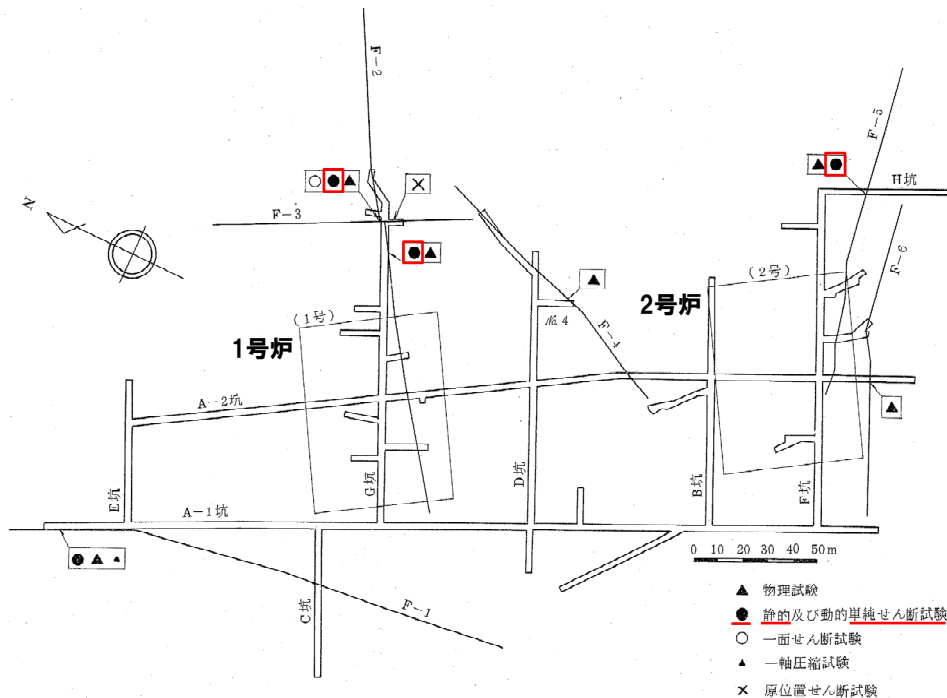


静的単純せん断試験結果(応力～ひずみ関係)

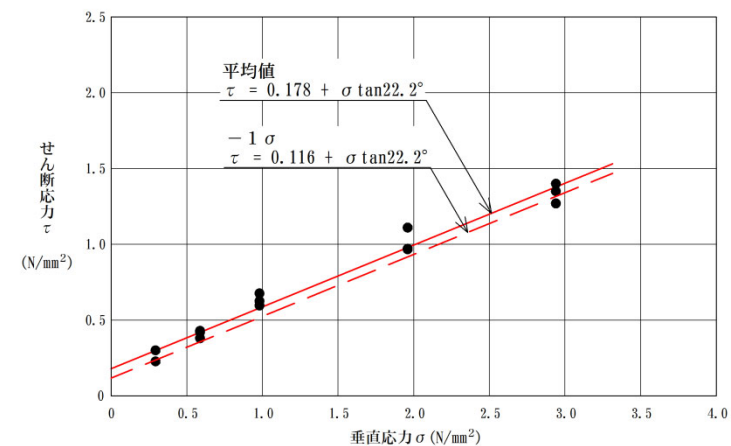
## 2.3.3 強度特性

## ②強度特性:F-2断層～F-6断層並びにF-7断層, F-9断層及びF-10断層(1/2)

- F-2断層～F-6断層の強度特性は、試掘坑から採取したF-2断層, F-3断層及びF-5断層の断層内物質試料を用いて実施した静的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係(次頁参照)において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。
- F-7断層, F-9断層及びF-10断層は、ボーリング調査で認められた断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-2断層～F-6断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。



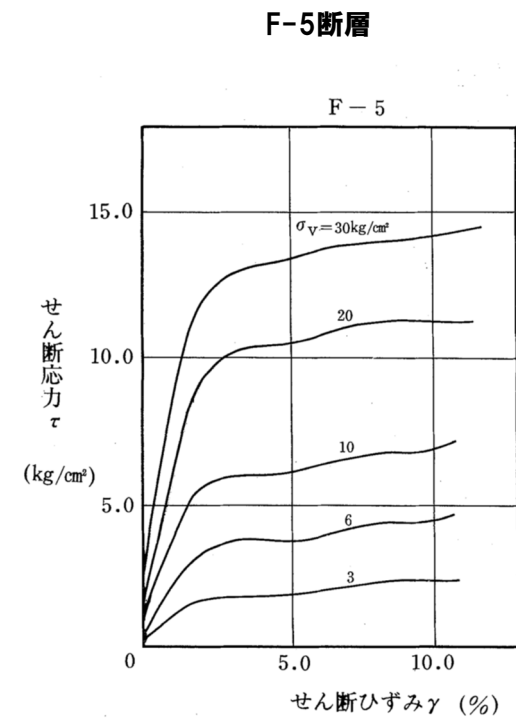
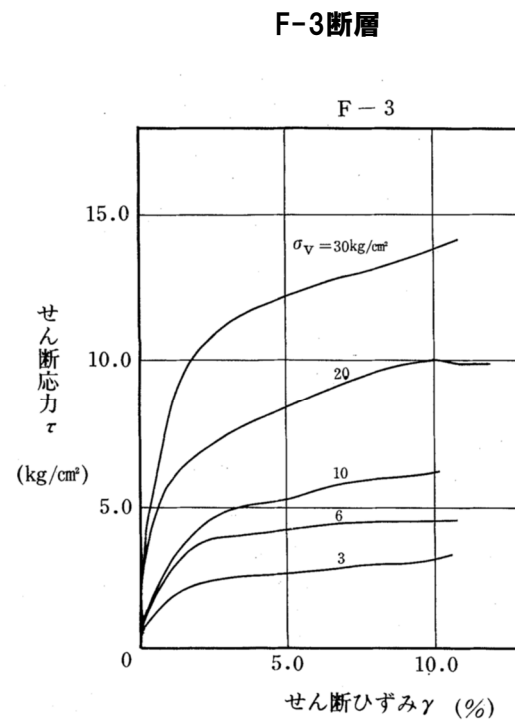
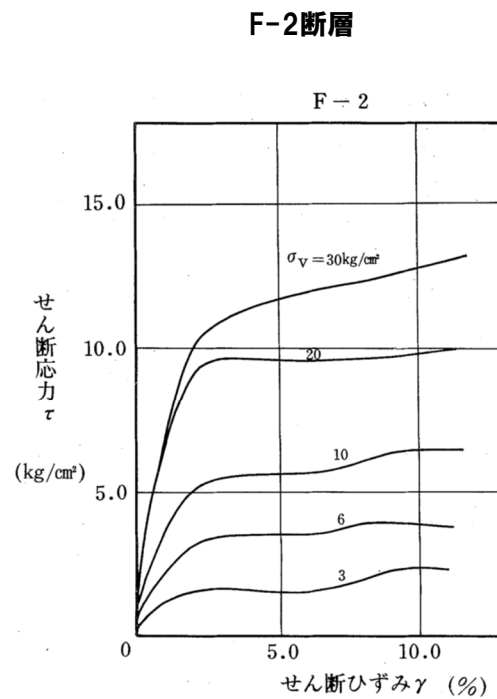
試料採取位置図



静的単純せん断試験結果(破壊包絡線)

## 2.3.3 強度特性

## ②強度特性:F-2断層～F-6断層並びにF-7断層, F-9断層及びF-10断層 (2/2)

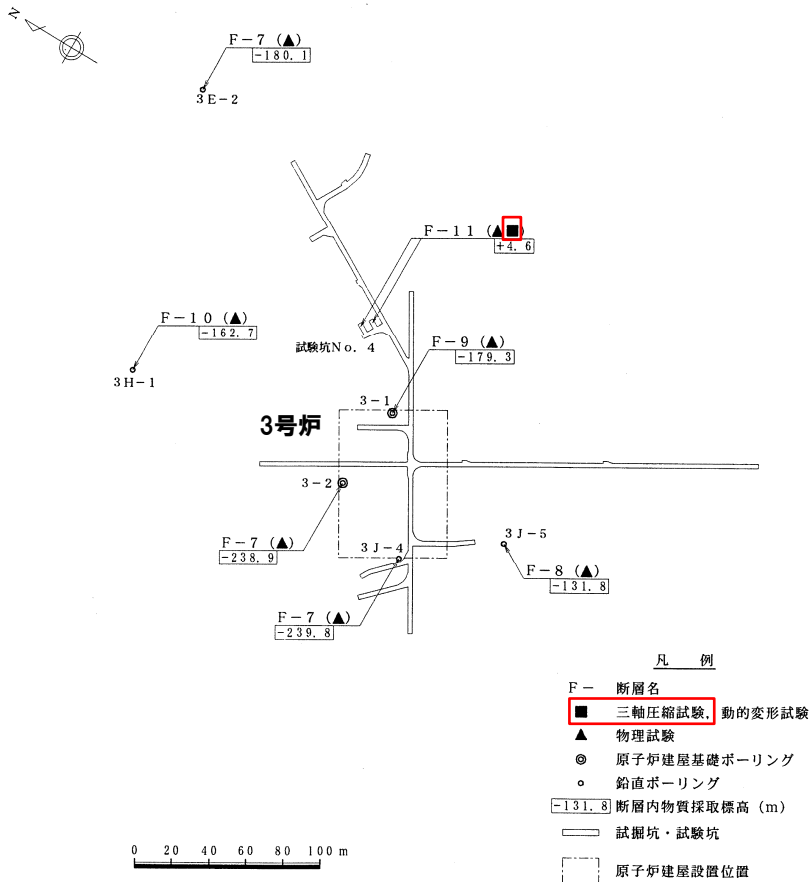


静的単純せん断試験結果 (応力～ひずみ関係)

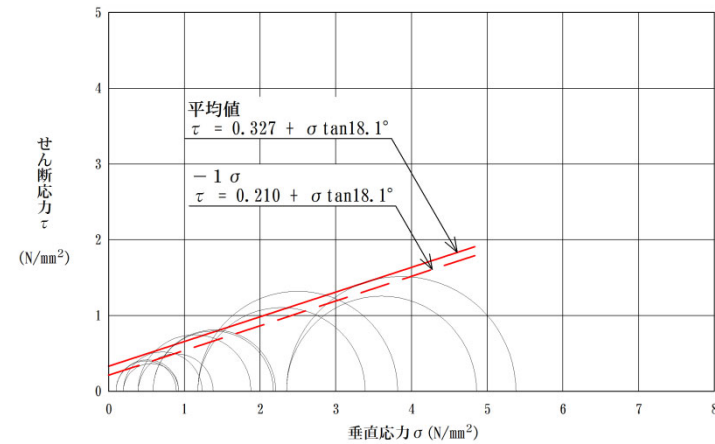
# 2.3.3 強度特性

## ③強度特性:F-8断層及びF-11断層

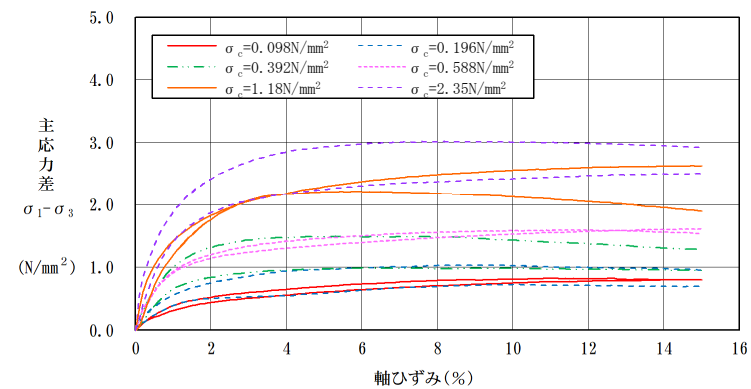
- F-11断層の強度特性は、試掘坑から採取したF-11断層の断層内物質試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。
- F-8断層は、ボーリング調査で認められた断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-11断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)



三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

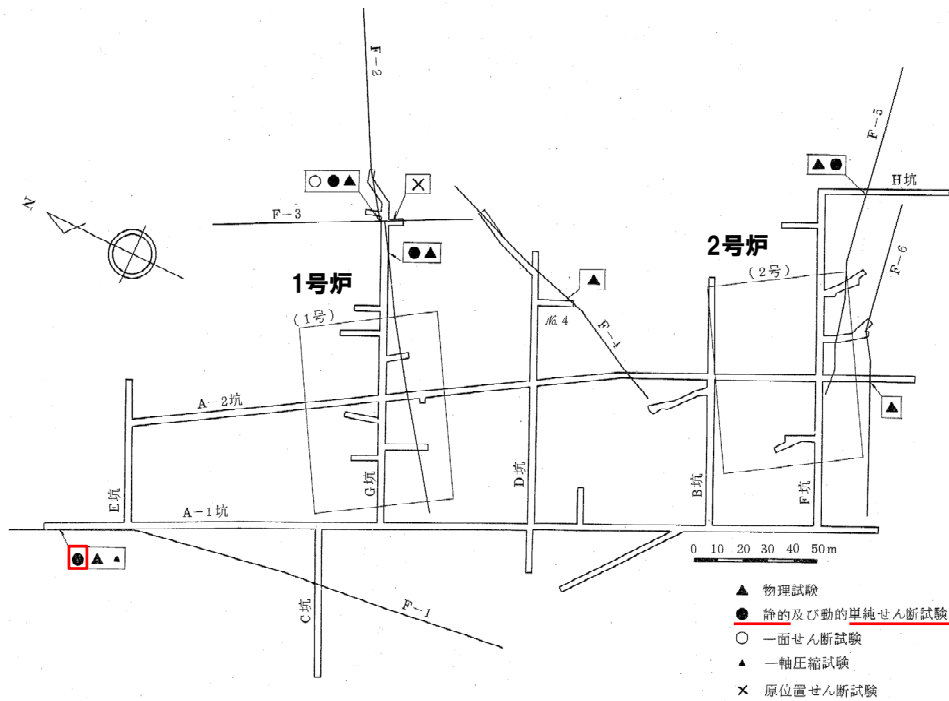


## 2.3.4 静的変形特性

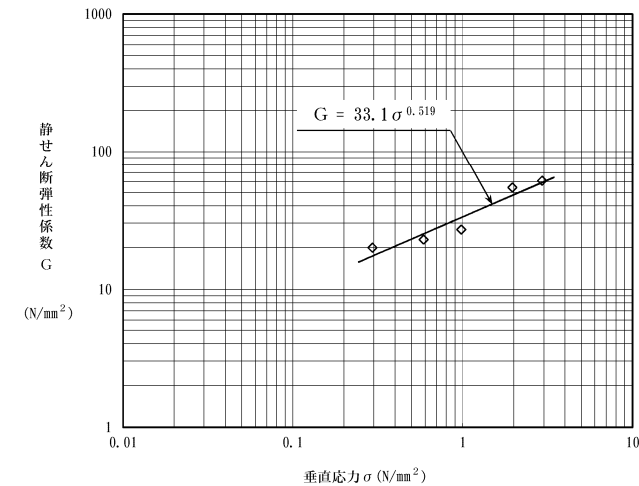
## ① 静的変形特性:F-1断層

○F-1断層の静弾性係数は、試掘坑から採取したF-1断層の断層内物質試料を用いて実施した静的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。

○F-1断層の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



試料採取位置図



静弾性係数E

静ポアソン比  $\nu = 0.40$ より

$$E = 2(1 + \nu)G$$

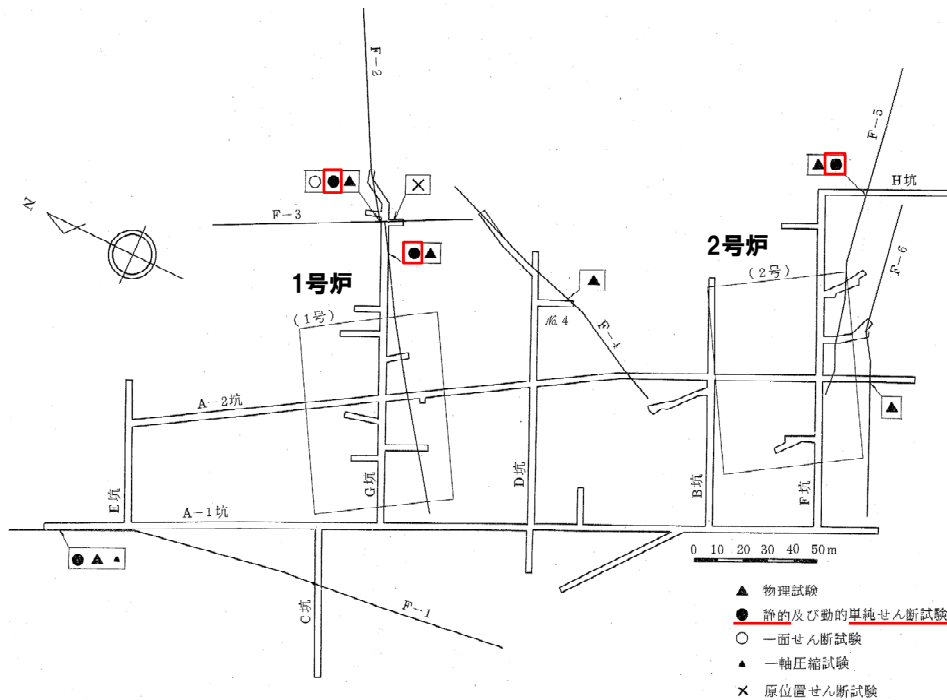
$$= 2 \times (1 + 0.40) \times 33.1 \sigma_v^{0.519}$$

$$= 92.6 \sigma_v^{0.519} \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

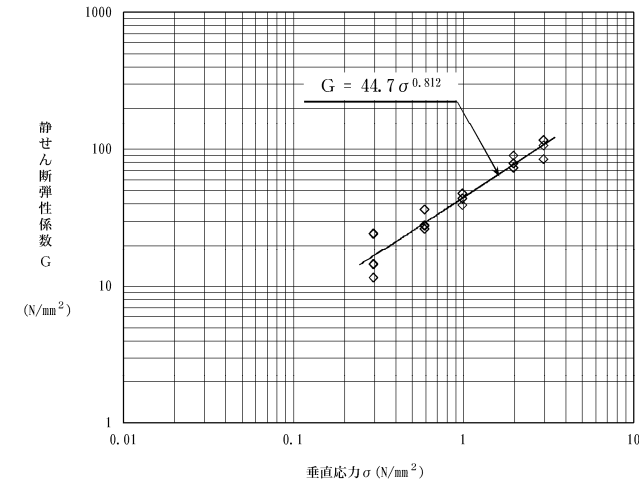
## 2.3.4 静的変形特性

### ② 静的変形特性:F-2断層～F-6断層並びにF-7断層, F-9断層及びF-10断層

- F-2断層～F-6断層の静弾性係数は、試掘坑から採取したF-2断層, F-3断層及びF-5断層の断層内物質試料を用いて実施した静的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。
- F-2断層～F-6断層の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。
- F-7断層, F-9断層及びF-10断層は、ボーリング調査で確認された断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-2断層～F-6断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。



試料採取位置図



静弾性係数E  
静ポアソン比  $\nu = 0.40$  より  

$$E = 2(1 + \nu)G$$

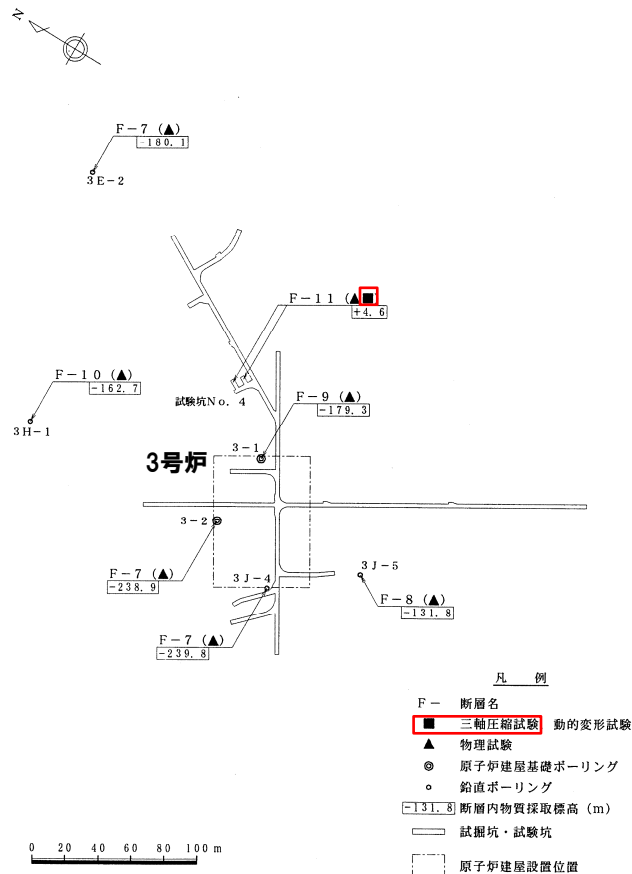
$$= 2 \times (1 + 0.40) \times 44.7 \sigma^{0.812}$$

$$= 125 \sigma^{0.812} \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

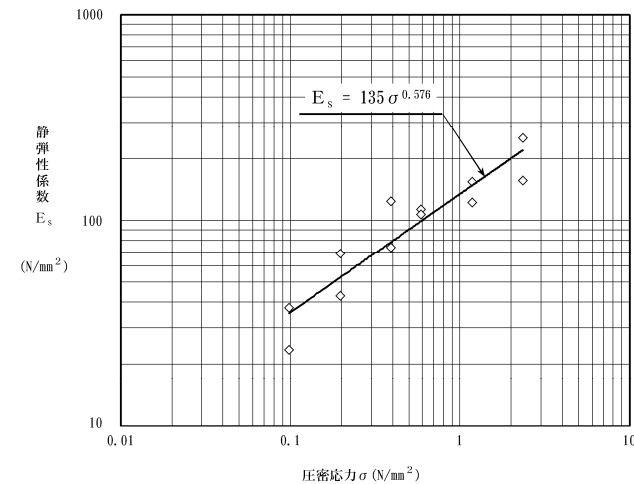
## 2.3.4 静的変形特性

## ③ 静的変形特性:F-8断層及びF-11断層

- F-11断層の静弾性係数は、試掘坑から採取したF-11断層の断層内物質試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- F-11断層の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。
- F-8断層は、ボーリング調査で認められた断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-11断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。



試料採取位置図



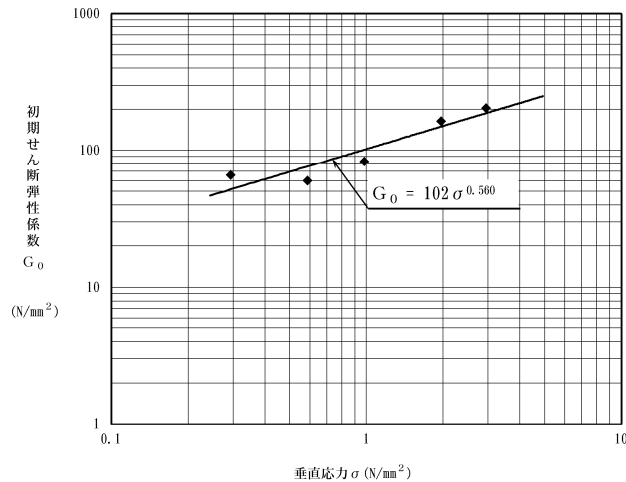
三軸圧縮試験結果

# 2.3.5 動的変形特性

## ① 動的変形特性:F-1断層

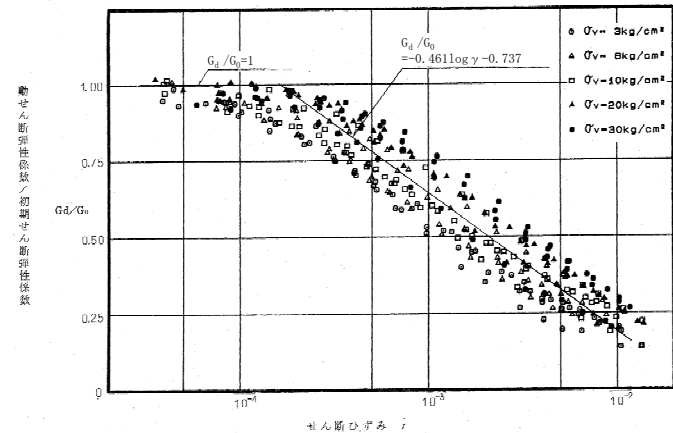
- F-1断層の初期せん断弾性係数 $G_0$ は、試掘坑から採取したF-1断層の断層内物質試料を用いて実施した動的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した(試料の採取位置は、強度特性の静的単純せん断試験と同じ、P65参照)。
- F-1断層の動ポアソン比 $\nu_d$ は、試掘坑を利用したF-1断層の超音波伝播速度試験結果から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した。
- F-1断層の動せん断弾性係数 $G_d$ のひずみ依存特性に関しては、F-1断層、F-2断層、F-3断層及びF-5断層の断層内物質試料を用いて実施した動的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。
- F-1断層の減衰定数 $h$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編-(地盤工学会)」を参照し、10%と設定した。

【初期せん断弾性係数】



動的単純せん断試験結果(初期せん断弾性係数 $G_0$ )

【ひずみ依存特性】



動的単純せん断試験結果(動せん断弾性係数 $G_d$ )

【動ポアソン比】

岩種・岩盤分類	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$
F-1断層	1.6	0.30	0.48

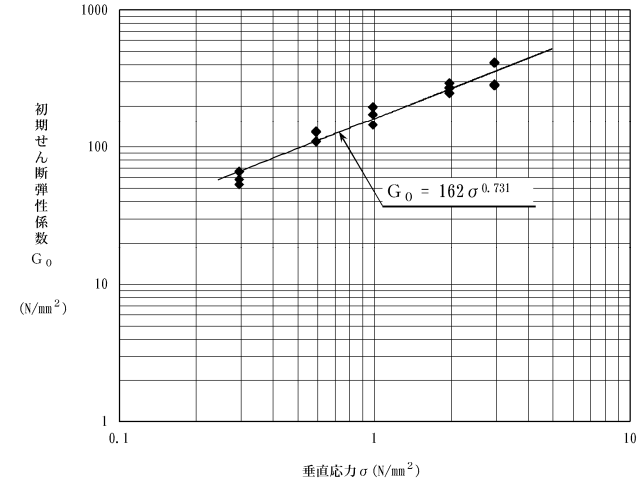
$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

# 2.3.5 動的変形特性

## ②動的変形特性：F-2断層～F-6断層並びにF-7断層, F-9断層及びF-10断層

- F-2断層～F-6断層の初期せん断弾性係数 $G_0$ は、試掘坑から採取したF-2断層, F-3断層及びF-5断層の断層内物質試料を用いて実施した動的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した(試料の採取位置は、強度特性の静的単純せん断試験と同じ, P66参照)。
- F-2断層～F-6断層の動ポアソン比 $\nu_d$ は、試掘坑を利用したF-2断層～F-6断層の超音波伝播速度試験から算出した動ポアソン比の平均値より設定した。
- F-2断層～F-6断層の動せん断弾性係数 $G_d$ のひずみ依存特性に関しては、F-1断層, F-2断層, F-3断層及びF-5断層の断層内物質試料を用いて実施した動的単純せん断試験の試験結果を用いて設定した。
- F-2断層～F-6断層の減衰定数 $h$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編-(地盤工学会)」を参照し、10%と設定した。
- F-7断層, F-9断層及びF-10断層は、ボーリング調査で確認された断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-2断層～F-6断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。

【初期せん断弾性係数】



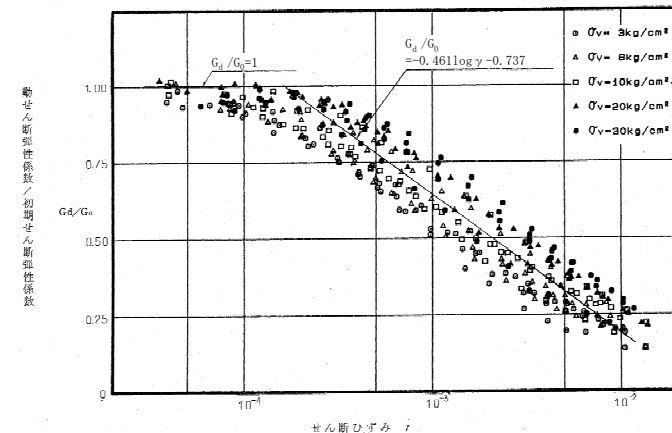
動的単純せん断試験結果 (初期せん断弾性係数 $G_0$ )

【動ポアソン比】

岩種・岩盤分類	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$	
F-2断層	1.8	0.42	0.47	0.48
F-3断層	1.7	0.27	0.49	
F-4断層	1.6	0.15	0.50	
F-5断層	1.7	0.37	0.48	
F-6断層	1.5	0.38	0.47	

$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

【ひずみ依存特性】



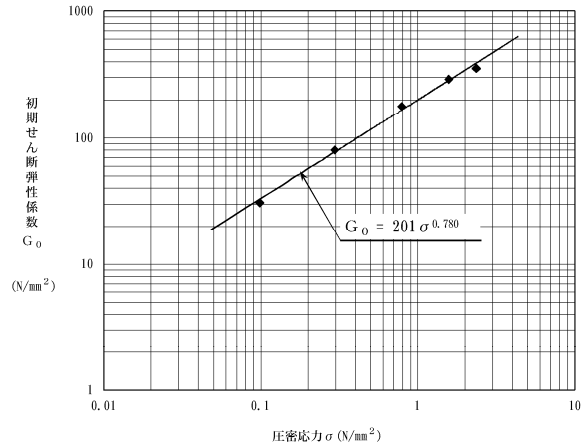
動的単純せん断試験結果 (動せん断弾性係数 $G_d$ )

# 2.3.5 動的変形特性

## ③動的変形特性:F-8断層及びF-11断層

- F-11断層の動的変形特性の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、試掘坑から採取したF-11断層の断層内物質試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した(試料の採取位置は、強度特性の三軸圧縮試験と同じ、P68参照)。
- F-11断層の動ポアソン比 $\nu_d$ は、試掘坑から採取したF-11断層の断層内物質試料を用いて実施した超音波伝播速度試験から算出したP波速度及びS波速度の平均速度より設定した。
- F-8断層は、ボーリング調査で認められた断層であることから、1,2号炉調査におけるF-1断層及びF-2断層～F-6断層並びに3号炉調査におけるF-11断層と物理試験結果を比較した上で、物理特性が類似しているF-11断層の解析用物性値を使用した(断層の解析用物性値の設定の考え方は、P61～P63参照)。

### 【初期せん断弾性係数】

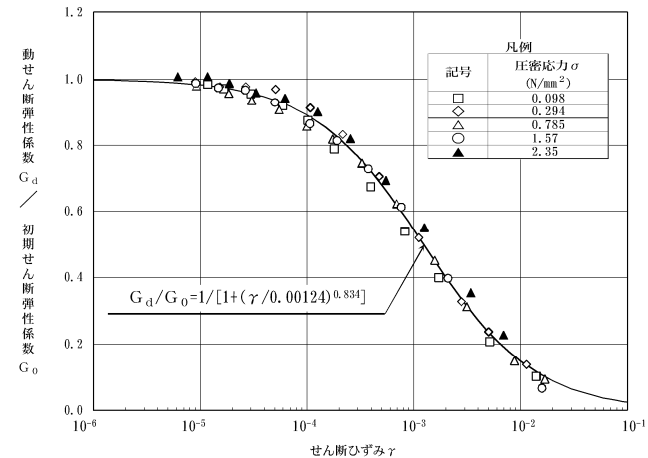


動的変形試験結果(初期せん断弾性係数 $G_0$ )

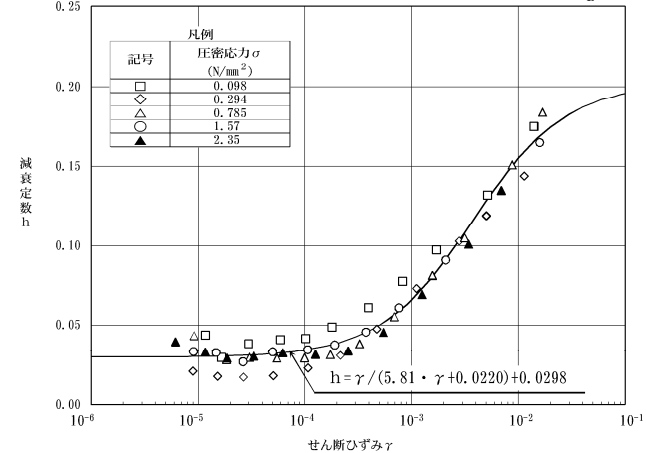
### 【動ポアソン比】

岩種・岩盤分類	P波速度: $V_p$ (km/s)	S波速度: $V_s$ (km/s)	動ポアソン比: $\nu_d$
F-11断層	2.1	0.51	0.47

### 【ひずみ依存特性】



### 動的変形試験結果(動せん断弾性係数 $G_d$ )



### 動的変形試験結果(減衰定数 $h$ )

$$\text{動ポアソン比: } \nu_d = \frac{(V_p/V_s)^2 - 2}{2\{(V_p/V_s)^2 - 1\}}$$

1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b>	<b>P. 17</b>
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
<b>2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値</b>	<b>P. 75</b>
2.5 地盤の支持力	P. 93
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

## 2.4.1 物理特性

### 密度:As1, As2, Ac及びDs

○As1, As2, Ac及びDsの密度は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した密度試験における飽和密度の平均値を設定した。

密度試験結果

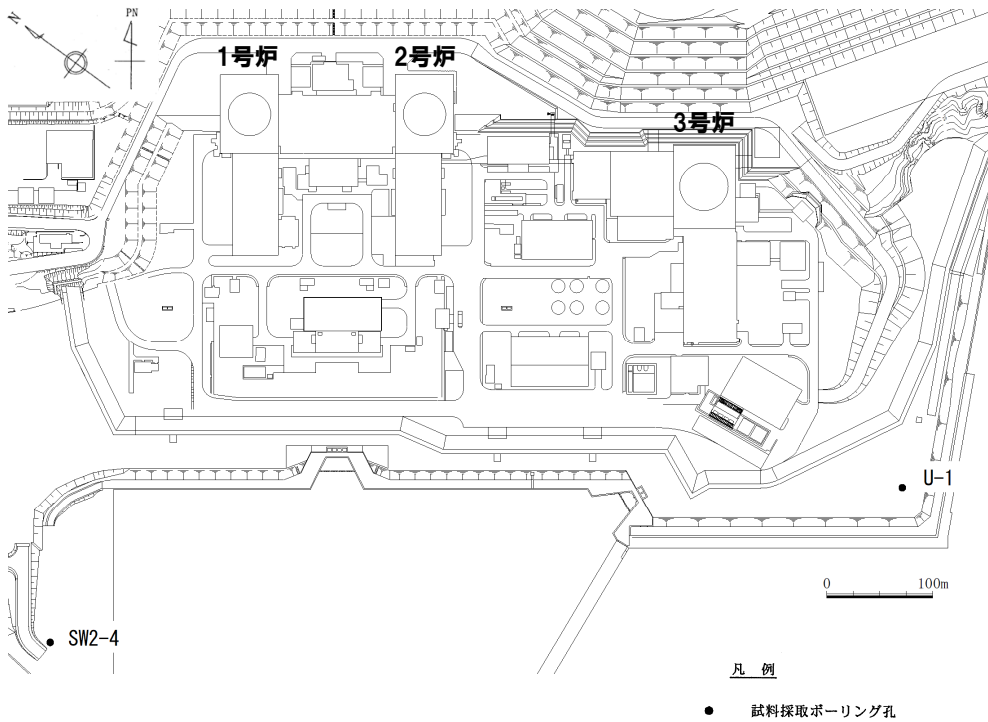
岩種・岩盤分類	試験個数	密度 (g/cm <sup>3</sup> )
As1	57	1.90
As2	51	1.97
Ac	36	1.65
Ds	16	2.02



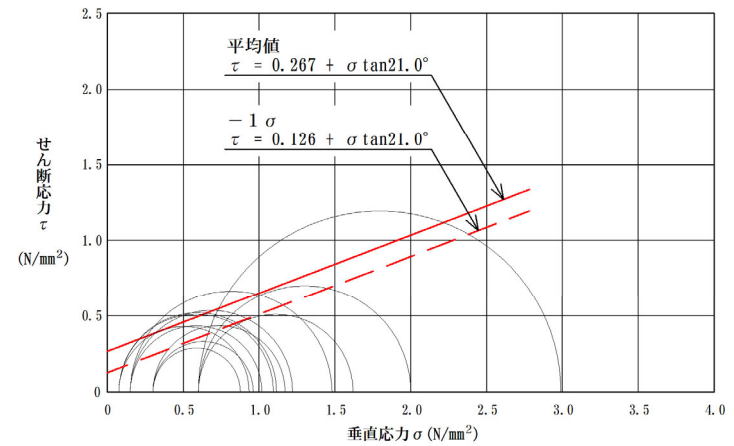
# 2.4.2 強度特性

## ①強度特性:As1

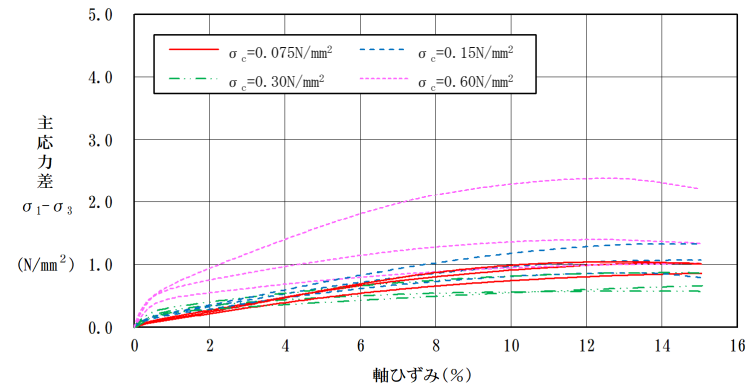
- As1の強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- 残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)

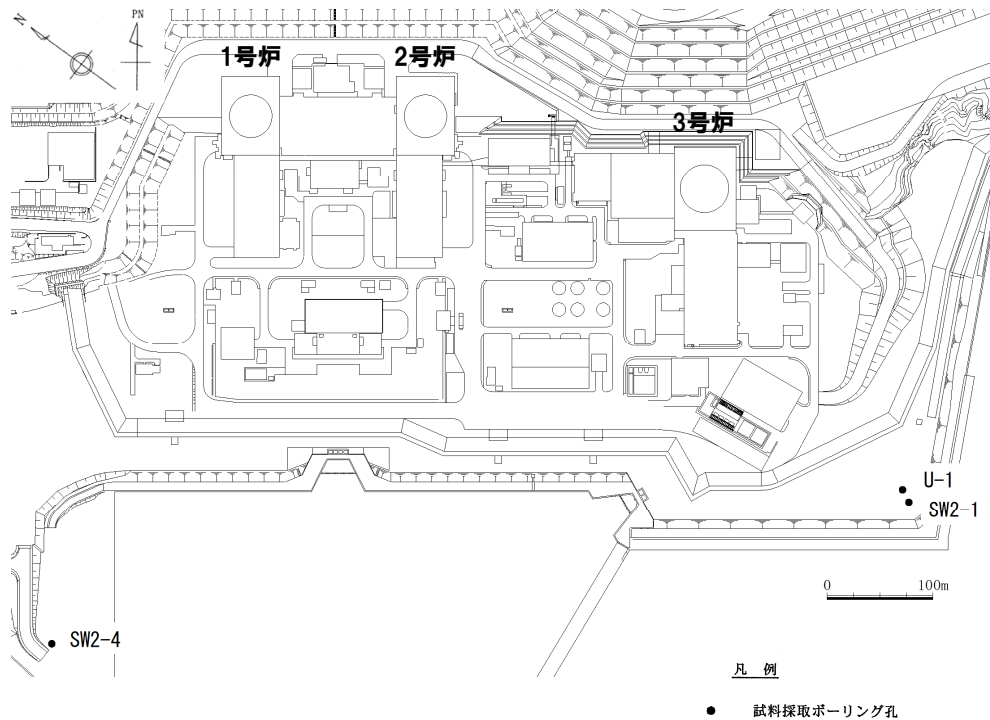


三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

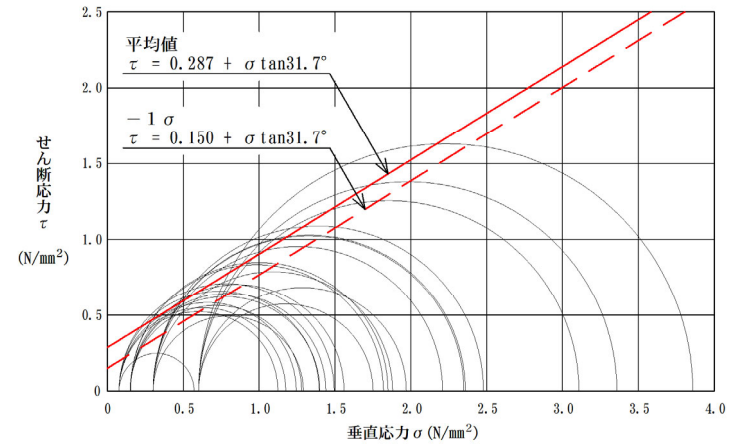
# 2.4.2 強度特性

## ②強度特性:As2

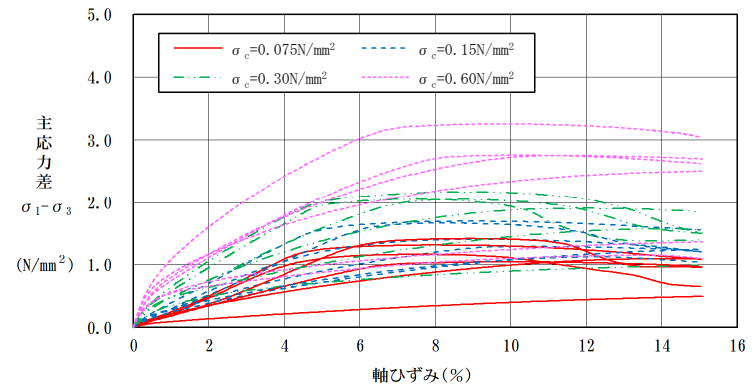
○As2の強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)

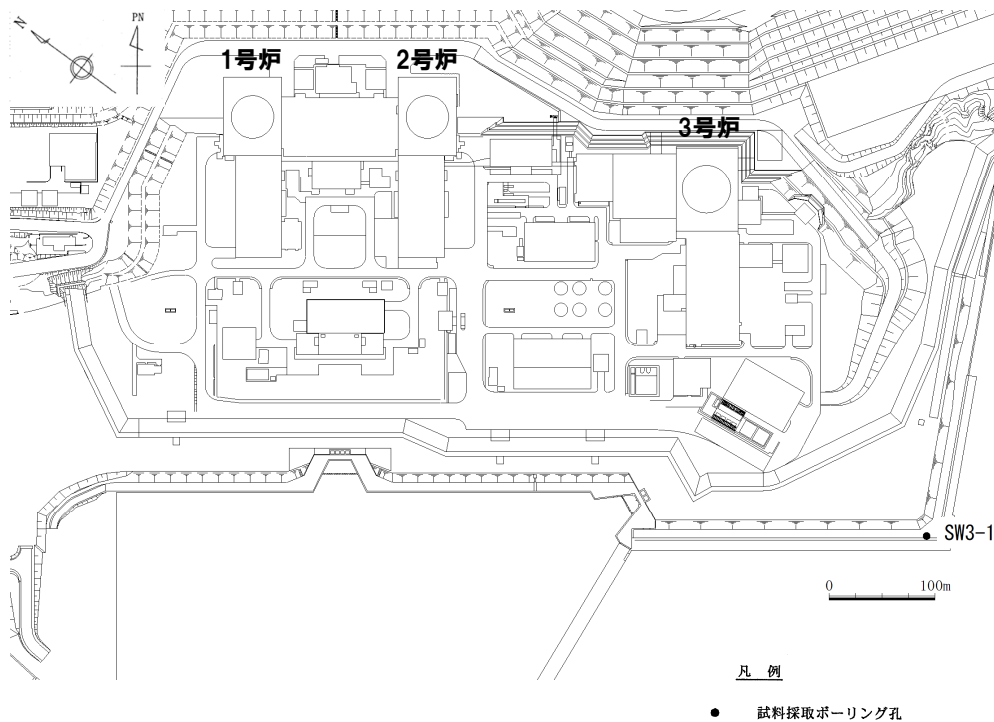


三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

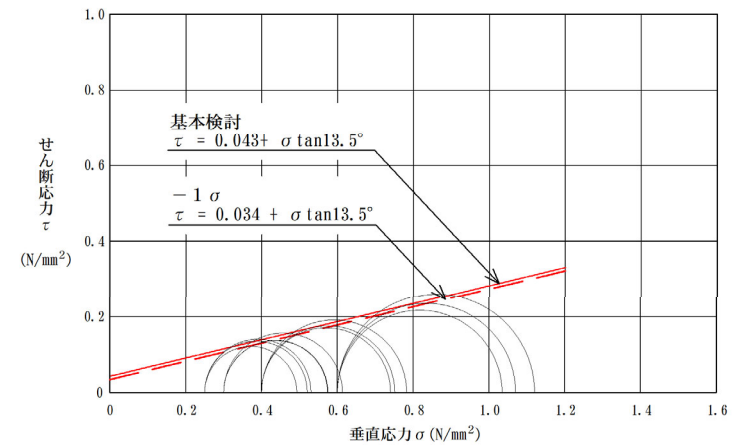
## 2.4.2 強度特性

## ③強度特性:Ac

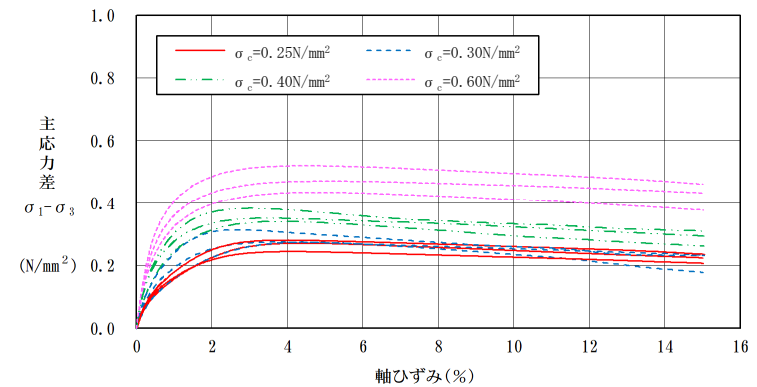
- Acの強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○残留強度は、応力～ひずみ関係において、ひずみ軟化傾向が認められないことから、せん断強度と同じ値で設定した。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)



三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

## 2.4.2 強度特性

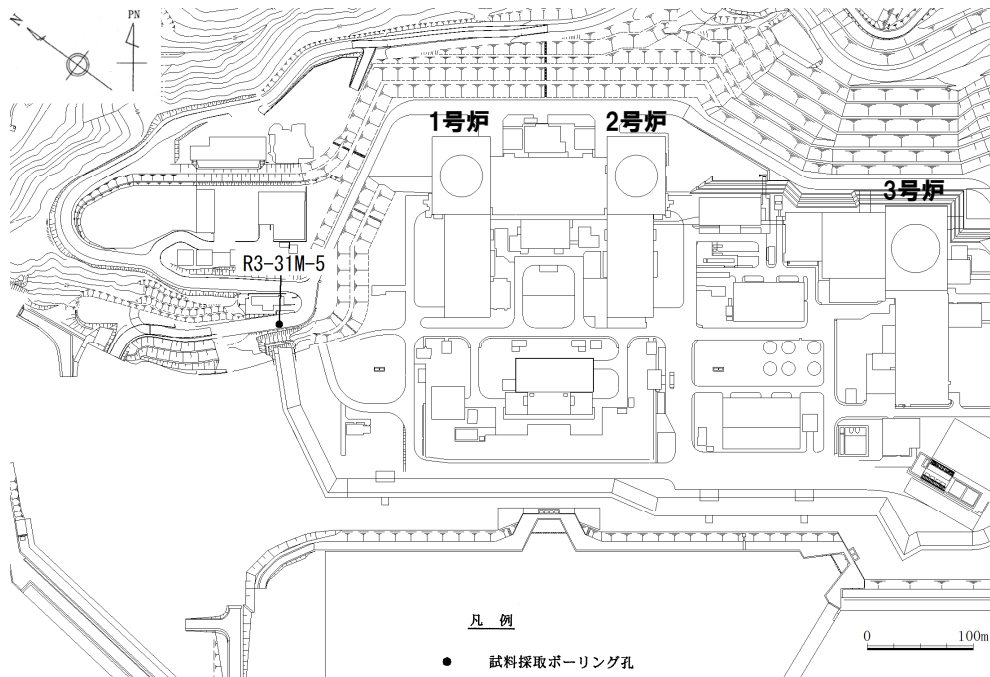
## ④強度特性:Ds

○Dsの強度特性は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。

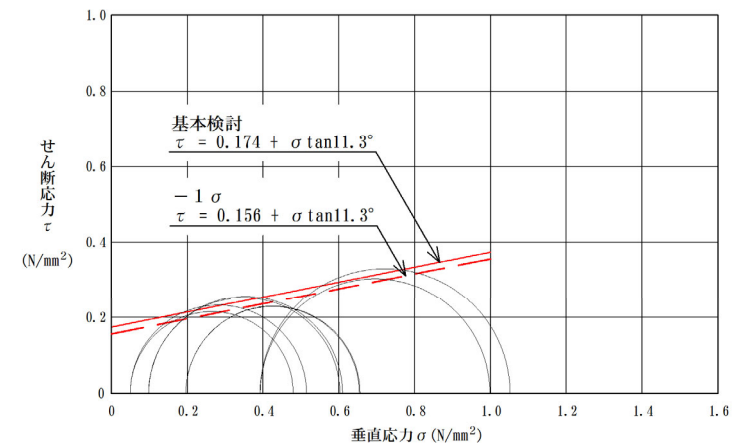
○残留強度は、以下の理由から、せん断強度と同じ値で設定した。

- ・応力～ひずみ関係において、相対的に高い圧密応力の条件で実施した試験については主応力差が最大値となった後、軟化する傾向が認められる※ものの、試験結果の全体的な特徴としてはひずみ軟化傾向が認められないものと判断した。

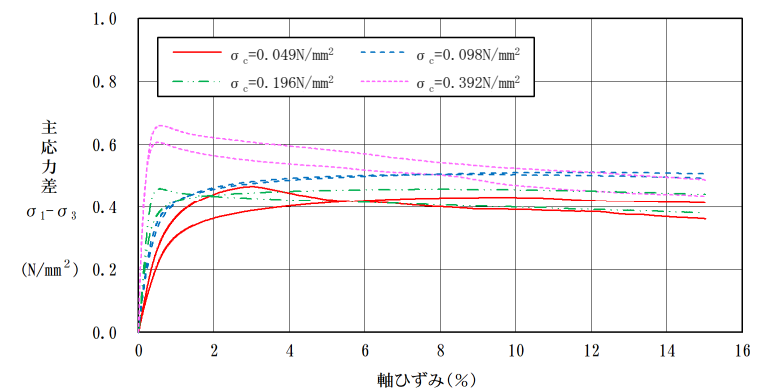
※相対的に高い圧密応力の条件で実施した試験（圧密応力 $\sigma_c=0.392\text{N/mm}^2$ ）においては、主応力差が最大値 $0.66\text{N/mm}^2$ となった後、 $0.49\text{N/mm}^2$ 程度に低下する結果となっている。



試料採取位置図



三軸圧縮試験結果 (破壊包絡線)

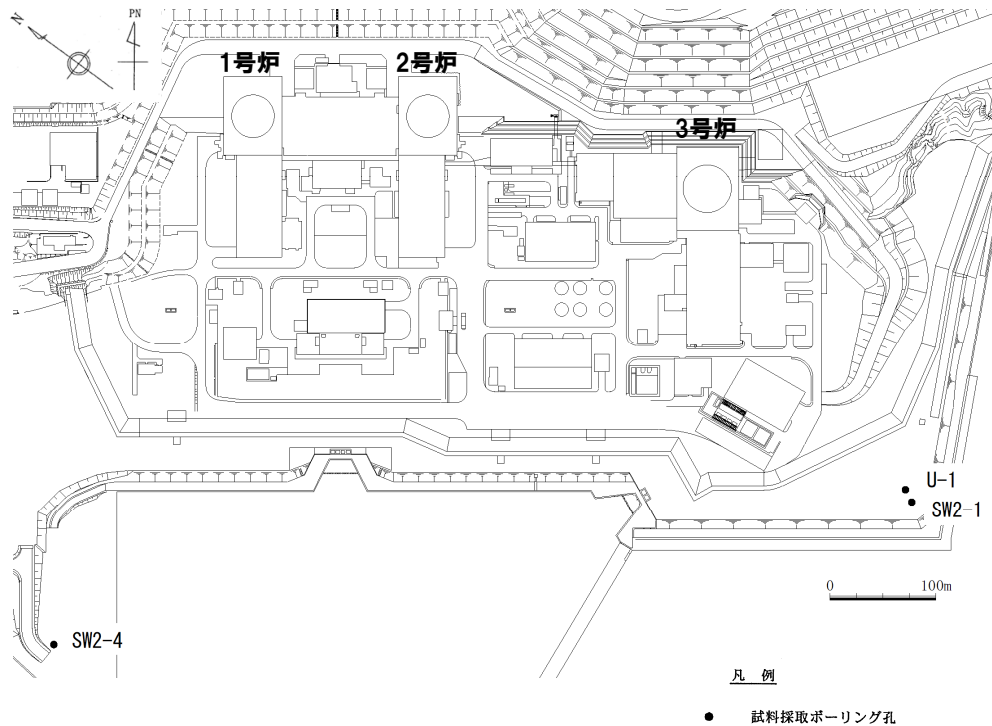


三軸圧縮試験結果 (応力～ひずみ関係)

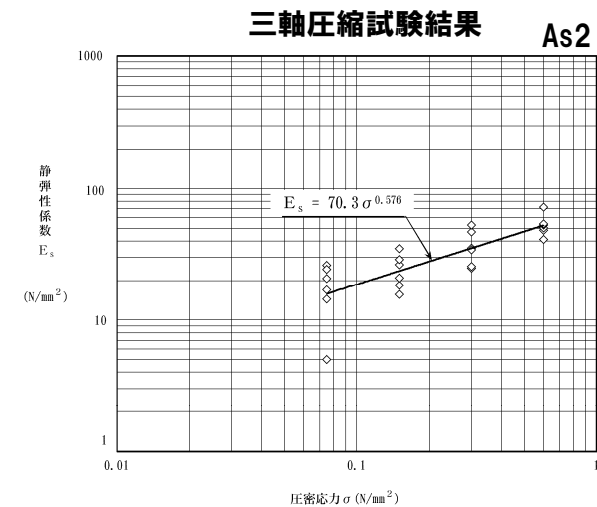
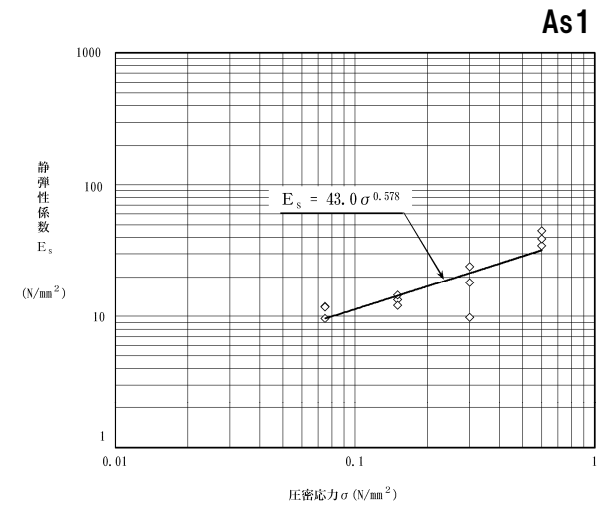
## 2.4.3 静的変形特性

## ① 静的変形特性:As1及びAs2

- As1及びAs2の静弾性係数は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○As1及びAs2の静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



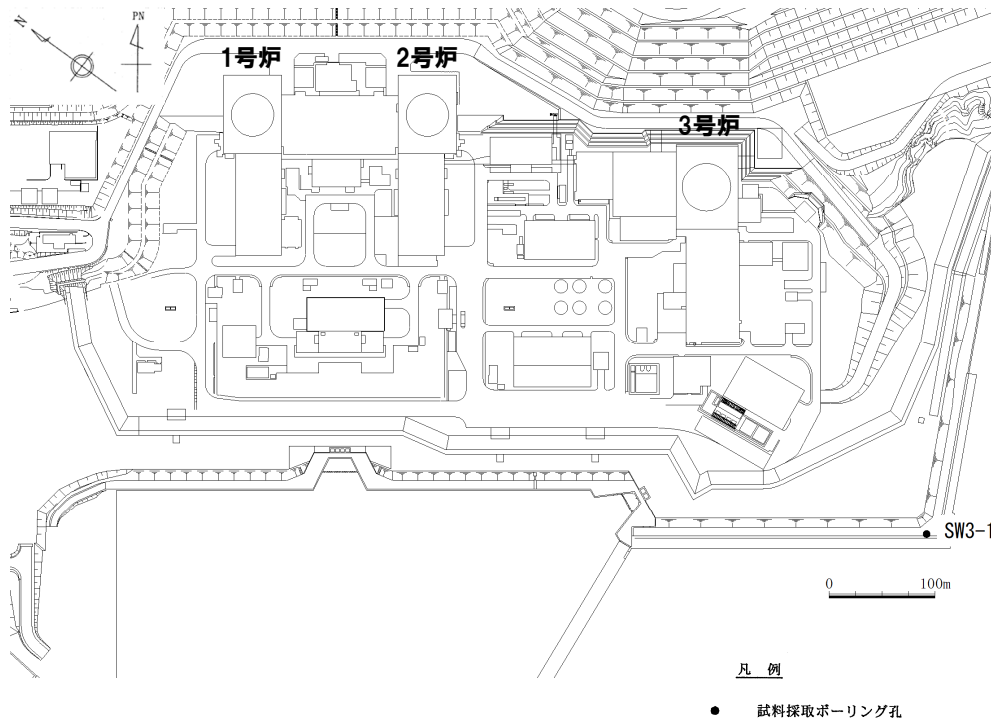
試料採取位置図



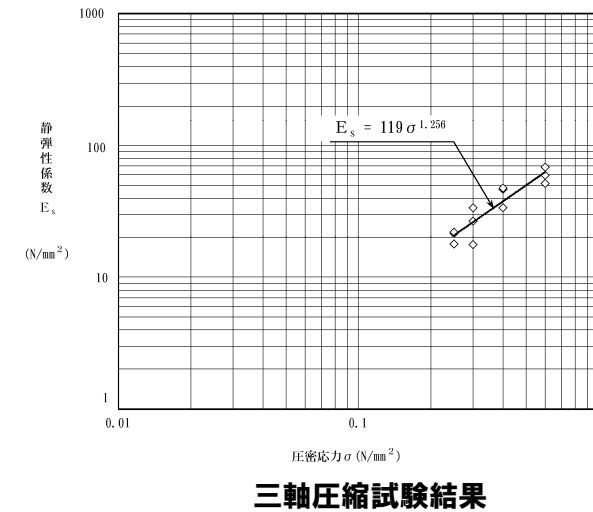
三軸圧縮試験結果

## ② 静的変形特性:Ac

- Acの静弾性係数は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。
- Acの静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。

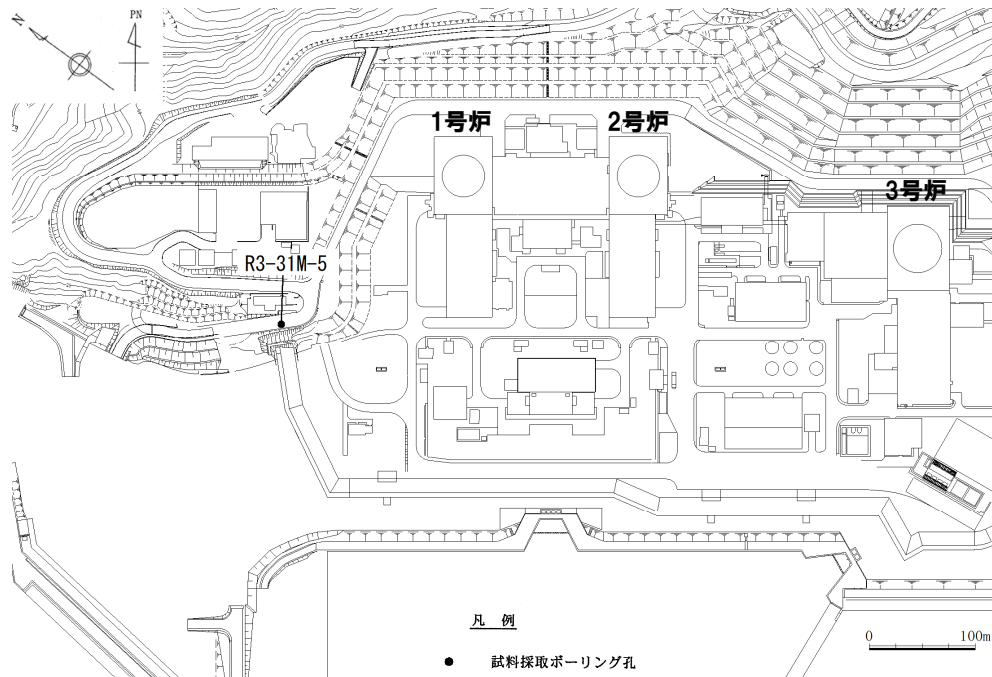


試料採取位置図

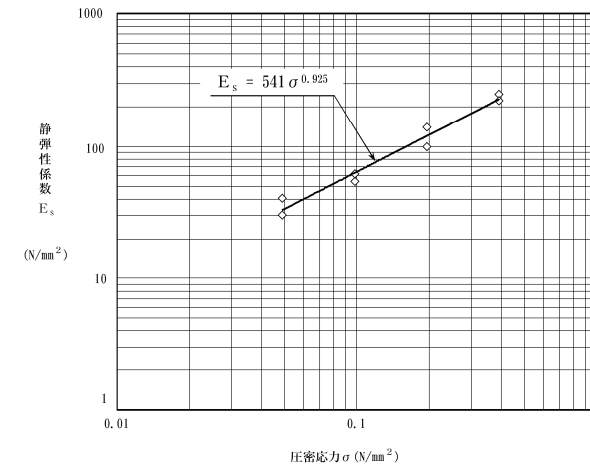


## ③ 静的変形特性: Ds

- Dsの静弾性係数は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した三軸圧縮試験の試験結果を用いて設定した。  
○Dsの静ポアソン比は、「原子力発電所耐震設計技術指針JEAG4601-1987(日本電気協会)」を参照し、0.40と設定した。



試料採取位置図



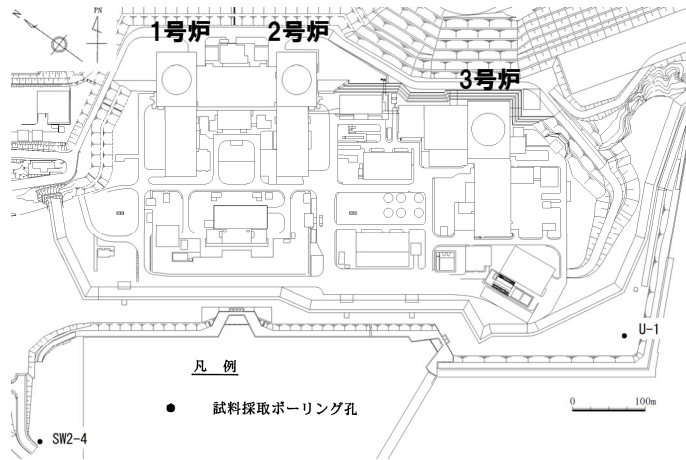
三軸圧縮試験結果



# 2.4.4 動的変形特性

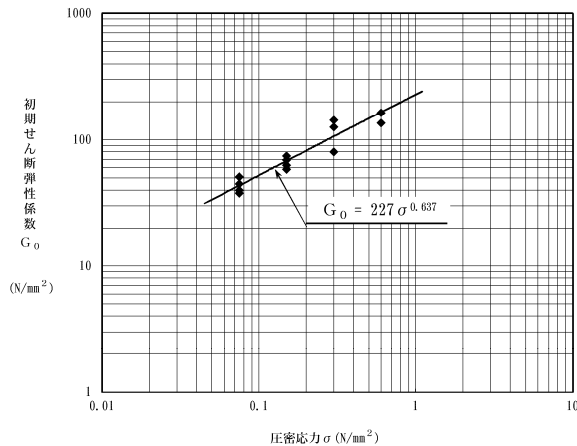
## ① 動的変形特性: As1

- As1の動的変形特性の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。
- As1の動ポアソン比 $\nu_d$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編- (地盤工学会, 2007)」を参照し、0.40と設定した。



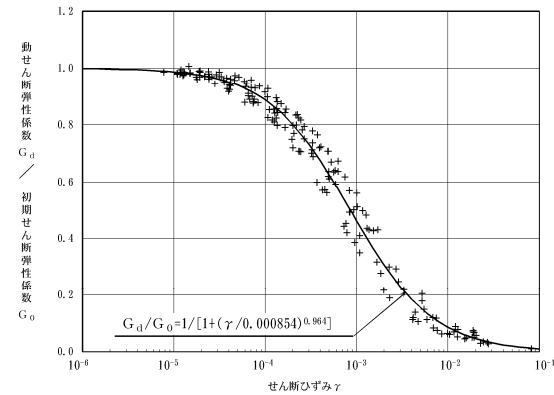
試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

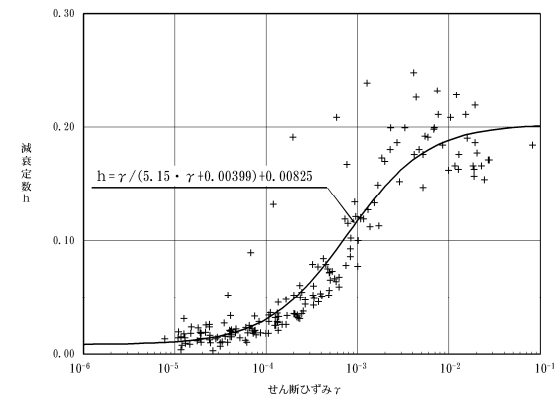


動的変形試験結果 (初期せん断弾性係数 $G_0$ )

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果 (動せん断弾性係数 $G_d$ )



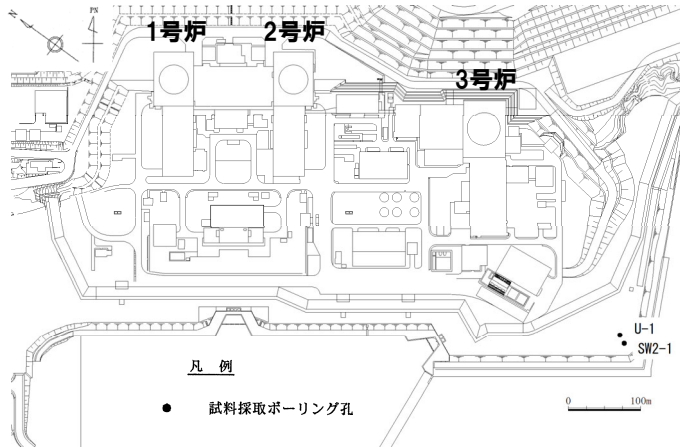
動的変形試験結果 (減衰定数 $h$ )



# 2.4.4 動的変形特性

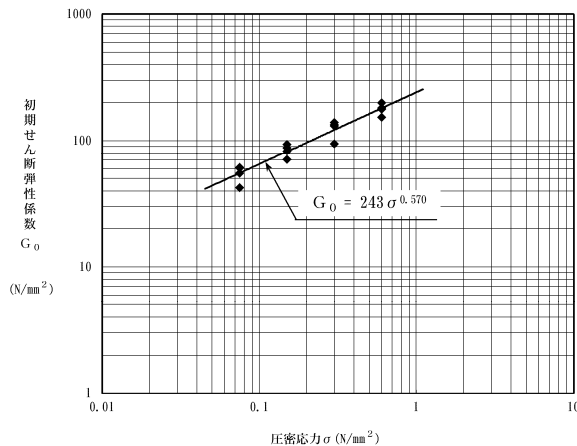
## ②動的変形特性:As2

- As2の動的変形特性の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。
- As2の動ポアソン比 $\nu_d$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編- (地盤工学会, 2007)」を参照し、0.40と設定した。



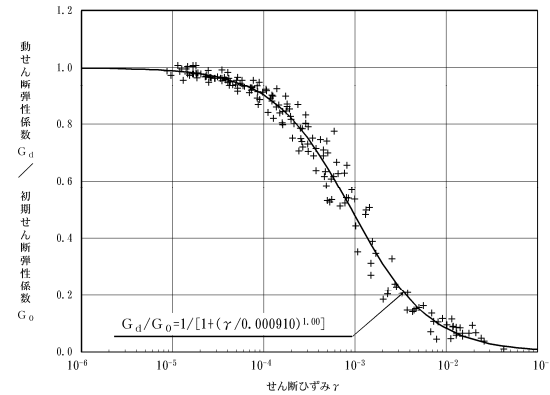
試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

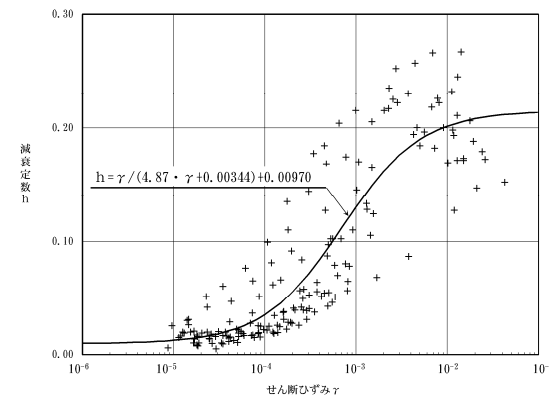


動的変形試験結果 (初期せん断弾性係数 $G_0$ )

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果 (動せん断弾性係数 $G_d$ )

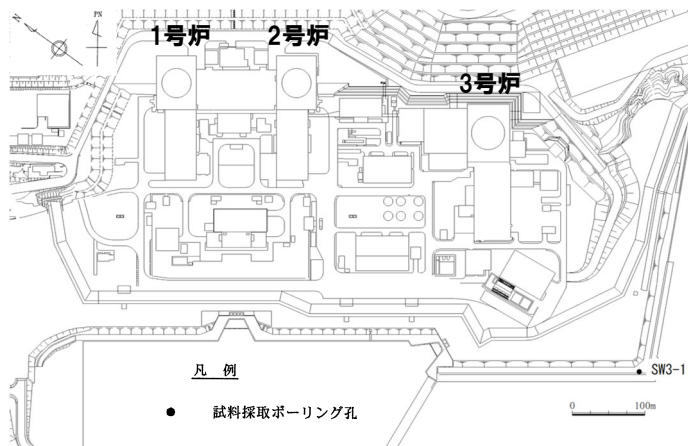


動的変形試験結果 (減衰定数 $h$ )

# 2.4.4 動的変形特性

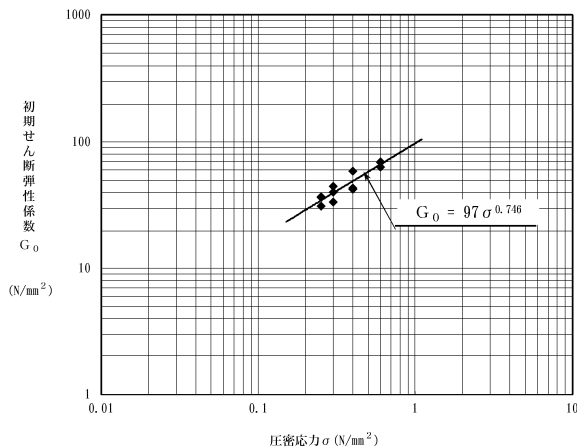
## ③動的変形特性:Ac

- Acの動的変形特性の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。
- Acの動ポアソン比 $\nu_d$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編-(地盤工学会, 2007)」を参照し、0.40と設定した。



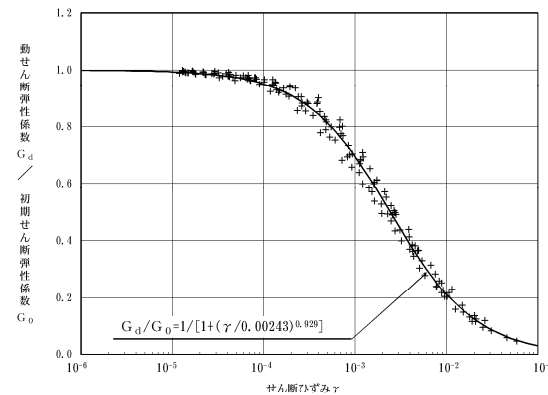
試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

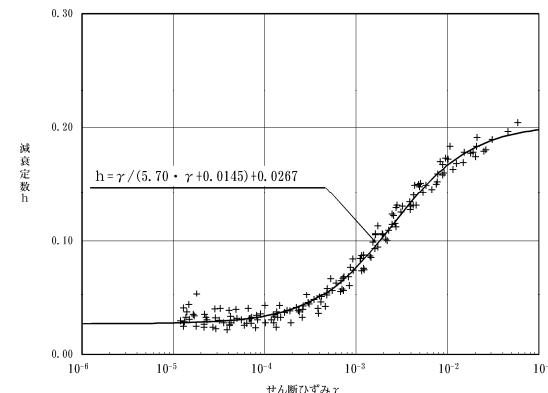


動的変形試験結果 (初期せん断弾性係数 $G_0$ )

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果 (動せん断弾性係数 $G_d$ )

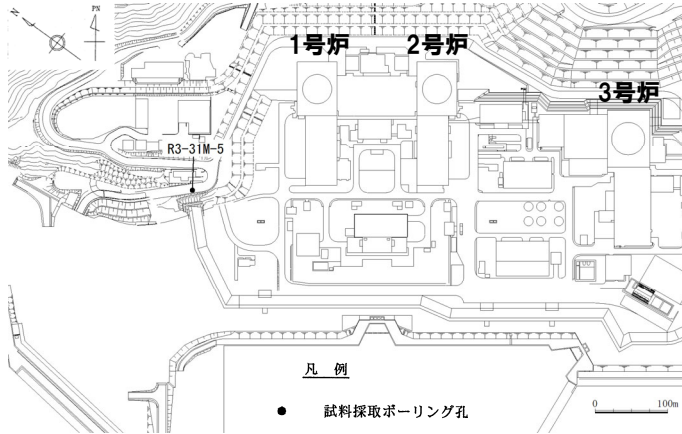


動的変形試験結果 (減衰定数 $h$ )

# 2.4.4 動的変形特性

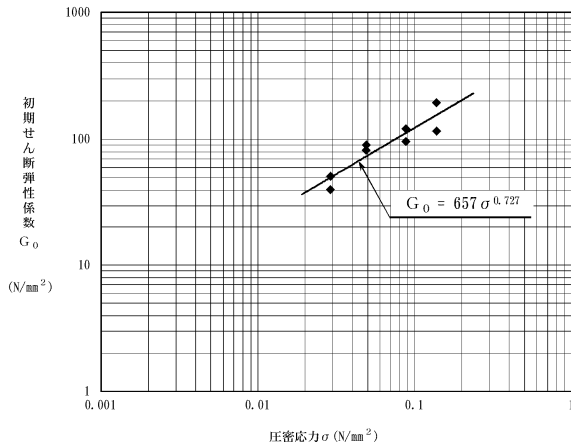
## ④ 動的変形特性: Ds

- Dsの動的変形特性の動せん断弾性係数 $G_d$ 及び減衰定数 $h$ は、ボーリングコアから採取した試料を用いて実施した動的変形試験の試験結果を用いて設定した。
- Dsの動ポアソン比 $\nu_d$ は、「設計用地盤定数の決め方-岩盤編-(地盤工学会, 2007)」を参照し、0.40と設定した。



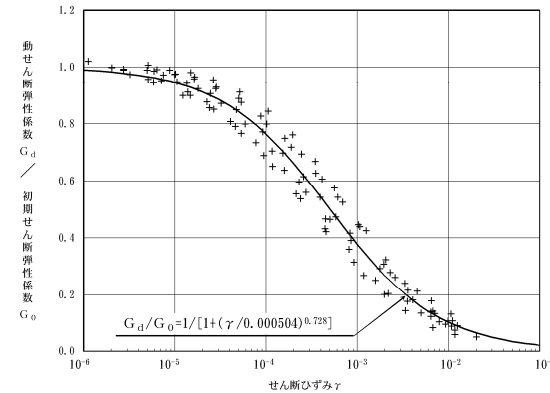
試料採取位置図

### 【初期せん断弾性係数】

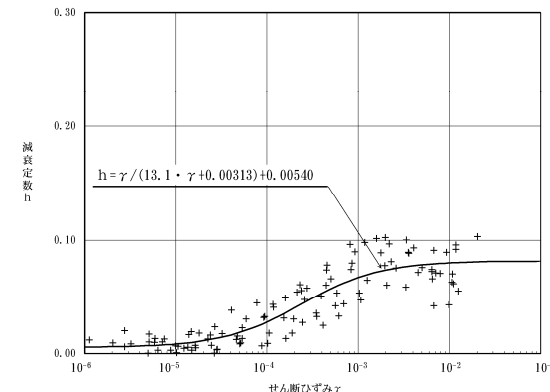


動的変形試験結果 (初期せん断弾性係数 $G_0$ )

### 【ひずみ依存特性】



動的変形試験結果 (動せん断弾性係数 $G_d$ )



動的変形試験結果 (減衰定数 $h$ )

余白

## 2.4.5 沖積層に相当する砂層の分類

## 沖積層に相当する砂層の分類について(1/3)

再掲(R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について(設計基準対象施設等)  
第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-3」抜粋

※紫下線を今回加筆。

岸壁及び津波防護施設前面には、沖積層に相当する砂層(As1層及びAs2層)、砂礫層(Ag層)及び粘土・シルト層(Ac層)が分布している。

道路橋示方書・同解説 IV下部構造編(2012) (以下、「日本道路協会(2012, IV下部構造偏)」という)では、「砂層、砂礫層はN値が30程度以上あれば良質な支持層と考えてよい。」とされている(下記参照)。

また、地盤調査・土質試験結果の解釈と適用例では、N値と相対密度の関係が示されており、30未満は「中位の～非常に緩い」、30以上は「密な～非常に密な」とされている(下記参照)。

以上に基づき、砂層については、N値<30をAs1層、N値 $\geq$ 30をAs2層と分類し、それぞれの解析用物性値を設定する。

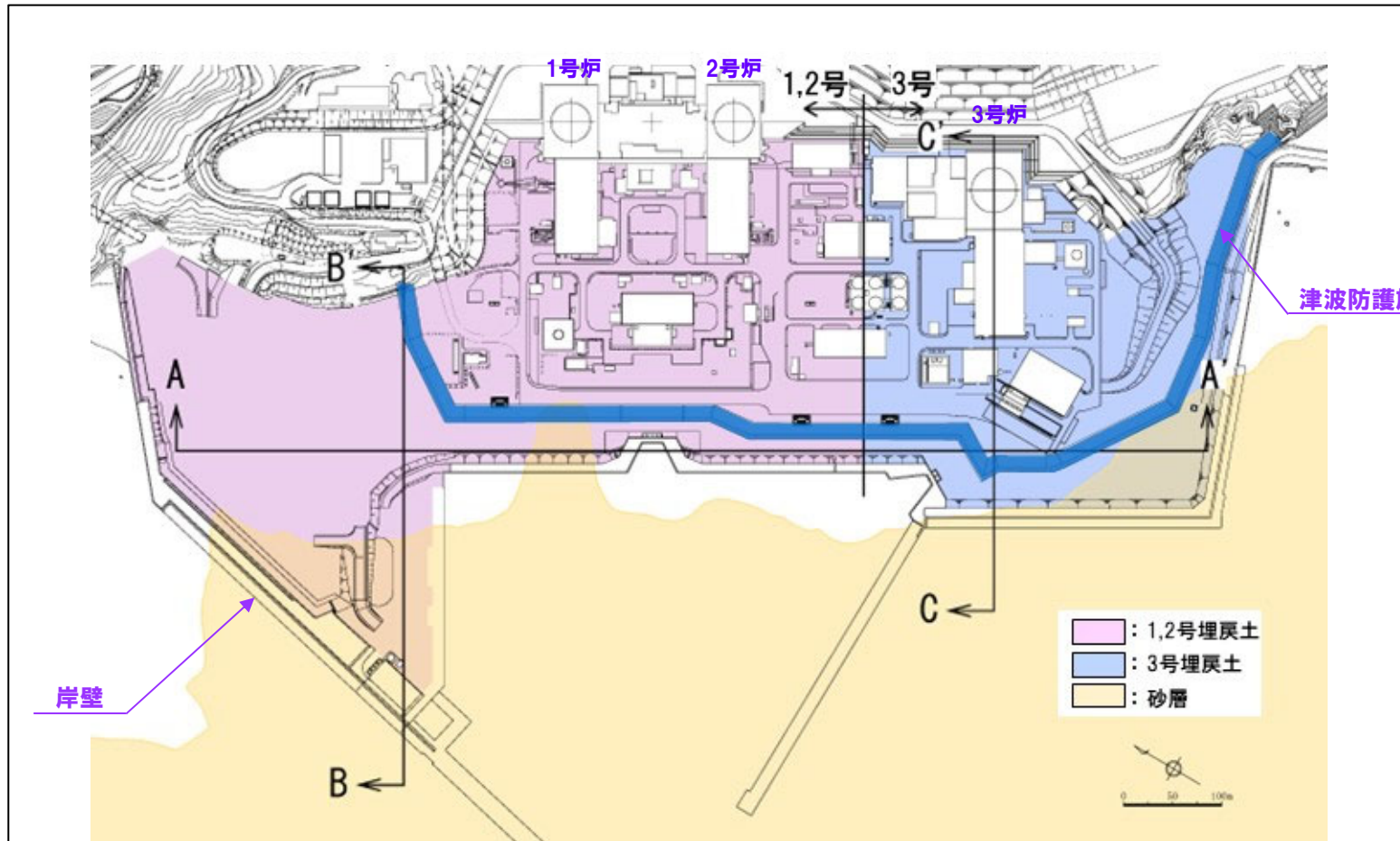
2. 4. 5 沖積層に相当する砂層の分類

沖積層に相当する砂層の分類について (2/3)

再掲 (R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について (設計基準対象施設等) 第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-5」抜粋

※紫字を今回加筆。



第 2.1-2 図 埋戻土の分布範囲並びに地質断面位置図



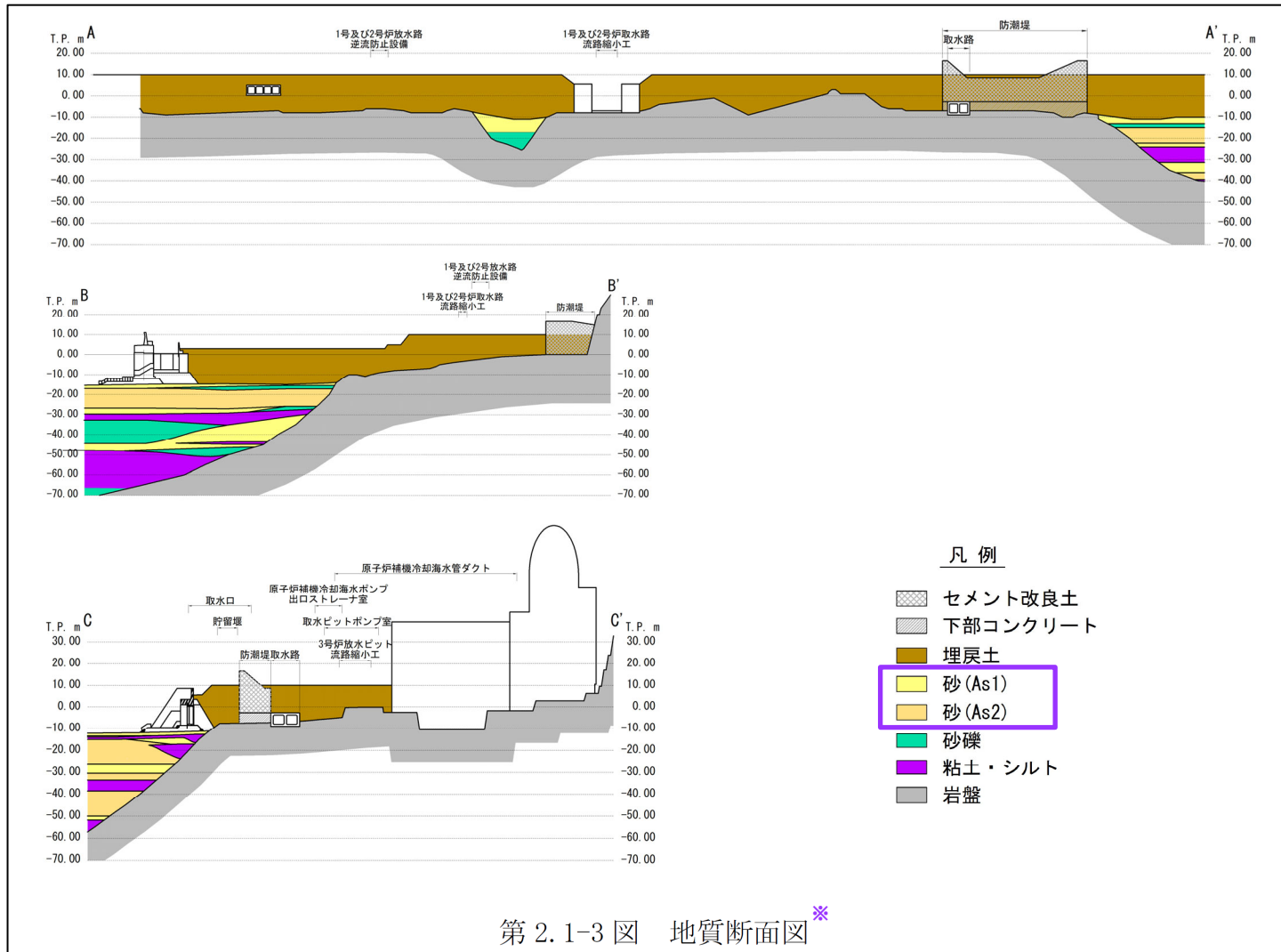
2.4.5 沖積層に相当する砂層の分類

沖積層に相当する砂層の分類について (3/3)

再掲 (R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について (設計基準対象施設等) 第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-5」抜粋

※紫枠及び注釈を今回加筆。



第 2.1-3 図 地質断面図\*

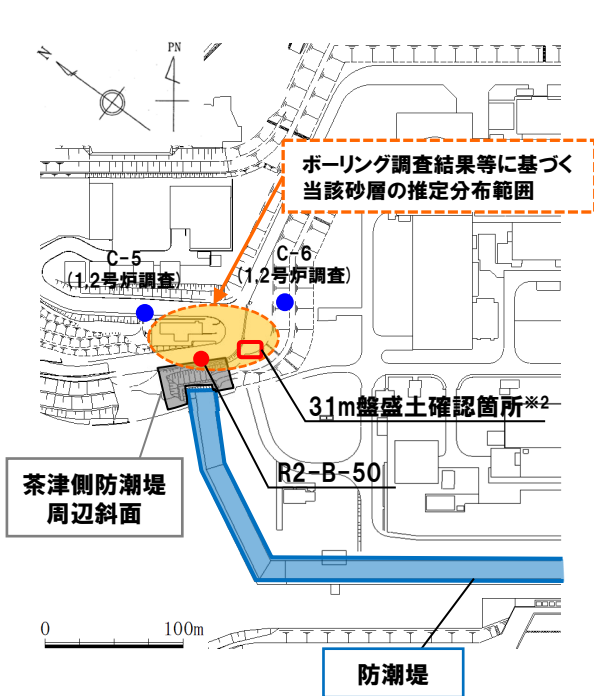
※断面位置は前頁参照。

2.4.6 Dsの解析用物性値の設定に関する補足

Dsの解析用物性値の設定について

- 茶津側防潮堤周辺斜面付近で実施したR2-B-50ボーリング(孔口標高約30m)においては、基盤岩の上位に、砂、シルト混じり砂、砂及び礫(碎石)が認められる。
- 砂及びシルト混じり砂については、その層相及び近接する31m盤盛土確認箇所との位置関係から、MIS5eより古い海成層※1と判断される。
- 当該層の解析用物性値については、以下の理由から、ボーリングコアから採取した試料を用いて、各種土質試験を行うこと等により設定した。
  - ・当該層は、耐震重要施設である防潮堤の北側端部の周辺斜面に分布する。
  - ・当該層は、砂を主体とする単層である。

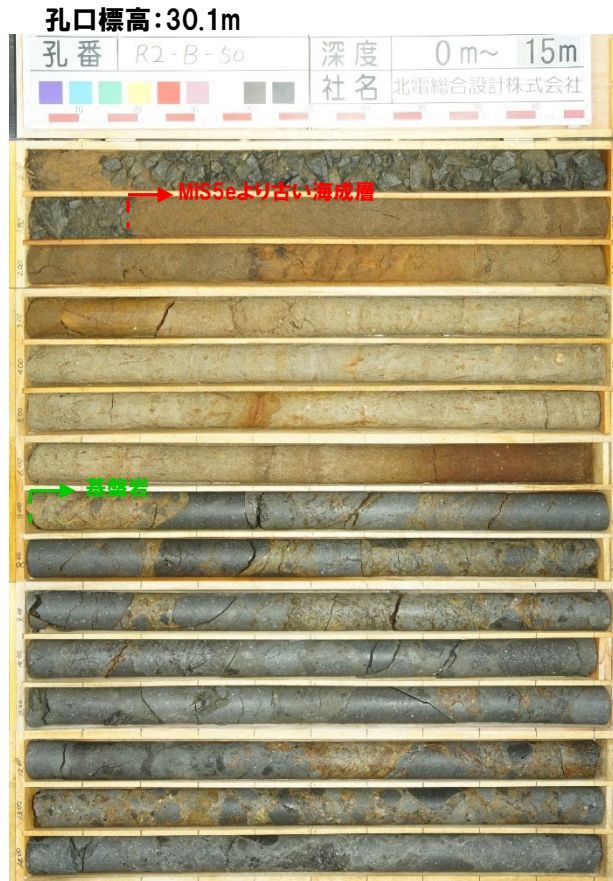
※1 31m盤に認められる海成堆積物は、積丹半島西岸におけるMm1段丘堆積物の上面標高及びMIS5eの旧汀線高度より高いことから、MIS5eより古い海成層に区分される(R3.7.2審査会合資料「泊発電所3号炉地盤(敷地の地質・地質構造)に関するコメント回答(補足説明資料)」4章参照)。



※2 R2.9.10.11現地調査資料「3.4 開削調査箇所(南側)付近における敷地造成について」参照。

- 開削調査で当該砂層を確認した地点
- ボーリング調査で当該砂層を確認した地点
- ボーリング調査で当該砂層が認められなかった地点

調査位置図及びDsの推定分布範囲



コア写真 (R2-B-50:深度0~15m)

R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50		R2-B-50	
標	尺	高	度	柱	地	色	記	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
(m)	(m)	(m)	(m)	図	名	調	調	調	調	調	調	調	調	調	調	調	調	調	調
28.91	1.19			砂	細砂	深さ0.00~0.15m:シルトが混じる細粒砂。植物根混入。 深さ0.15~1.19m:粒径φ70mm以下の角礫からなる。根層は安山岩。													
27.70	2.40			砂	細砂	深さ2.40~2.42m:粒径φ5mm以下の暗灰色を呈する重円~円礫が混入。													
27.32	2.78			砂	中粒砂	中粒砂が混入する細粒砂で、シルトがわずかに混入する。													
26.68	3.24			砂	細粒砂	細粒砂。下面境界は不明瞭。													
				シルト混じり砂	シルトが混入する細粒砂	シルトが混入する細粒砂。 粒径φ20mm以下の重円礫が点在する。根層は細粒な凝灰岩主体。													
				シルト混じり砂	深さ5.16~5.26m:ほぼ水平にシルトが挟む。														
23.70	6.40			シルト混じり砂	深さ5.80~6.00m:シルトが挟む。														
23.41	6.68			凝灰	深さ6.40~6.68m:砂層が不規則に挟み、境界が不明瞭。														
23.10	7.00			砂	凝灰	深さ6.68~7.00m:深さ10mm以下(最大粒径φ450mm)の安山岩礫主体の凝灰角礫岩。稀にデイスイト礫が混入する。割れ目は少ない。 深さ7.00~10.15m:基質部と安山岩礫の一部・割れ目に沿って褐色を呈する。													
				凝灰	凝灰														
19.95	10.15			凝灰	凝灰														
18.90	11.20			凝灰	凝灰														
18.40	11.70			凝灰	凝灰														
				凝灰	凝灰														
16.11	13.99			凝灰	凝灰														
15.30	14.80			凝灰	凝灰														

柱状図 (R2-B-50:深度0~15m)

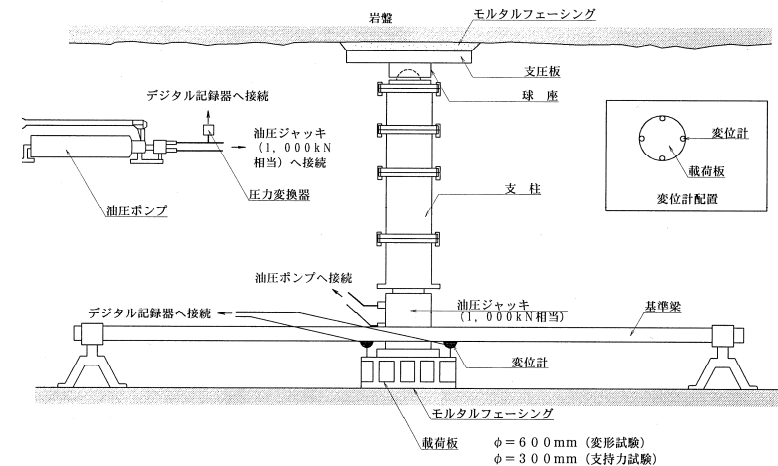
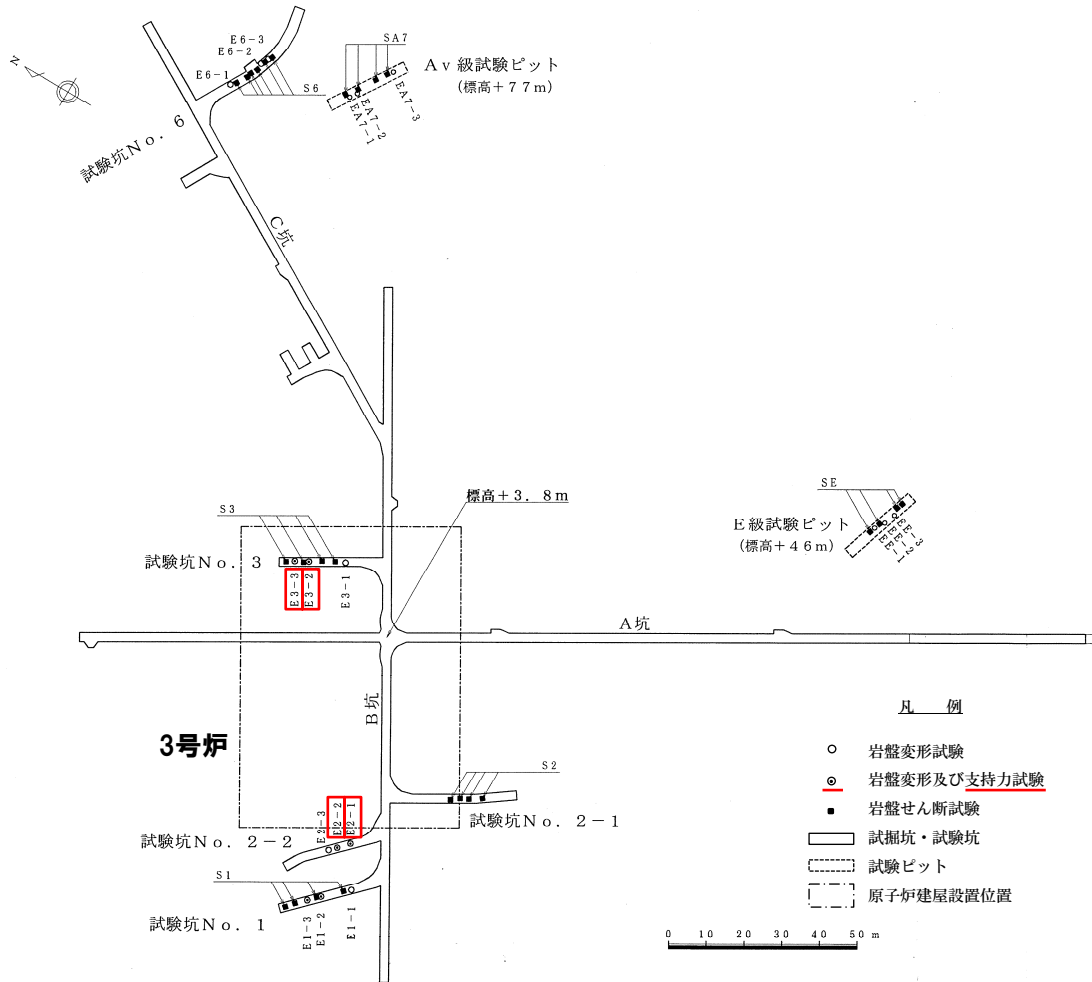


1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b>	<b>P. 17</b>
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
<b>2.5 地盤の支持力</b>	<b>P. 93</b>
2.6 埋戻土の分布範囲	P.101
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

# 2.5 地盤の支持力

## ① 極限支持力: 安山岩 (1/3)

○安山岩 (A<sub>I</sub> 級及びA<sub>III</sub> 級) の極限支持力は、試掘坑内で実施した支持力試験の試験結果を用いて設定した (試験結果は、次頁参照)。



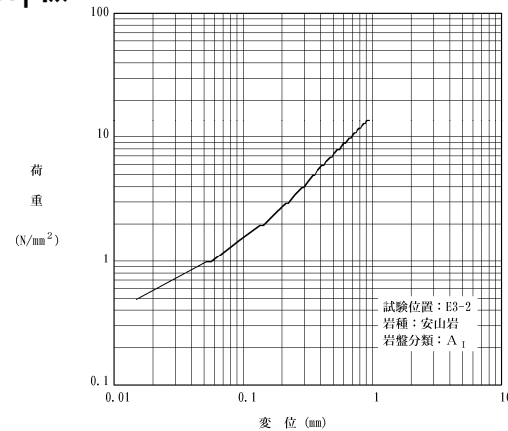
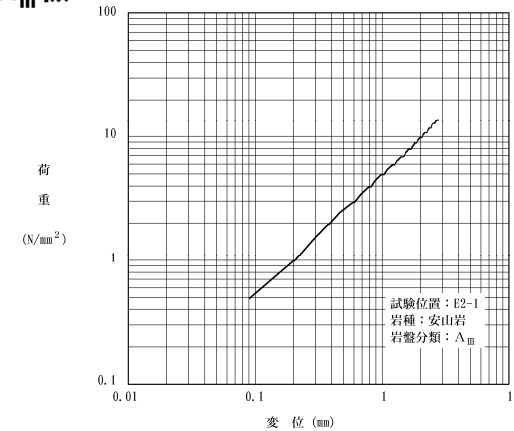
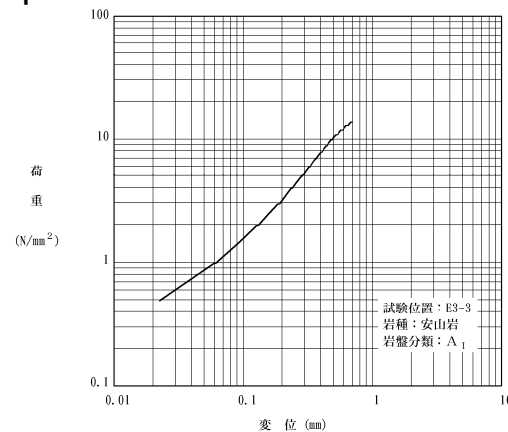
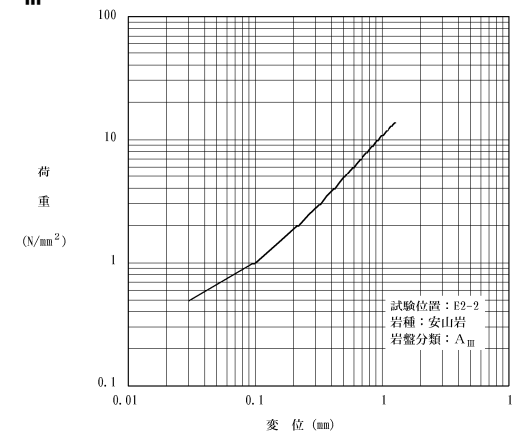
岩盤分類	試験位置
A <sub>I</sub> 級	E3-2
	E3-3
A <sub>III</sub> 級	E2-1
	E2-2

## 2.5 地盤の支持力

### ①極限支持力:安山岩(2/3)

- 安山岩A<sub>I</sub>級及びA<sub>III</sub>級の極限支持力は、支持力試験結果において载荷強さ13.7N/mm<sup>2</sup>までの範囲では破壊には至らず、変曲点も認められないことから、全て13.7N/mm<sup>2</sup>以上とし、支持力の評価基準値を13.7N/mm<sup>2</sup>と設定した。
- 安山岩A<sub>II</sub>級は、分布が小さいことから、下位岩級(A<sub>III</sub>級)の極限支持力を物性値として使用し、評価基準値を13.7N/mm<sup>2</sup>と設定した(詳細は、P22参照)。

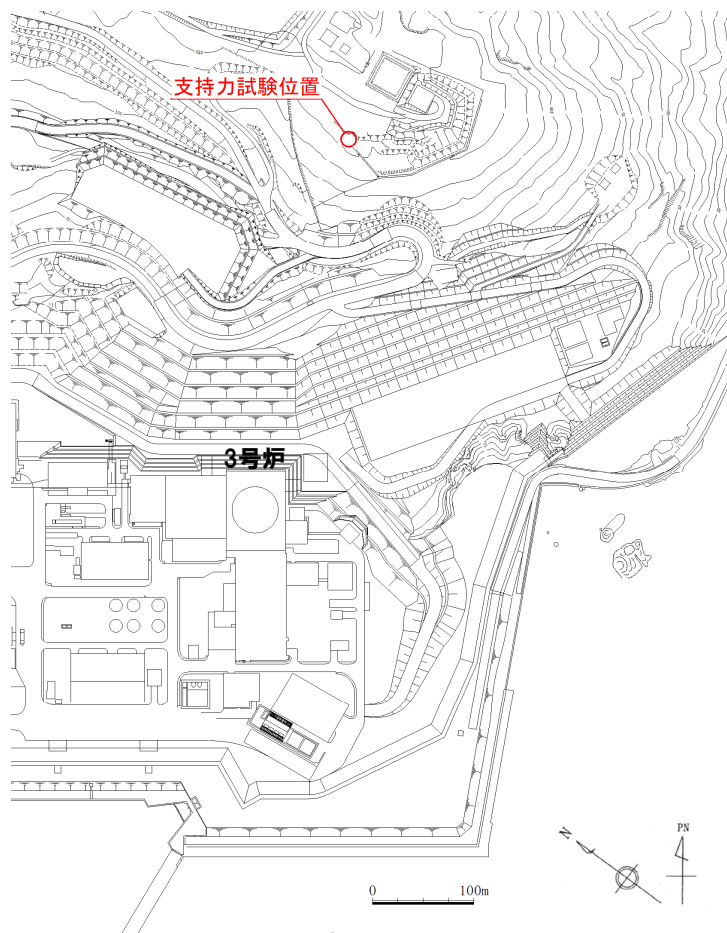
#### 【極限支持力】

A<sub>I</sub>級A<sub>III</sub>級A<sub>I</sub>級A<sub>III</sub>級

# 2.5 地盤の支持力

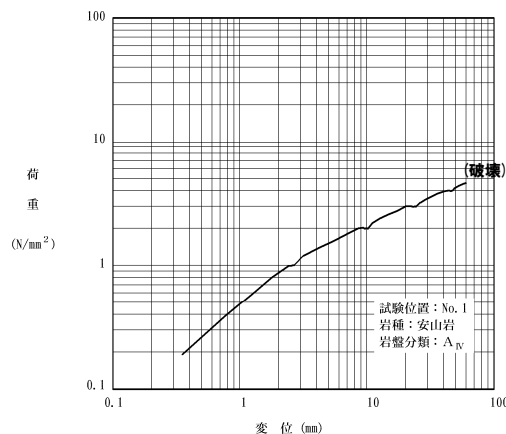
## ①極限支持力:安山岩 (3/3)

○3号炉建設時に安山岩A<sub>IV</sub>級の支持力試験を実施していないことから、今回の設置変更許可申請以降、新たに支持力試験を実施した。  
 ○安山岩A<sub>IV</sub>級の極限支持力は、支持力試験結果から、載荷した最大荷重の平均値は4.4N/mm<sup>2</sup>であることから、評価基準値を4.4N/mm<sup>2</sup>と設定した。

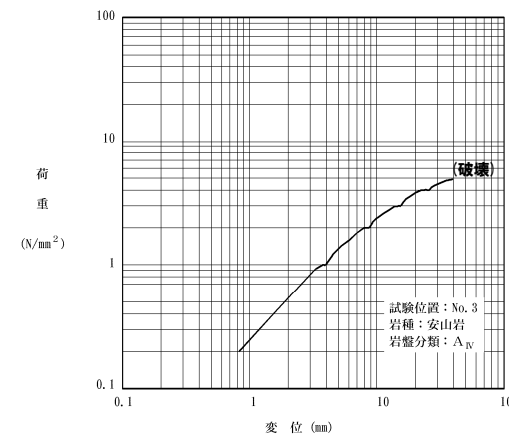


支持力試験位置図

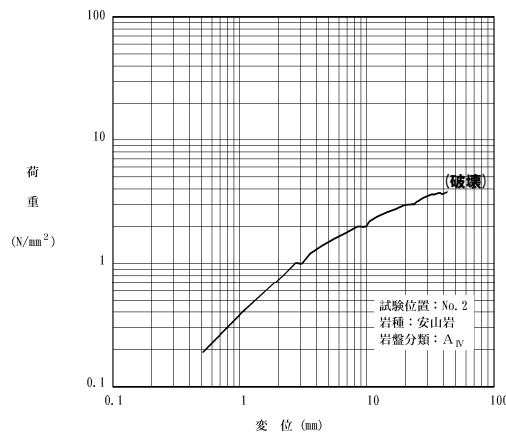
【極限支持力】  
A<sub>IV</sub>級



A<sub>IV</sub>級



A<sub>IV</sub>級



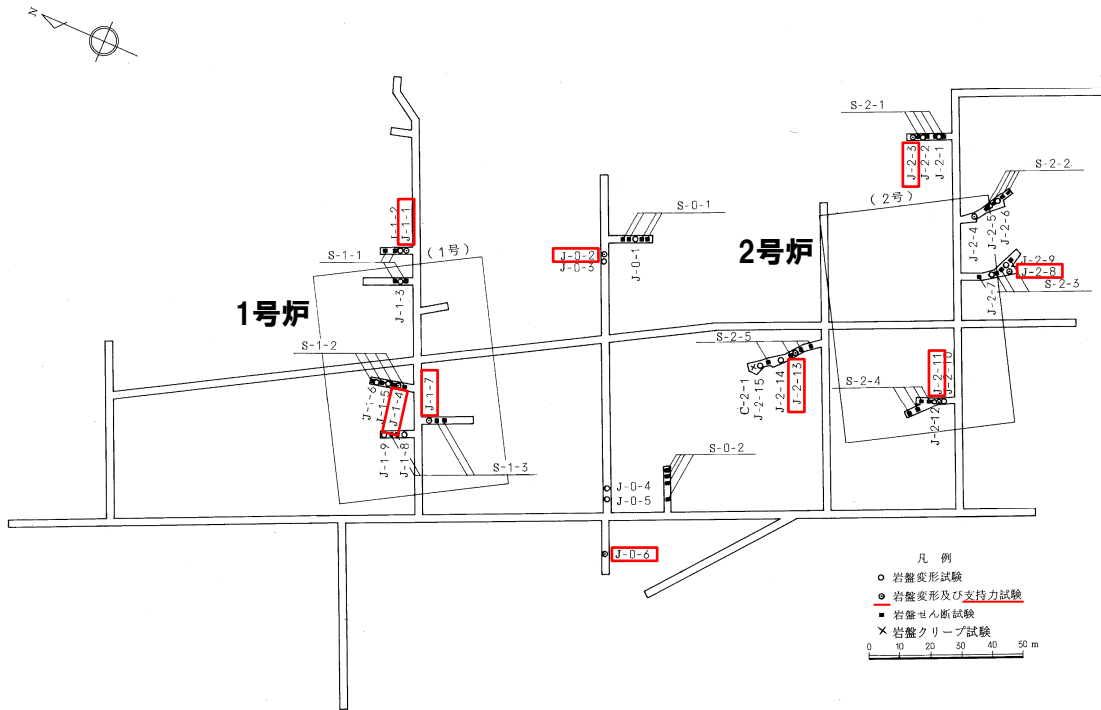
岩盤分類	試験位置	最大荷重 (N/mm <sup>2</sup> )	平均値
A <sub>IV</sub> 級	No.1	4.59	4.4
	No.2	3.79	
	No.3	4.89	

余白

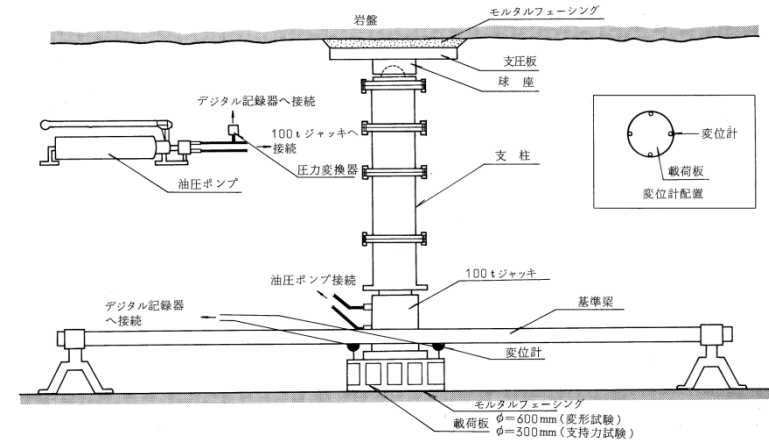
# 2.5 地盤の支持力

## ②極限支持力:火砕岩類(1/2)

○火砕岩類(A級～D級)の極限支持力は、試掘坑内で実施した支持力試験の試験結果を用いて設定した(試験結果は、次頁参照)。



支持力試験位置図



支持力試験概要

岩盤分類	試験位置
A級	J-1-1
	J-1-4
B級	J-1-7
	J-2-8
	J-2-11

岩盤分類	試験位置
C級	J-0-2
	J-2-3
D級	J-0-6

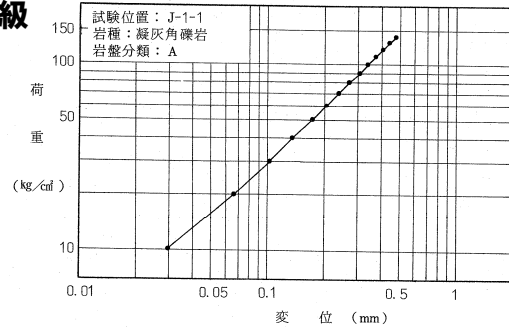
# 2.5 地盤の支持力

## ②極限支持力:火砕岩類 (2/2)

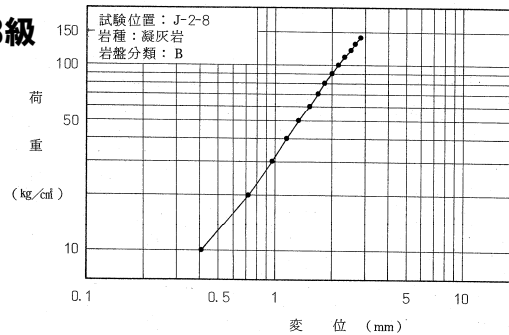
- 火砕岩類A級～C級の極限支持力は、支持力試験結果において載荷強さ13.7N/mm<sup>2</sup>までの範囲では破壊には至らず、変曲点も認められないことから、全て13.7N/mm<sup>2</sup>以上とし、評価基準値を13.7N/mm<sup>2</sup>と設定した。
- 火砕岩類D級の極限支持力は、載荷した最大荷重は11.7N/mm<sup>2</sup>であることから、評価基準値を11.7N/mm<sup>2</sup>と設定した。

### 【極限支持力】

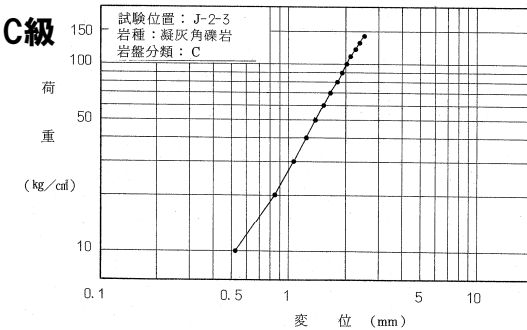
#### A級



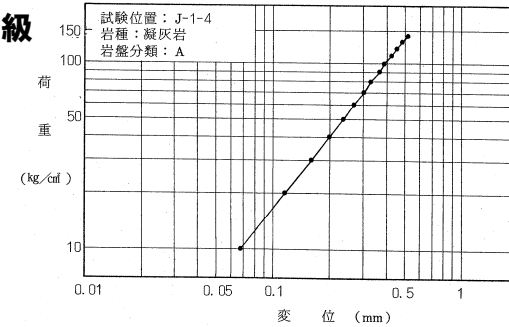
#### B級



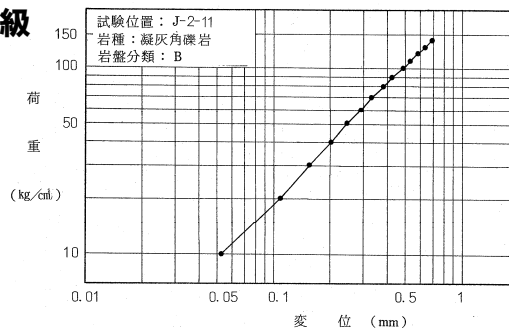
#### C級



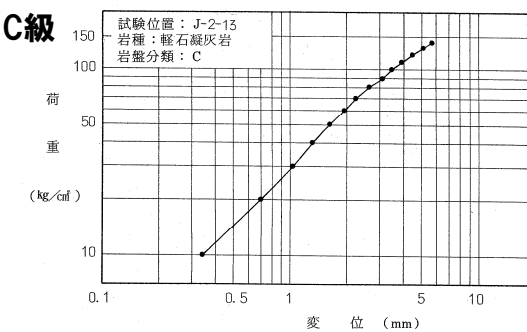
#### A級



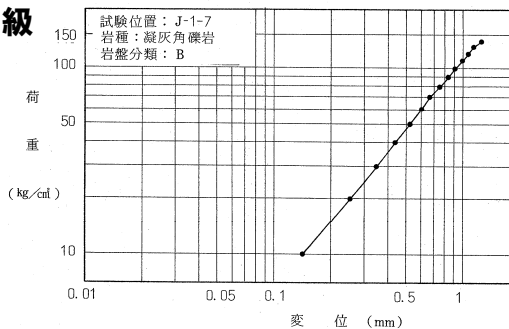
#### B級



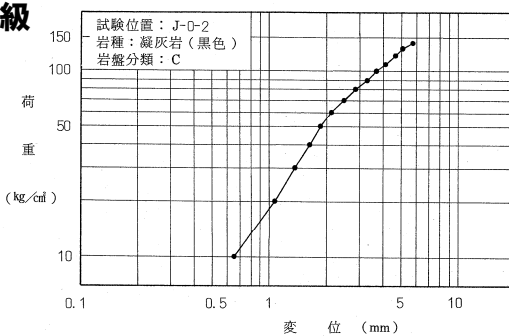
#### C級



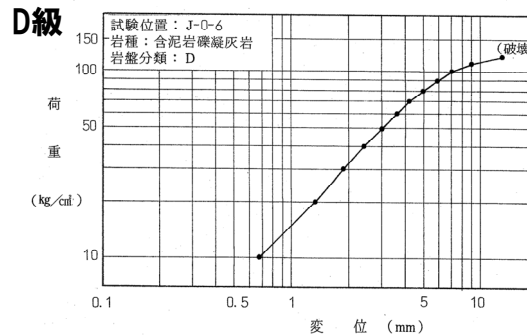
#### B級



#### C級



#### D級



余白



1. 地質の概要に関する補足	P. 3
1.1 断層の分布	P. 3
1.2 異方性	P. 9
1.3 岩盤分類	P. 11
<b>2. 解析用物性値に関する補足</b>	<b>P. 17</b>
2.1 3号炉解析用物性値	P. 17
2.2 1,2号炉解析用物性値	P. 45
2.3 断層の解析用物性値	P. 59
2.4 As1, As2, Ac及びDsの解析用物性値	P. 75
2.5 地盤の支持力	P. 93
<b>2.6 埋戻土の分布範囲</b>	<b>P.101</b>
3. 安定性評価に関する補足	P.107
3.1 地中構造物の設置状況	P.107
3.2 建屋のモデル化方法	P.121
3.3 応力状態を考慮したすべり面	P.129
3.4 すべり安全率一覧	P.155
3.5 周辺への進行性破壊等の検討(静的非線形解析)	P.205
4. 三次元浸透流解析の解析条件(第1055回審査会合(R4.6.23)資料抜粋)	P.221
参考文献	P.230

## 2.6 埋戻土の分布範囲

### 1,2号埋戻土及び3号埋戻土の区分けについて(1/4)

再掲(R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について(設計基準対象施設等)  
第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-添付7-1」抜粋

※紫下線を今回加筆。

#### 1. 1,2号埋戻土及び3号埋戻土の区分けについて

発電所の埋立地盤については、敷地造成時に発生した掘削岩砕からなる埋立地盤(人工地盤)が主体であり、施工時期、材料により1,2号埋戻土、3号埋戻土に区分される。

1,2号炉建設時における埋立範囲を添付7-1図に示す。

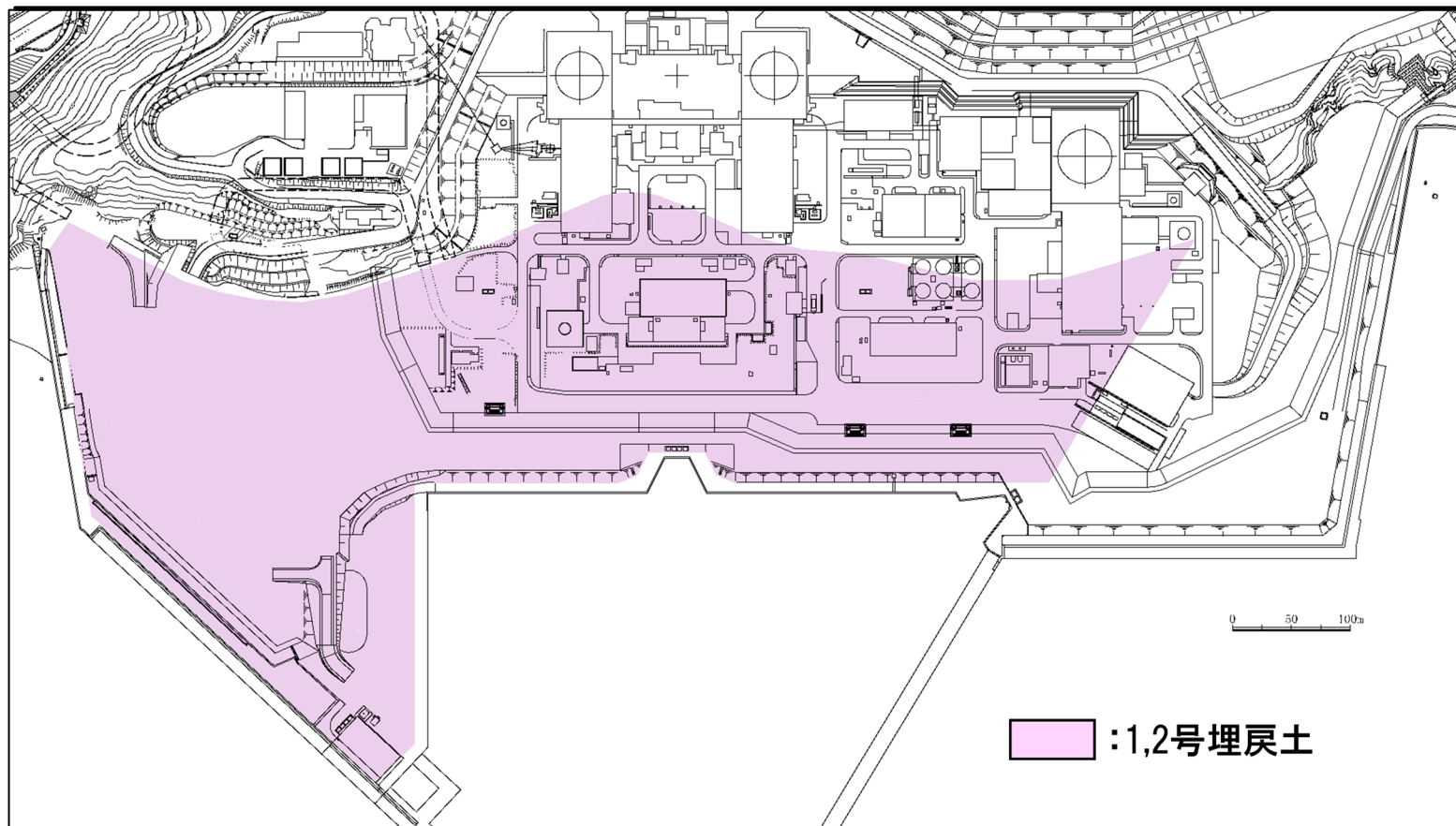
1,2号炉建設時における埋立には敷地造成時に発生した火砕岩主体の岩砕地盤を材料としている。

## 2.6 埋戻土の分布範囲

### 1,2号埋戻土及び3号埋戻土の区分けについて(2/4)

再掲(R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について(設計基準対象施設等)  
第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-添付7-2」抜粋



添付 7-1 図 1, 2 号炉建設時の埋立範囲図

## 2.6 埋戻土の分布範囲

### 1,2号埋戻土及び3号埋戻土の区分けについて(3/4)

再掲(R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について(設計基準対象施設等)  
第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-添付7-1」抜粋

※紫下線を今回加筆。

3号炉建設時の埋立及び掘削範囲図を添付7-2図に示す。

3号炉建設時における埋立には敷地造成時に発生した安山岩主体の岩砕地盤を材料としている。

3号炉建設時には、1,2号炉建設時に埋立を行った範囲と、原子炉建屋、タービン建屋等の基礎掘削及び取放水設備掘削範囲が重複しており、その重複範囲は掘削・埋戻しにより1,2号埋戻土から3号埋戻土に置き換わっている。1,2号炉建設時の埋立範囲との重複範囲は添付7-2図に示すとおりである。

したがって、埋戻土の区分けは添付7-2図に示すとおりであり、その境界は概ね直線的に区分できる。

## 2.6 埋戻土の分布範囲

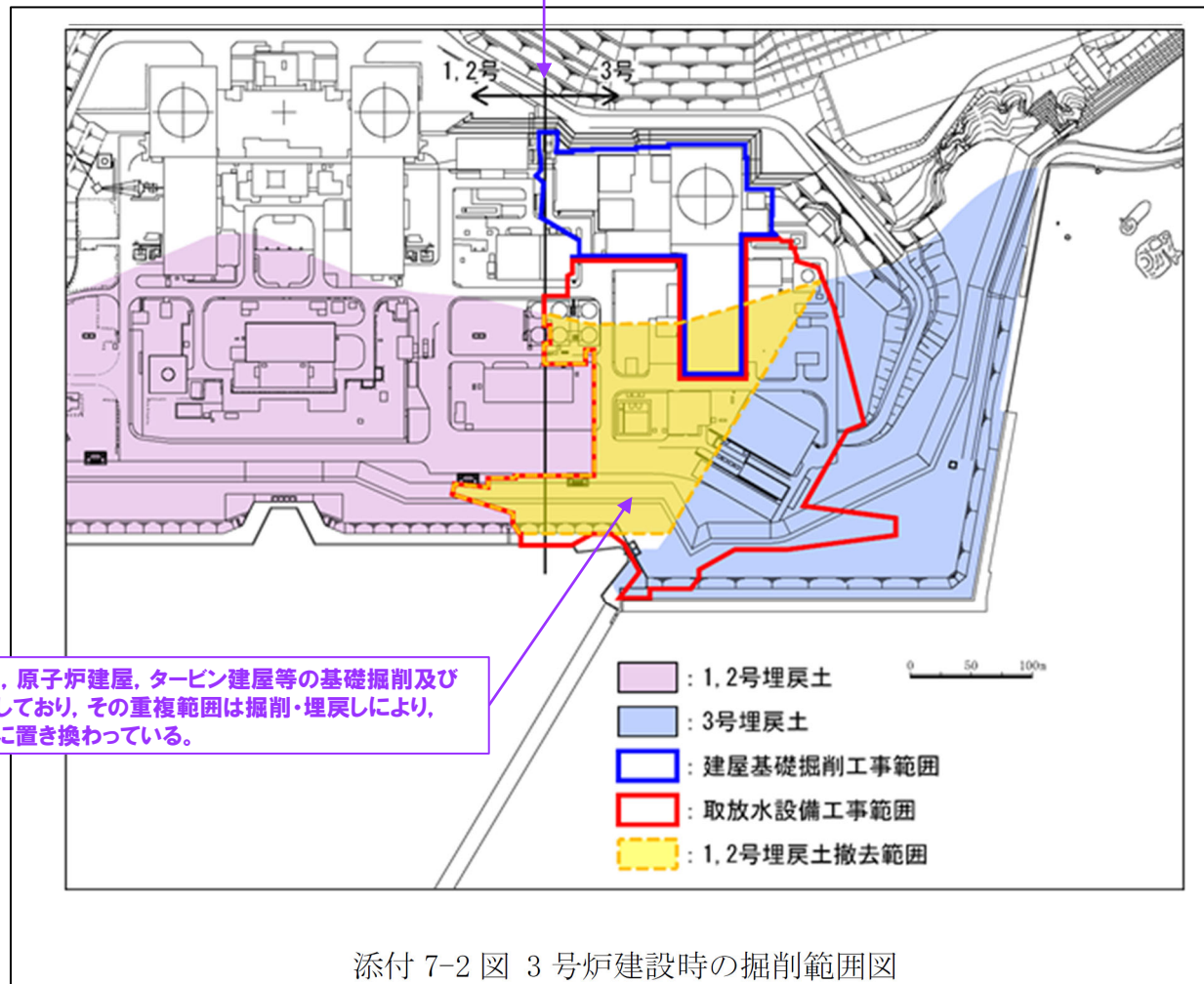
### 1,2号埋戻土及び3号埋戻土の区分けについて (4/4)

再掲 (R5/7/4審査会合資料)

R5.7.4審査会合資料「泊発電所3号炉 設置許可基準規則等への適合状況について (設計基準対象施設等) 第4条 地震による損傷の防止 4条-別紙-9-添付7-2」抜粋

※紫字を今回加筆。

1,2号埋戻土と3号埋戻土の境界は概ね直線的に区分できる。



添付 7-2 図 3号炉建設時の掘削範囲図

余白